史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅵ

― 第41～53次発掘調査 ―

２０２２

鳥取市教育委員会

史跡鳥取城跡附太閤ヶ平
発掘調査報告書Ⅵ

― 第41～53次発掘調査 ―

２０２２

鳥取市教育委員会

序

鳥取市の中心市街地にそびえる久松山に所在する鳥取城跡は、鳥取藩32万石の政庁として栄えた面影を今に伝える貴重な史跡であり、先人たちの努力により、今日までその様相が伝えられてきました。

文化財は、地域の財産として後世に伝えるため保護・保存に努め積極的な活動を図って行かなければなりません。鳥取市では、現在『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存整備基本計画』を策定し、関係各機関・専門家の指導を得て長期的な保存修理事業に取り組んでいます。今回の報告は、その一環である大手登城路復元整備計画に基づき、国庫補助金及び県補助金を受けて、平成29～令和２年度に実施した史跡鳥取城跡第41～53次発掘調査の記録です。

本報告書が、私たち郷土の歴史の解明や今後の調査研究の一助となれば幸いです。

令和４年３月

鳥取市教育委員会
教育長　尾室　高志

例　言

1．本書は平成29年度(2017)～令和２年度(2020)に国・県補助金を得て、鳥取市教育委員会が実施した鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査の記録である。
2．平成29年度(2017)に実施した調査は、鳥取城跡第41・42①次調査である。
3．平成30年度(2018)に実施した調査は、鳥取城跡第42②～45次調査である。
4．平成31年度(2019)に実施した調査は、鳥取城跡第46～51次調査である。
5．令和２年度(2020)に実施した調査は、鳥取城跡第52・53次調査である。
6．本書における遺構図はすべて磁北を示し、レベルは基本的に海抜標高である。
7．発掘調査によって作成された記録類及び出土遺物は鳥取市教育委員会が保管している。
8．発掘調査の体制は以下のとおりである。
　調査主体　鳥取市教育委員会
　事務局　　鳥取市教育委員会事務局文化財課
　調査担当　坂田邦彦、山田真宏(第44次調査)

本 文 目 次

第１章　調査の経緯と目的 …… 1
第１節　整備に至る経緯 …… 1
第２節　調査体制 …… 2
１．発掘および試掘調査 …… 2
２．報告書作成 …… 3
第３節　指定の詳細 …… 4
第４節　保存整備計画の概要 …… 5
１．事業の目的 …… 5
２．事業の方針 …… 5
第５節　大手登城路復元整備計画の概要 …… 6
１．経緯 …… 6
２．大手登城路の現状 …… 6
３．復元整備の目的 …… 6
４．復元整備の基本方針 …… 6
第６節　鳥取城跡における石垣保存修理事業 7
第７節　既往の発掘調査 …… 11
第２章　立地と環境 …… 15
第１節　遺跡の周辺環境 …… 15
１．地理的環境 …… 15
２．歴史的環境 …… 16
３．在りし日の姿 …… 24
４．鳥取城跡関連年表 …… 24
第３章　調査の成果 …… 27
第１節　調査の方法 …… 27
１．調査区の目的 …… 27
２．名称及び出土遺物について …… 27
第２節　第41次調査(石垣内トレンチ) …… 29
第１トレンチ(Tr1) …… 29
１．概　要 …… 29
２．遺　構 …… 29
３．遺　物 …… 31
第２トレンチ(Tr2) …… 32
４．遺　構 …… 32
５．遺　物 …… 32
第３節　第42次調査 …… 35
１．概　要 …… 35
第１調査区 …… 35
２．遺　構 …… 35
第２調査区 …… 36
３．遺　構 …… 36
４．遺　物 …… 36
第４節　第43･49次調査 …… 40
１．概　要 …… 40
２．遺　構 …… 45
(１)登城路面 …… 45
(２)上層礎石 …… 45
(３)礎石根固め石 …… 46
(４)水路・瓦溝 …… 50
(５)下層遺構 …… 56
３．遺　物 …… 56
第５節　第44次調査 …… 62
１．概　要 …… 62
第１トレンチ(30Tr1) …… 62
２．遺　構 …… 62
第２トレンチ(30Tr2) …… 65
３．遺　構 …… 65
第３トレンチ(30Tr3) …… 65
４．遺　構 …… 65
第４トレンチ(30Tr4) …… 65
５．遺　構 …… 65
６．まとめ …… 66
７．遺　物 …… 66
第６節　第45･47･52次調査 …… 68
１．概　要 …… 68
２．遺　構 …… 69
(１)礎石取り外し前 …… 69
(２)礎石取り外し後 …… 70
(３)トレンチ土層 …… 74
３．遺　物 …… 78
第７節　第46次調査 …… 83
１．概　要 …… 83
２．遺　構 …… 83
(１)第１トレンチ(Tr1)および石垣 …… 83
(２)第２トレンチ(Tr2)および石垣 …… 84
(３)トレンチＡ～Ｃ面土層 …… 84
(４)トレンチＤ･Ｅ面土層 …… 84
３．遺　物 …… 90
(１)第１トレンチ出土遺物 …… 90

（2）第２トレンチ出土遺物 …… 93
第８節　第48次調査 …… 94
１．概　要 …… 94
２．遺　構 …… 94
３．遺　物 …… 94
第９節　第50次調査 …… 97
１．概　要 …… 97
第１トレンチ（Tr1） …… 97
２．遺　構 …… 97
３．遺　物 …… 97
第２トレンチ（Tr2） …… 98
４．遺　構 …… 98
５．遺　物 …… 100
第３トレンチ（Tr3） …… 101
６．遺　構 …… 101
７．遺　物 …… 103
第４トレンチ（Tr4） …… 103
８．遺　構 …… 103
９．遺　物 …… 103
第５トレンチ（Tr5） …… 104
10．遺　構 …… 104
11．遺　物 …… 106
第10節　第51次調査 …… 107
１．概　要 …… 107
第１トレンチ（Tr1） …… 107
２．遺　構 …… 107
第２トレンチ（Tr2） …… 107
３．遺　構 …… 107
第３トレンチ（Tr3） …… 108
４．遺　構 …… 108
５．遺　物 …… 108
第11節　第53次調査 …… 110
１．概　要 …… 110
２．遺　構 …… 110
３．遺　物 …… 112
第12節　鳥取城跡土壌分析業務報告 …… 113
１．はじめに …… 114
２．試料 …… 114
３．寄生虫卵分析・花粉分析 …… 114
４．種実・動物遺存体・昆虫同定 …… 117

挿　図　目　次

第１図　史跡鳥取城跡附太閤ヶ平史跡指定範囲４
第２図　復元整備イメージ …… ６
第３図　石垣修復箇所 …… 10
第４図　既往の発掘調査位置（第53次調査まで）14
第５図　周辺環境 …… 15
第６図　因幡民談記　秀吉公鳥取城攻陣取図 … 17
第７図　鳥取城攻め陣城群分布図 …… 17
第８図　太閤ヶ平周辺の縄張り図 …… 18
第９図　外神砦縄張り図 …… 19
第10図　因州鳥取之城之図（部分） …… 20
第11図　因幡国鳥取絵図（部分） …… 20
第12図　因幡国鳥取城廻絵図（部分） …… 20
第13図　鳥取城修覆願絵図（部分） …… 21
第14図　鳥取城修覆願絵図（部分） …… 22
第15図　大手登城路周辺調査位置図 …… 28
第16図　第41次調査石垣内トレンチ位置図 …… 29
第17図　第41次調査石垣内第１トレンチ実測図30
第18図　第41次調査石垣内第１トレンチ出土遺物実測図 …… 31
第19図　第41次調査石垣内第２トレンチ実測図33
第20図　第41次調査石垣内第２トレンチ出土遺物実測図 …… 34
第21図　第42次調査区位置図 …… 35
第22図　第42次調査第１調査区土層断面図 ~ 37·38
第23図　第42次調査第２調査区土層断面図 …… 39
第24図　第43·49次調査区位置図 …… 40
第25図　第43·49次調査平面図 …… 41·42
第26図　第43·49次調査オルソ図 …… 43·44
第27図　第18次調査状況（再録）・第49次調査出土遺物実測図 …… 47

第28図　太鼓御門礎石根固め石実測図 …… 48
第29図　溝状遺構１実測図 …… 49
第30図　溝状遺構２・雨落ち状遺構実測図 …… 51
第31図　溝状遺構４～６・土坑・ピット１実測図 52
第32図　石列実測図 …… 53
第33図　ピット２実測図 …… 54
第34図　下層礎石実測図（Tr3以外は再録） …… 55
第35図　第43次調査出土遺物実測図１ …… 57
第36図　第43次調査出土遺物実測図２ …… 58
第37図　第43次調査出土遺物実測図３ …… 59
第38図　第43次調査出土遺物実測図４ …… 60
第39図　第43次調査出土遺物実測図５ …… 61
第40図　第44次調査区位置図 …… 62
第41図　第44次調査第１トレンチ実測図 …… 63
第42図　第44次調査第２トレンチ実測図 …… 64
第43図　第44次調査第３・４トレンチ実測図 …… 67
第44図　第45・47・52次調査区位置図 …… 69
第45図　第45・47・52次調査平面図 …… 71
第46図　第45・47・52次調査平面オルソ・断面図 - 72
第47図　第45・47・52次調査出土遺物実測図１ …… 75
第48図　第45・47・52次調査出土遺物実測図２ …… 76
第49図　第45・47・52次調査出土遺物実測図３ …… 77
第50図　第45・47・52次調査出土遺物実測図４ …… 79
第51図　第45・47・52次調査出土遺物実測図５ …… 80
第52図　第45・47・52次調査出土遺物実測図６ …… 81
第53図　第45・47・52次調査出土遺物実測図７ …… 82
第54図　第46次調査区位置図 …… 83
第55図　第46次調査平面・立面・オルソ図 …… 85・86
第56図　第46次調査トレンチ土層・石垣立面・オルソ図 …… 87
第57図　第46次調査第１トレンチ出土遺物実測図１ …… 88
第58図　第46次調査第１トレンチ出土遺物実測図２ …… 89
第59図　第46次調査第１トレンチ出土遺物実測図３ …… 90
第60図　第46次調査第１トレンチ出土遺物実測図４ …… 91
第61図　第46次調査第１トレンチ出土遺物実測図５ …… 92
第62図　第46次調査第２トレンチ出土遺物実測図 …… 92
第63図　第48次調査区位置図 …… 94
第64図　第48次調査平面・オルソ図 …… 95
第65図　第48次調査立面・オルソ図 …… 96
第66図　第48次調査出土遺物実測図 …… 96
第67図　第50次調査区位置図 …… 97
第68図　第50次調査トレンチ配置図 …… 98
第69図　第50次調査第１トレンチ実測図 …… 98
第70図　第50次調査第１トレンチ出土遺物実測図１ …… 99
第71図　第50次調査第１トレンチ出土遺物実測図２ …… 100
第72図　第50次調査第２トレンチ実測図 …… 100
第73図　第50次調査第２トレンチ出土遺物実測図 …… 101
第74図　第50次調査第３トレンチ実測図 …… 101
第75図　第50次調査第３トレンチ出土遺物実測図 …… 102
第76図　第50次調査第４トレンチ実測図 …… 103
第77図　第50次調査第４トレンチ出土遺物実測図 …… 104
第78図　第50次調査第５トレンチ実測図 …… 104
第79図　第50次調査第５トレンチ出土遺物実測図１ …… 105
第80図　第50次調査第５トレンチ出土遺物実測図２ …… 106
第81図　第51次調査区位置図 …… 107
第82図　第51次調査トレンチ配置図 …… 108
第83図　第51次調査トレンチ実測図 …… 109
第84図　第51次調査出土遺物実測図 …… 109
第85図　第53次調査区位置図 …… 110
第86図　第53次調査区実測図 …… 111
第87図　第53次調査出土遺物実測図 …… 112
第88図　遺物計測方法 …… 136

表目次

表1　方針の概要 …… 5
表2　保存修理・整備履歴1 …… 8
表3　保存修理・整備履歴2 …… 9
表4　鳥取城跡発掘調査一覧1 …… 12
表5　鳥取城跡発掘調査一覧2 …… 13
表6　鳥取城跡関連年表1 …… 24
表7　鳥取城跡関連年表2 …… 25
表8　鳥取城跡関連年表3 …… 26
表9　遺物観察表1（土器・陶磁器） …… 132
表10　遺物観察表2（土器・陶磁器） …… 133
表11　遺物観察表3（瓦） …… 133
表12　遺物観察表4（瓦） …… 134
表13　遺物観察表5（金属製品） …… 134
表14　遺物観察表6（石製品） …… 134
表15　遺物観察表7（骨製品） …… 134
表16　遺物観察表8（木製品） …… 135

写真目次

写真1　櫓蔵下段石垣 …… 19
写真2　石黒火事とみられる火災痕（第34次調査） …… 21
写真3　拡張された三ノ丸と青木馬場の法面 …… 21
写真4　太鼓御門の嵩上げ …… 21
写真5　太鼓御門前切石積石垣 …… 22
写真6　明治元年架橋の擬宝珠橋 …… 22
写真7　解体中の鳥取城（明治8～12年） …… 22
写真8　鳥取大地震で崩壊した太鼓御門石垣 …… 23
写真9　二ノ丸三階櫓石垣修理（昭和36年） …… 23
写真10　擬宝珠橋渡り初め（平成30年） …… 23
写真11　中ノ御門完成式（令和2年度） …… 23
写真12　中ノ御門（手前）太鼓御門（奥） …… 24
写真13　解体途中の鳥取城 …… 24
写真14　残存する土塀 …… 24
写真15　古写真と現況 …… 26
写真16　第2トレンチ焼土層検出状況 …… 32
写真17　戦前の校門 …… 40
写真18　第18次調査状況 …… 40
写真19　礎石周辺敷石取り外し状況 …… 45
写真20　上層礎石1設置状況（第18次） …… 45
写真21　上層礎石2設置状況 …… 45
写真22　上層礎石2取り外し状況 …… 45
写真23　上層礎石3設置状況 …… 46
写真24　上層礎石4 …… 46
写真25　溝状遺構2・3（第18次調査） …… 50
写真26　礎石と近代水路（第26次調査） …… 68
写真27　礎石取り外し前（第45次調査） …… 68
写真28　礎石取り外し後（第45次調査） …… 68
写真29　礎石取り外し状況 …… 69
写真30　水路および礎石側面 …… 69
写真31　第45次調査桶検出状況 …… 70
写真32　第47次調査桶半裁状況 …… 70
写真33　第52次調査桶内掘り下げ状況 …… 70
写真34　覆屋礎石および柱 …… 73
写真35　中ノ御門控柱および礎板 …… 73
写真36　第46次調査第2トレンチ床面 …… 84
写真37　墨書のある石材 …… 93
写真38　第5トレンチ遠景（南から） …… 106
写真39　第53次調査区遠景（北西から） …… 112

図 版 目 次

図版 1
第41次調査第１トレンチ遠景(北から)
第41次調査第１トレンチ南西壁(北東から)
第41次調査第１トレンチ北東壁(南西から)
第41次調査第２トレンチ南西壁(北東から)
第42次調査第１調査区南東側(北西から)
第42次調査第１調査区北西側(南東から)
第42次調査第２調査区全景(南西から)
第42次調査第２調査区(南から)

図版 2
第43次調査区全景(西から)
第43次調査上層礎石取り外し前(南西から)
第43次調査礎石根固め石１･２(南東から)
第43次調査礎石根固め石３･４(南西から)
第43次調査礎石根固め石５(北西から)

図版 3
第43次調査溝状遺構１(南西から)
第43次調査溝状遺構２(南から)
第43次調査溝状遺構４土層断面(南西から)
第43次調査溝状遺構４～６･土坑･ピット１(南西から)
第43次調査石列(南西から)
第43次調査ピット２(北西から)
第43次調査下層礎石１･５(北西から)

図版 4
第43次調査下層礎石４(北西から)
第43次調査櫓台石垣裾部(西から)
第44次調査第１トレンチ全景(南西から)
第44次調査第２トレンチ全景(南西から)
第45次調査掘り下げ状況(東から)
第45次調査区全景
第47次調査掘り下げ状況(南東から)
第52次調査桶完掘状況(南東から)

図版 5
第52次調査桶解体中合釘状況(南西から)
第52次調査桶底板側面合釘痕
第46次調査第１トレンチA面(南西から)
第46次調査第２トレンチ幕末路盤面(北東から)
第46次調査第２トレンチC面(北西から)
第46次調査第１トレンチE面(北東から)
第46次調査第１トレンチ石垣背面(北西から)
第48次調査区全景(北東から)

図版 6
第49次調査区全景(南西から)
第50次調査第１トレンチ全景(南西から)
第50次調査第２トレンチ全景(南西から)
第50次調査第３トレンチ全景(南西から)
第50次調査第４トレンチ全景(南西から)
第50次調査第５トレンチ全景(南西から)
第51次調査第１トレンチ全景(南西から)

図版 7
第51次調査第２トレンチ全景(南西から)
第51次調査第３トレンチ全景(南西から)
第53次調査区全景(北東から)
第53次調査区南東壁(北西から)
中ノ御門周辺オルソ

図版 8
第20図７　第35図20　第35図21　第35図27
第36図34　第37図45　第37図50　第38図54

図版 9
第39図67･68･69　第41図70　第42図73
第47図75　第47図82

図版10
第47図83　第47図87　第49図97　第50図101･102
第50図108　第51図118　第52図124

図版11
第52図126･127･129　第57図140　第57図146
第60図168　第62図185

図版12
第62図189　第62図191　第70図200　第79図237
第79図238　第80図244　第87図252　第87図253

第１章　調査の経緯と目的

第１節　整備に至る経緯

鳥取城跡附太閤ヶ平は、織豊時代から近世徳川時代に移行する転換期の歴史に深い関係を持つ史跡であること、城跡の構成が、山城的形式を残す山上ノ丸と、中腹の砦群等の古い城跡遺構に対し、近世的城郭形式を残す山下ノ丸を中心とする新しい城跡遺構が新旧重層して併存すること等が学術的に評価され、昭和32年(1957)に国史跡として指定を受けたが、城跡景観を構成する石垣は昭和18年(1943)に発生した鳥取大地震(震度6、死者1,210名)で崩落・崩壊が相次ぎ、戦後復興や昭和27年(1952)に市街地の多くを失った鳥取大火の影響もあり、荒廃した状況であった。そのため、指定から２年後の昭和34年(1959)から石垣の保存修理事業が開始され、まずは、城の象徴であった三階櫓が建っていた二ノ丸石垣から修理が開始された。1970年代に入ると城跡公園として、山上・山下の補修や看板設置などの環境整備が進み、昭和47年(1972)には久松山整備審議会が設置され、堀の浚渫や石垣の修理が実施された。70年代は観光開発が活発な時期でもあり、山中の遊歩道設置や湯所を発とし山頂へ至るロープウェイも建設されたものの、僅か６年で営業を終えることとなった。城内に多くの桜が植樹されたのもこの頃であった。1980年代になると、昭和59年(1984)には『保存管理計画』が策定され、城跡としてだけではなく、山林や自然を含めた山全体でのあり方が検討された。

昭和34年(1959)以来、間断なく続く石垣修理であったが、公園整備の側面が強く、遺構としての取り扱いはそれほどなされることはなかった。また、石垣修理に伴い実施された昭和55・56年(1980・81)の二ノ丸跡の調査以外、発掘調査が実施されることもなく、幾度となく挙がっては消えていた復元計画であったが、昭和60年(1985)のわかとり国体開催へ向け再び高まったものの、二ノ丸三階櫓復元の要望に対しても遺構調査を基とした具体的な復元検討を行うことはできず、実現には至らなかった。

平成に入ると、天球丸などでの大規模な石垣修理に合わせて発掘調査事例も増え、城の実態が徐々にではあるが明らかとなりはじめた。平成16年(2004)には９市町村の合併により新鳥取市が誕生すると、翌平成17年(2005)には具体的な鳥取城復元事業として形を成すこととなった。市民と専門家からなる検討委員会を設置して整備計画の検討を行い、パブリックコメントを基として『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存整備基本計画』が策定されることとなった。翌平成18年(2006)には『史跡鳥取城跡保存整備実施計画』が策定され、鳥取城跡の保存整備と調査研究が長期計画として決定された。計画では、現在不明瞭になっている近世城郭部分の全体プランの顕在化を大きなテーマとしており、可能な範囲での建造物復元等も含め、江戸時代末期の姿を顕在化するための整備を短・中・長期の３段階、合計30年計画で進めることとしている。

整備対象の第１段階として位置づけられたのが城のメインルートにあたる「大手登城路」である。この範囲については、古写真・絵図面の存在に加え、遺構の保存状態が比較的良好と考えられることから、復元許可の要件を満たす可能性が高く、また、城の正面玄関という立地条件は、顕在化による集客効果も見込めるため、建造物を含む復元整備を視野に入れた整備計画が策定されることとなった。それまで、大手登城路部分は、鳥取県立鳥取西高等学校の主導線となっていたが、建築後40年が経過した校舎は耐震化工事が計画されていたことから、これに併せ鳥取市から鳥取県へ賃貸借されていた土地のうち、史跡整備に必要な範囲を使用範囲から除外し、大手登城路の整備を高等学校の改築と一体的に行うこととしている。なお、鳥取城跡内には、他にも、鳥取県立博物館が所在するほか、明治40年(1907)建築の仁風閣が現存しているが、現在の計画では、これらの併存を当面許容しつつ、史跡の価値を向上するための整備を実施することとしている。

第２節　調査体制

発掘調査及び報告書作成時の組織体制等は以下の通りである。

１．発掘および試掘調査

（１）平成29年度（2017）　第41次調査、第42次調査①

【第41次調査】　平成29年（2017）６月12日～11月９日　　調査面積：610㎡（全体）
今回の報告分　面積：10.7㎡（Tr1：9.0㎡、Tr2：1.7㎡）

教育長　尾室高志

文化財課	課長　冨田恵子
	参事兼保存整備係長　中道秀俊
	課長補佐兼鳥取城整備推進係長兼文化財専門員　佐々木孝文
鳥取城整備推進係	主任兼文化財専門員　細田隆博
	技師　岡垣頼和
保存整備係	主幹　中島泉
	主幹兼文化財専門員　加川崇
	主任兼文化財専門員　坂田邦彦（調査担当）

【第42次調査①】　平成30年（2018）３月23～27日　　面積：13.3㎡

教育長　尾室高志

文化財課	課長　冨田恵子
	参事兼保存整備係長　中道秀俊
	課長補佐兼鳥取城整備推進係長兼文化財専門員　佐々木孝文
鳥取城整備推進係	主任兼文化財専門員　細田隆博
	技師　岡垣頼和
保存整備係	主幹　中島泉
	主幹兼文化財専門員　加川崇
	主任兼文化財専門員　坂田邦彦（調査担当）

（２）平成30年度（2018）　第42次調査②、第43～45次調査

【第42次調査②】　平成30年（2018）４月４～11日　　面積：3.3㎡
【第43次調査】　平成30年（2018）５月８～９月12日　　面積：130.7㎡
【第44次調査】　平成30年（2018）６月25日～７月13日　　面積：16.4㎡
（Tr1：5.6㎡、Tr2：1.0㎡、Tr3：4.1㎡、Tr4：5.7㎡）
【第45次調査】　平成30年（2018）10月15～30日　　面積：21.3㎡

教育長　尾室高志

文化財課	課長　冨田恵子
	参事兼保存整備係長　中道秀俊
	課長補佐兼鳥取城整備推進係長兼文化財専門員　佐々木孝文
鳥取城整備推進係	主任兼文化財専門員　細田隆博
	技師　岡垣頼和
保存整備係	主査　松原雅彦
	主幹兼文化財専門員　加川崇
	主任兼文化財専門員　坂田邦彦（調査担当）

（３）平成31年度（2019）　第46～51次調査

【第46次調査】　令和元年（2019）６月３日～７月３日　　面積：78.2㎡（Tr1:74.0㎡、Tr2:4.2㎡）

【第47次調査】　令和元年（2019）７月３日～８月６日　　面積：21.3㎡

【第48次調査】　令和元年（2019）10月７・８日　　面積：6.6㎡

【第49次調査】　令和元年（2019）10月９～11日　　面積：4.6㎡

【第50次調査】　令和元年（2019）10月15日～11月27日　　面積：7.3㎡

（Tr1:1.1㎡、Tr2:1.4㎡、Tr3:1.6㎡、Tr4:1.0㎡、Tr5:2.2㎡）

【第51次調査】　令和２年（2020）３月２～24日　　面積：7.4㎡（Tr1:4.6㎡、Tr2:1.6㎡Tr3:1.2㎡）

教育長　尾室高志

文化財課　　教育委員会事務局次長兼文化財課長兼保存整備係長（～７月）　冨田恵子

教育委員会事務局次長兼文化財課長（８月～）　冨田恵子

参事兼保存整備係長（８月～）　佐々木敏彦

課長補佐兼鳥取城整備推進係長兼文化財専門員　佐々木孝文

鳥取城整備推進係　主任兼文化財専門員　細田隆博

技師　岡垣頼和

保存整備係　主査　松原雅彦

主幹兼文化財専門員　加川崇

主任兼文化財専門員　坂田邦彦（調査担当）

（４）令和２年度（2020）　第52・53次調査

【第52次調査】　令和２年（2020）４月17日～６月３日　　面積：21.3㎡

【第53次調査】　令和２年（2020）11月４～６日　　面積：8.8㎡

教育長　尾室高志

文化財課　　課長　佐々木敏彦

課長補佐兼鳥取城整備推進係長兼文化財専門員　佐々木孝文

鳥取城整備推進係　主任兼文化財専門員　細田隆博

技師　岡垣頼和

保存整備係　係長兼文化財専門員　加川崇

主任兼文化財専門員　坂田邦彦（調査担当）

主事　寺西和代、田野詩織

会計年度任用職員　長谷早紀、松本幸子、田中瞳（１月～）

２．報告書作成

令和３年度（2021）

教育長　尾室高志

文化財課　　課長　佐々木敏彦

課長補佐兼鳥取城整備推進係長兼文化財専門員　佐々木孝文

鳥取城整備推進係　主任兼文化財専門員　細田隆博

技師　岡垣頼和

保存整備係　係長兼文化財専門員　加川崇

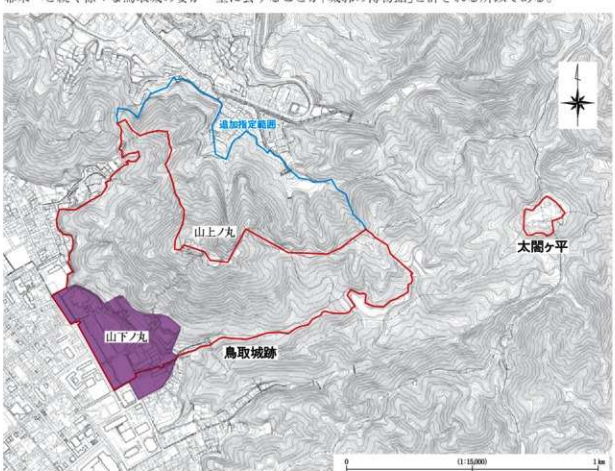
主任兼文化財専門員　坂田邦彦（報告担当）

主事　寺西和代、田野詩織

会計年度任用職員　長谷早紀、松本幸子、田中瞳

第３節　指定の詳細

指定名称　国指定史跡　鳥取城跡附太閤ヶ平(とっとりじょうあとつけたりたいこうがなる)
地　　番　鳥取市東町２丁目、円護寺、栗谷、百谷、小西谷
指 定 日　昭和32年(1957)12月18日
　　昭和62年(1987)８月10日追加指定
指定面積　968.324㎡
　昭和32年(1957)12月18日　東町地内を中心とした668.663㎡を指定
　　久松山の南面(東町２丁目)と本陣山山頂部(東町２丁目・栗谷・百谷・小西谷)の２地域を指定
　昭和62年(1987)８月10日　円護寺側299.661㎡を追加指定
　　久松山北面(円護寺)を追加し、山全体が指定地となる
指定理由
　指定書によると、織豊時代から近世徳川時代に移行する転換期の歴史に深い関係を持つ史跡である点、城跡の構成が、山城的形式を残す山上ノ丸と中腹の砦群等の古い城跡遺構に対し、近世的城郭形式を残す山下ノ丸を中心とする新しい城跡遺構が新旧重層して併存すること等が学術的に評価される点が認められ、指定に至ったとされる。
　石垣化される以前、久松山上にあったとされる城館としての中世鳥取城と、それを攻めた羽柴秀吉の巨大な本陣が置かれた隣山の帝釈山頂とその陣城群、城郭として石垣化した近世鳥取城が同山系に重複し、その遺構の多くが現存することは稀であり、場内の石垣にみられる多様な年代観を併せ、中世から幕末へと続く様々な鳥取城の姿が一堂に会することが「城郭の博物館」と評される所以である。



第１図　史跡鳥取城跡附太閤ヶ平史跡指定範囲

第４節　保存整備計画の概要

１．事業の目的

鳥取城跡は、戦国時代の山城を起源とし、鳥取藩32万石という国内有数の大藩の居城として江戸時代を通じて存続した点から、我が国における城郭の発達史を概観できる史跡である。鳥取市は、昭和32年(1957)の国史跡指定以後、鳥取城跡の保存管理に努めてきたが、近年の都市環境等の変化により、鳥取城跡が果たしてきた役割が見失われがちとなっている現状がある。そのため、今後より一層、国指定史跡としての鳥取城跡の本質的価値を広く国民に発信し、更に魅力あるものとして、後世に引き継ぐことを目的に、平成17年度(2005)に『史跡鳥取城跡保存整備基本計画』を策定した。翌平成18年(2006)には『史跡鳥取城跡保存整備実施計画』が策定され、鳥取城跡の保存整備と調査研究の二軸が長期計画として決定された。計画では、現在不明瞭になっている近世城郭部分の全体プランの顕在化が大きなテーマとされており、可能な範囲での建造物復元等も含め、江戸時代末期の姿を顕在化するための整備を短・中・長期の３段階、合計30年計画で進めることとした。

２．事業の方針

鳥取城跡の本質的価値は、①所在地としての久松山の自然環境、②太閤ヶ平を含む中世城郭群、③藩主の居城としての近世城郭という異質な要素が重層的に存在しているところにある。これらの要素がもつ特質を調和させ、その価値を一層引き出し、適切に保存・管理を行い、整備・活用を図るため、表１の項目に分けて事業の方針とする。

表１　方針の概要

区　分	方　針
久松山 自然環境	自然植生を調査し、城郭史跡として遺跡の保存を優先することを前提に、身近な都市緑地である久松山の自然環境を適正に維持管理し、良好な緑地保全を図る。
中世城郭	史跡内の遺構分布調査を実施し、調査研究をもとにその価値を明瞭化する保存整備方針を個別にまとめる。
近世城郭	現在の城跡景観を決定づけている近世鳥取城については、その特性と歴史的重要性を可視的に理解できるように、縄張りをはじめ全体構想を明瞭化するための整備を行う。 江戸時代を通じて藩主の居城として改変を繰り返したことから整備年代は幕末に設定する。建造物は、遺構・絵図文献及び写真等の検討により、復元検討を満たすもののうち、整備効果の高いものから段階的に行う。 ①城の骨格を明瞭化するため、大手登城路の復元的整備を段階的に行う。 ②象徴的存在であった二ノ丸の三階櫓・菱櫓・走櫓等については、調査研究を継続し、復元を検討する。
既存施設	仁風閣(国重要文化財)は、その価値を損なう移築は困難であるため、城跡と併存させる。その他の施設(県立鳥取西高等学校・県立博物館)は、当面史跡整備と整合性を図りつつ併存させるが、将来的に移転を含めて「あり方」を検討する。

第５節　大手登城路復元整備計画の概要

１．経緯

平成17年度(2005)鳥取市は『史跡鳥取城跡保存整備基本計画』を策定し、長期的整備の構想を明確にした。平成18年度(2006)には、『基本計画』の構成に基づき、その第１段階と位置付けた大手登城路復元整備の実現に向けて、具体的な内容と方針を定め、『史跡鳥取城跡保存整備実施計画』を策定した。

２．大手登城路の現状

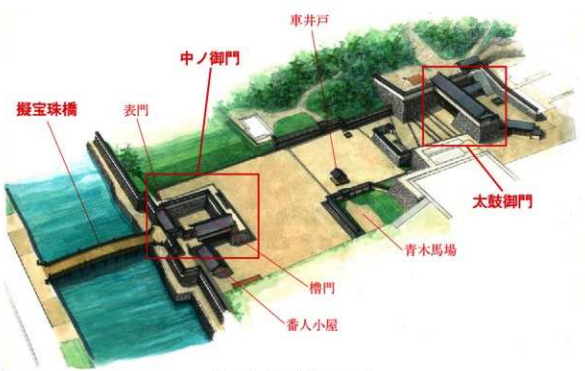
大手登城路は、内堀の中央に架かる擬宝珠橋を渡り、城の中枢へ至るルートで、近世鳥取城の正面にあたるシンボルゾーンであった。しかし、現在は、かつての擬宝珠橋は歴史性を無視したコンクリート橋に変わり、桝形石垣の一部が撤去され、県立高校の通用道となっている。このため、史跡内における裏道的な作業用通路と誤解する市民も多く、史跡としての本質的価値を著しく損なっている。

３．復元整備の目的

大手登城路復元整備は、城の正面観を回復し、近世鳥取城の骨格を顕在化するものである。その中で特に建造物の復元は、鳥取城跡の理解を深め、その価値と魅力を大きく向上させるだけでなく、市民の歴史や景観に対する意識を呼び覚ますことが可能となる。また、この整備は、当面共存する県立高校が与える城郭景観への負荷を軽減できる。さらに県立高校の生徒に、単に城跡に所在する学校施設で学ぶという意識ではなく、より価値が明確になった史跡鳥取城跡内で学ぶという意識を定着させ、生徒の文化財愛護の意識高揚も図ることができる。

４．復元整備の基本方針

大手登城路復元整備における基本方針は、『保存管理計画』(昭和59年度(1984)策定)、『保存整備基本計画』(平成17年度(2005)策定)等と整合を図るものとする。建造物の復元にあたっては、遺構の保護を大前提とする。また、十分な調査研究を行い、近世鳥取城の正面観を回復する史実性の高い整備を行うものとする。復元の時代設定は、江戸時代を通じて藩主の居城として増改築を繰り返した鳥取城の特性から幕末(城としての最終段階)とする。



第２図　復元整備イメージ

第6節　鳥取城跡における石垣保存修理事業

鳥取城跡は、明治12年(1879)に城内の象徴的な建物が取り壊わされたものの、城跡景観を規定する石垣は良好に残されていた。しかし、昭和18年(1943)の鳥取大地震の影響で多くの箇所で崩落した。中でも、山頂部の天守台の石垣や、山麓部のうち、二ノ丸三階櫓台及び二ノ丸走櫓跡の石垣崩落は、甚大なものであった。昭和33年(1958)の調査記録をみると、城内の石垣崩落は、16ヶ所、石垣の孕み出しなどが見られる半壊は8ヶ所に及んでいる。しかし、戦時下であった当時、石垣は修理されることはなかった。しかも、地震から復興した市街地を、昭和27年(1952)、大火が襲い、ようやく荒廃した石垣の修理が始まるのは、昭和32年(1957)の国史跡指定以降、昭和34年度(1959)からのことである。

一方で、鳥取城跡における石垣保存修理事業は、昭和25年(1950)の文化財保護法制定以降の国庫補助事業下で行われたものとしては、最初期の事例にあたる。そのため国内における石垣修理の代表的な実践の場を提供してきた。例えば、昭和55年度(1980)には、我が国で初めて石垣の写真測量による立面図の作成が行われた。また、平成元年(1989)の天球丸石垣修理は、後に国内の石垣修理を牽引することとなる特別史跡肥前名護屋城跡(佐賀県唐津市)山里口の石垣修理の手本となった。

さて、石垣の本質的価値は、「歴史の証拠」及び「安定した構造体」としての価値がある。鳥取城跡での石垣保存修理事業は、平成17年度(2005)に文化庁が示した『史跡等整備の手引き』を参考に見直しを行い、文化庁がとりまとめつつあった『石垣整備のてびき』を念頭に、平成23年度(2011)前後で異なる。それ以前は、「安定した構造体」としての価値に重きを置き、一方、それ以降は、「安定した構造体」と同等に「歴史の証拠」としての価値に重きを置いた石垣修理を実施している。

平成23年度(2011)以前の石垣修理は、主に鳥取大地震で崩落した部分の復元や、地震の影響で大きく孕み出した部分の解体修理の時代である。石積みそれ自体の工法そのものは、伝統工法に基づく一方で、石垣の外形に真実性を求め、安定した構造体としての修理が実施された。例えば、解体した石材が不健全な場合に加え、設計規格に満たない在来石は、大規模に新石材に取り換えて復旧を行うという手法が取られた。また、立体的な拡張痕跡の勾配変化点がある場合、その部位が構造的欠陥であるとして、修理時は一つの石垣面として復旧した事例もある。これらの時期の修理範囲は、鳥取大地震の影響を受けた主に山麓の石垣のうち、二ノ丸や天球丸及びその下段の橋蔵、太鼓御門北側を中心にした部分である。

一方で、平成23年度(2011)以降の石垣修理は、解体修理ありきではなく、石垣の延命的措置を含めた多様な石垣修理を実践している。非解体石垣修理としては、石垣面及びその周辺の樹木伐採、排水路の回復、落石防御ネット設置及び定点観測、間詰石補修、補強石垣の設置、基盤地面の補強を実施している。

このうち、補強石垣の設置として実施したのが、天球丸巻石垣の復元であった。天球丸の巻石垣は、鳥取城跡で球面ないし曲面を持つ「巻石垣」と呼ばれる特徴的な補強石垣の中でも、城内最大のものである。これは、平成6～8年度(1994～1996)に内包される石垣の解体修理のため、最小限の発掘調査と写真測量ののち取り外されていたものを、平成23年度(2011)に復元したもので、この復元は、国内唯一の形態である補強石垣を明示する目的もあったが、内包される部分にオリジナルの石垣が存在し、それらの耐震性を高める為に設置したという側面もあった。やむを得ず解体修理せざるを得ない場合は、修理後も一見して修理の状況がわからないように修理することを目指している。在来石そのものを文化財として扱い、原則再加工を施さないことや、解体修理面積に対して原則1割未満の新石材交換率に抑えることを目標に掲げるなどの方針で修理を実施している。これらの理念で修理を行った箇所は、二ノ丸表御門向かいの天球丸腰石垣及び現在復元整備が進む大手登城路内の石垣である。鳥取城跡の石垣修理は、山麓において概ね鳥取大地震で崩落した以前の姿を取り戻しつつある。一方で、山頂部の天守台を中心とした石垣は、被災当時のままである。鳥取城跡は、被災後70年以上の時を経てもなお、鳥取大地震からの復興を果たしておらず、今後とも継続した取り組みが必要である。

表２　保存修理・整備履歴１

年　度		保存修理・整備事業内容(備考)
昭和32	1957	国史跡指定
昭和34	1959	二ノ丸三階櫓周辺石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)
昭和35	1960	二ノ丸三階櫓周辺石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)
昭和36	1961	二ノ丸三階櫓周辺石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)
昭和37	1962	二ノ丸三階櫓周辺石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)
昭和38	1963	二ノ丸三階櫓周辺石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)
		この頃、鳥取大地震で崩れた高校通学路沿いの石垣修理
昭和39	1964	二ノ丸三階櫓周辺石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)
昭和40	1965	二ノ丸三階櫓周辺石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)
昭和42	1967	西坂下御門周辺石垣修理(公園整備)、二ノ丸石段積替・側溝修理・掘木構設置
昭和43	1968	環境整備(天球丸側溝修理・説明版・標柱設置)、西高等学校芝田記念館裏石垣修理
昭和44	1969	環境整備(山上ノ丸石段通路構・山下ノ丸石段側溝整備等)、二ノ丸北側階段整備、排水路整備
昭和45	1970	坂口御門石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)、坂口御門周辺階段整備、排水路整備
昭和46	1971	坂口御門石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)、二ノ丸下石段修復、宝隆院庭園整備
昭和47	1972	宝隆院庭園整備、内堀石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)、内堀浚渫(北中側～宝珠橋)
昭和47	1972	山上ノ丸本丸(災害復旧・コンクリート壁養生と新規石積)
昭和48	1973	内堀石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)、内堀浚渫(宝珠橋～擬宝珠橋)
昭和49	1974	内堀石垣修理(解体修理・近代石積補修)、内堀浚渫(擬宝珠橋～武道館側)
昭和50	1975	久松公園整備(民家・動物舎移転補償)
昭和51	1976	久松公園整備(遺構表示)
昭和51	1976	内堀石垣修理(天端石補足)
昭和51	1976	西坂下御門上石垣修理(災害復旧、崩落部分の復元)
昭和52	1977	久松公園整備(米蔵跡遺構表示)
昭和53	1978	二ノ丸大渡櫓石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)、井戸浚渫、掘木構設置
昭和54	1979	天球丸表御門石垣修理(解体修理)
昭和54	1979	二ノ丸走櫓石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)
昭和55	1980	二ノ丸走櫓石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)
昭和56	1981	二ノ丸走櫓石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)
昭和56	1981	楯蔵下段石垣修理(災害復旧、崩落部分補強)
昭和57	1982	二ノ丸走櫓石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)
昭和58	1983	二ノ丸菱櫓石垣修理(解体修理)、史跡図化
昭和59	1984	二ノ丸菱櫓石垣修理(解体修理)、『保存管理計画』策定
昭和60	1985	二ノ丸菱櫓石垣修理(解体修理)
昭和61	1986	二ノ丸菱櫓石垣修理(解体修理)
昭和62	1987	二ノ丸菱櫓石垣修理(解体修理)
昭和62	1987	史跡追加指定、史跡指定地境界杭設置、史跡図化追加
昭和63	1988	二ノ丸三階櫓下段(解体修理)
平成１	1989	二ノ丸三階櫓下段(解体修理)
平成１	1989	天球丸石垣修理Ⅰ期(解体修理)
平成２	1990	二ノ丸三階櫓下段(解体修理)
平成２	1990	天球丸石垣修理Ⅰ期(解体修理)
平成２	1990	二ノ丸走櫓下階段脇(崩落部分の復元、解体修理)
平成２	1990	史跡指定地境界杭設置、史跡図化追加
平成３	1991	二ノ丸三階櫓下段(解体修理)
平成３	1991	天球丸石垣修理Ⅰ期(解体修理)
平成４	1992	天球丸石垣修理Ⅰ期(解体修理)
平成５	1993	天球丸石垣修理Ⅰ期(解体修理)
平成６	1994	天球丸石垣修理Ⅰ期(解体修理)

表３　保存修理・整備履歴２

年　度		保存修理・整備事業箇所(備考)
平成７	1995	天球丸石垣修理Ⅰ期(解体修理)
平成８	1996	天球丸石垣修理Ⅰ期(解体修理)
平成９	1997	扇邸跡石垣(解体修理)、山下ノ丸平面図作成
平成10	1998	太鼓御門北石垣(崩落部分の復元・解体修理)
平成11	1999	太鼓御門北石垣(崩落部分の復元・解体修理)
平成12	2000	楯蔵石垣(崩落部分の復元・解体修理)
平成13	2001	楯蔵石垣(崩落部分の復元・解体修理)
平成14	2002	楯蔵石垣(崩落部分の復元・解体修理)
平成15	2003	楯蔵石垣(崩落部分の復元・解体修理)
平成16	2004	天球丸石垣修理Ⅱ期(解体修理)
平成17	2005	天球丸石垣修理Ⅱ期(解体修理)、『保存整備基本計画』策定
平成18	2006	天球丸石垣修理Ⅱ期(解体修理)、『保存整備実施計画』策定
平成19	2007	天球丸石垣修理Ⅱ期(解体修理)、『鳥取城調査研究年報』刊行
平成20	2008	天球丸石垣修理Ⅱ期(解体修理)
平成21	2009	天球丸石垣修理Ⅱ期(解体修理、天球丸遺構復元)
平成22	2010	天球丸石垣修理Ⅱ期(巻石垣復元)
平成23	2011	天球丸石垣修理Ⅱ期(巻石垣復元)
平成24	2012	楯蔵園地整備、楯蔵下段石垣(間詰石補修、ネット張り)
平成25	2013	天球丸排水工事
平成25	2013	天球丸腰石垣修復工事(解体修理、～平成27年まで)
平成26	2014	天球丸腰石垣修復工事(解体修理)、排水路整備
平成27	2015	天球丸腰石垣修復工事(解体修理)、排水路整備、擬宝珠橋復元工事開始
平成28	2016	内堀等石垣修理工事(解体修理)、擬宝珠橋復元工事
平成29	2017	中ノ御門石垣修理工事(解体修理)、擬宝珠橋復元工事
平成30	2018	中ノ御門石垣修理工事(解体修理)
平成30	2018	擬宝珠橋復元工事完了、共用開始
平成31/令和１	2019	中ノ御門石垣修理工事(解体修理)
令和２	2020	中ノ御門石垣修理工事(解体修理)
令和２	2020	中ノ御門表門復元工事完了、共用開始
令和３	2021	中ノ御門石垣修理工事(解体修理)

第３図　石垣修復箇所

第７節　既往の発掘調査

昭和55年(1980)の二ノ丸走櫓石垣修理工事に伴い初めて実施された発掘調査は、城跡整備に伴い調査例が増加し、令和３年(2021)現在で56次を数える。表４・５の通り第43次調査以降大規模調査は実施されていないが、復元工事が進む中での追加調査が増加している。

昭和18年(1943)９月10日に発生し、千人を超える死者を出した鳥取大地震により市内は壊滅的な被害を受け、鳥取城においては各所で石垣が崩落することとなった。昭和32年(1957)の国史跡指定を受けるとその２年後には石垣修理が開始され現在まで続く。災害からの復興に始まった城跡整備は、昭和40年代に入ると観光面からの整備が進み、ロープウェイ建設や堀の浚渫などが行われるが、山上・山下ともに公園の一部としての整備であり、文化財の面から事前の発掘調査等が実施されることはなかった。

初めての発掘調査が実施されたのは、昭和55年(1980)のことであり、二ノ丸走櫓石垣の大規模修理工事に際して、その上部に位置する二ノ丸御殿部分を対象としたものであった。調査では櫓礎石が絵図面通りに検出され、瓦等の遺物も多く出土した。しかし、その後しばらく発掘調査は実施されず、本格的に開始されるのは平成に入ってのことで、平成２年(1990)天球丸石垣の大規模解体修理工事に伴う天球丸曲輪の調査に続いて楯蔵や太鼓御門周辺でも実施された。

これらはいずれも石垣修理工事に伴う発掘調査であったが、2000年代に入ると三ノ丸に位置する鳥取県立鳥取西高等学校の改築問題や、鳥取城跡保存整備計画策定により、学校周辺での発掘調査例が増加、さらに近年では、鳥取城復元整備計画の本格化に伴い、大手登城路沿いでの発掘調査が増加し、平成26年(2014)からは大規模な全面調査へと移行した。復元整備計画に伴う大手登城路周辺で実施した発掘調査範囲については第15図の通りである。

大手登城路復元整備計画では、城の正面入口から本丸である三ノ丸へ至る間に位置する主要施設である擬宝珠橋・中ノ御門・太鼓御門という３つの建物復元を目的とし、付随する番人小屋、車井戸等の周辺施設と登城路面を旧状に復することを目的としている。しかし、復元をめざす部分の総面積は広大であり、現状そのすべてを同時に調査対象とすることは、隣接する鳥取県立鳥取西高等学校運営上からも不可能であるため、鳥取城保存整備検討委員会での検討の結果、まずは建物等の構造物が存在していた範囲の調査を先行し、登城路部分については、後に一括して行うこととなった。平成21年(2009)の第21次調査と平成22年(2010)の第26次調査では中ノ御門の第１の門である表門、同年度の第27次調査では中ノ御門の第２の門である櫓門、平成23年(2011)の第28次調査では大手橋である擬宝珠橋の調査を実施し、城の入口部分の姿が明らかとなり、調査成果を平成25年(2013)３月に『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書』として刊行した。

このような状況の下平成26年(2014)より翌年に掛けて実施した第34次発掘調査は、大手登城路周辺における初めての大規模調査である。それまでの発掘調査は、部分的なトレンチ調査が大半であったが、平成27年(2015)には借地となっていた鳥取県立鳥取西高等学校用地の一部(グラウンドの一部)が鳥取市に返還されたことにより全面調査が実施可能となったためである。全面調査に際しては、過去に調査を実施した部分も含め、改めてその全体を顕にして再検討を行うこととしている。以降平成27年(2015)に実施した第39次発掘調査、平成28年(2016)の第40次発掘調査、平成29年(2017)の第41次発掘調査などの全面調査を山側の太鼓御門側へ向かい毎年実施し、平成30年(2018)太鼓御門の発掘調査では門の全容が明らかとなった。現在復元予定範囲のうち８割程度の発掘調査を完了、その成果は『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書』Ⅰ～Ⅳとして４冊刊行した。平成30年度(2018)には最初の復元工事となる擬宝珠橋が、令和２年度(2020)には中ノ御門表門の再建が成った。今後未調査部分の調査を行い、復元整備へ向けたデータの収集を進めていく予定である。

表４　鳥取城跡発掘調査一覧１

次数	調査位置	調査期間	面積(㎡)	調査原因	報告書
1	二ノ丸走櫓跡	昭和55年(1980)11/14～12/24	250	二ノ丸走櫓石垣修復工事に伴う調査	1
2	二ノ丸走櫓跡	昭和56年(1981) 5 /26～7 /27	130	二ノ丸走櫓石垣修復工事に伴う調査	1
3	天球丸跡	平成２年(1990) 5 / 1 ～ 7 /31	320	石垣の保存修理に伴う調査	2
4	天球丸跡	平成３年(1991) 8 / 1 ～12/20	530	石垣の保存修理に伴う調査	2
5	天球丸跡	平成７年(1995)10/ 1 ～12/12	164	天球丸の復元整備に伴う調査	3
6	太鼓御門跡	平成９年(1997) 8 / 1 ～1998/ 2 /28	170	復元修理に伴う調査	4
7	中ノ御門跡	平成10年(1998)10/20～1999/ 2 /28	135	復元修理に伴う調査	5
8	楯蔵跡	平成12年(2000)10/ 2 ～2001/ 3 /23	340	石垣の保存修理に伴う調査	6
9	輜蔵跡周辺試掘	平成15年(2003) 7 /22～9/30	80	鳥取西高校整備移転計画に伴う調査	7
10	天球丸跡	平成17年(2005) 6 /15～12/27	73.6	天球丸石垣の保存修理に伴う調査	未
11	三ノ丸跡試掘	平成17年(2005) 8 /22～10/26	40	鳥取西高校整備計画に係る調査	8
12	中ノ御門周辺試掘	平成18年(2006)10/30～2007/ 1 /29	100.6	鳥取西高校改築に係る調査	9
13	天球丸跡	平成18年(2006)10/30～11/2	15	天球丸石垣の保存修理に伴う調査	未
14	天球丸跡試掘	平成19年(2007) 6 /28～7 /31	9.1	天球丸石垣の保存修理に伴う調査	未
15	太鼓御門周辺試掘	平成19年(2007) 7 /21～11/ 7	53.4	鳥取西高校改築に伴う調査	9
16	三ノ丸跡試掘	平成20年(2008) 5 / 7 ～ 5 /27	21.4	鳥取西高校改築に伴う調査	10
17	天球丸跡	平成20年(2008) 7 /16～8 / 8	10.1	天球丸整備に伴う調査	未
18	太鼓御門跡	平成20年(2008) 7 /20～11/21	110	大手登城路復元整備計画に伴う調査	11
19	楯蔵跡	平成20年(2008)10/31～12/ 2	22.9	楯蔵跡周辺整備に伴う調査	未
20	輜蔵跡	平成21年(2009) 4 / 1 ～2010/ 3 /12	2,771.7	鳥取西高校改築に伴う調査	12
21	中ノ御門跡	平成21年(2009) 7 / 1 ～ 8 /31	60.3	大手登城路復元整備計画に伴う調査	14
22	太鼓御門跡周辺	平成21年(2009) 9 / 8 ～10/ 1	35.0	大手登城路復元整備計画に伴う調査	15
23	天球丸跡	平成21年(2009)12/ 2 ～12/10	35.0	天球丸整備に伴う調査	未
	太閤ヶ平試掘	平成21年(2009)12/14～12/17	12.1	無線基地局整備	13
24	堀端試掘	平成22年(2010) 1 /25～ 1 /29	10.5	バス待合所設置に伴う調査	13
25	楯蔵跡周辺	平成22年(2010) 2 /22～ 3 /26	69.2	楯蔵跡周辺整備に伴う調査	未
26	中ノ御門跡	平成22年(2010) 7 / 1 ～ 8 /31	59.5	大手登城路復元整備計画に伴う調査	14
27	中ノ御門跡	平成22年(2010)11/ 1 ～2011/ 2 /25	76.7	大手登城路復元整備計画に伴う調査	14
28	擬宝珠橋跡	平成23年(2011)10/ 5 ～2012/ 3 /30	480	大手登城路復元整備計画に伴う調査	14
29	天球丸跡・八幡宮跡	平成24年(2012) 6 / 3 ～ 9 /27	200	天球丸整備に伴う調査	未
30	①②中ノ御門周辺 ③登城路④太鼓御門	平成24年(2012) 6 /28～10/ 1	425	大手登城路復元整備計画に伴う調査	15
31	登城路周辺	平成25年(2013) 7 /23～11/ 2	306	大手登城路復元整備計画に伴う調査	20
32	天球丸跡	平成25年(2013) 8 / 9 ～2014/ 1 /31	96	天球丸腰石垣修理に伴う調査	未
33	内堀石垣	平成25年(2013) 2 / 4 ～ 3 /28	72	内堀石垣破損部分確認調査	未
34	中ノ御門跡	平成26年(2014) 7 /22～2015/ 3 /27	1,860	大手登城路復元整備計画に伴う調査	18
35	輜蔵曲輪試掘	平成26年(2014) 4 / 8 ～ 4 /21	15.3	鳥取西高校改築に伴う調査	19
36	輜蔵曲輪試掘	平成26年(2014) 7 /29	4.2	鳥取西高校改築に伴う調査	19
37	三ノ丸跡試掘	平成26年(2014)10/ 7 ～10/16	12	鳥取西高校改築に伴う調査	19
38	堀端試掘	平成27年(2015) 1 / 6 ～ 1 / 7	8.3	道路整備に伴う調査	19
39	大手登城路跡	平成27年(2015) 7 /14～12/ 7	960	大手登城路復元整備計画に伴う調査	20
40	大手登城路跡	平成28年(2016) 7 /11～12/12	808	大手登城路復元整備計画に伴う調査	21
41	大手登城路跡	平成29年(2017) 6 /12～11/ 9	610	大手登城路復元整備計画に伴う調査	21
42	擬宝珠橋付根	平成30年(2018) 3 /23～ 4 /11	16.6	大手登城路復元整備計画に伴う調査	本報告
43	太鼓御門跡	平成30年(2018) 5 / 8 ～ 9 /12	130.7	大手登城路復元整備計画に伴う調査	本報告
44	中ノ御門前犬走り	平成30年(2018)6/25～7/13	16.4	大手登城路復元整備計画に伴う調査	本報告
45	中ノ御門礎石下	平成30年(2018)10/15～10/30	21.3	大手登城路復元整備計画に伴う調査	本報告

表５　鳥取城跡発掘調査一覧２

次数	調査位置	調査期間	面積(㎡)	調査原因	報告書
46	中ノ御門石垣裾	令和元年(2019)６/３～７/３	78.2	大手登城路復元整備計画に伴う調査	本報告
47	中ノ御門礎石下	令和元年(2019)７/３～８/６	21.3	大手登城路復元整備計画に伴う調査	本報告
48	中ノ御門雁木	令和元年(2019)10/７～10/８	6.6	大手登城路復元整備計画に伴う調査	本報告
49	太鼓御門礎石取外し	令和元年(2019)10/９～10/11	4.6	大手登城路復元整備計画に伴う調査	本報告
50	二ノ丸下通路	令和元年(2019)10/15～11/27	7.3	確認調査	本報告
51	二ノ丸	令和２年(2020)３/２～３/24	7.4	確認調査	本報告
52	中ノ御門礎石下	令和２年(2020)４/17～６/３	21.3	大手登城路復元整備計画に伴う調査	本報告
53	中ノ御門雁木周辺	令和２年(2020)11/４～６	8.8	大手登城路復元整備計画に伴う調査	本報告

掲載報告書

1　鳥取市教育委員会1981『里仁１号墳発掘調査報告書・鳥取城二ノ丸走櫓跡』
（鳥取市教育委員会1987『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存修理概要報告書』に再録）
2　鳥取市教育委員会1992『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平　天球丸発掘調査概要報告書』（３に再録）
3　鳥取市教育委員会1997『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平　天球丸保存整備事業報告書』
4　鳥取市教育委員会1998『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平　太鼓御門発掘調査報告書』
5　鳥取市教育委員会1999『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平　中ノ御門発掘調査報告書』
6　鳥取市教育委員会2001『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平　楯蔵跡発掘調査報告書』
7　鳥取市教育委員会2004「鳥取城関連遺跡」『平成15(2003)年度　鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』
8　鳥取市教育委員会2006「鳥取城三ノ丸跡」『平成17(2005)年度　鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』
9　鳥取市教育委員会2008「鳥取城跡」『平成19(2007)年度　鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』
10　鳥取市教育委員会2009「鳥取城跡」『平成20(2008)年度　鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』
11　鳥取市教育委員会2009『平成20(2008)年度　史跡鳥取城跡太鼓御門跡発掘調査報告書』
12　財団法人鳥取市文化財団2011『鳥取城跡収蔵跡』(第20次調査)
13　鳥取市教育委員会2011「鳥取城下町関連遺跡」「太閤ヶ平」「鳥取城跡第24次調査」
『平成22(2010)年度　鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』
14　鳥取市教育委員会2013「鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書」－第21・26・27・28次発掘調査－
15　鳥取市教育委員会2014「史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅱ」－第22・30次発掘調査－
16　鳥取市教育委員会2013「鳥取城下町遺跡」『平成24(2012)年度　鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』
17　公益財団法人　鳥取市文化財団2015「鳥取城下町遺跡」(第３次調査)
18　鳥取市教育委員会2016「史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅲ」－第34次発掘調査－
19　鳥取市教育委員会2017「鳥取城跡(第35～38次)」「鳥取城下町遺跡(第４・５次)」
『平成28(2016)年度　鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』
20　鳥取市教育委員会2018「史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅳ」－第31・39・40次発掘調査－
21　鳥取市教育委員会2020「史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅴ」－第40・41次発掘調査－

関連報告書

鳥取市教育委員会1985『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存管理計画策定報告書』
鳥取市教育委員会1987『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存修理概要報告書』
鳥取市教育委員会2005『史跡鳥取城跡保存整備基本計画』
鳥取市教育委員会2006『史跡鳥取城跡保存整備実施計画』
鳥取市教育委員会2008～2021『鳥取城調査研究年報』第１～14号
鳥取市教育委員会2013『資料でみる鳥取城(近代編)』

第４図　既往の発掘調査位置（第53次調査まで）

第２章　立地と環境

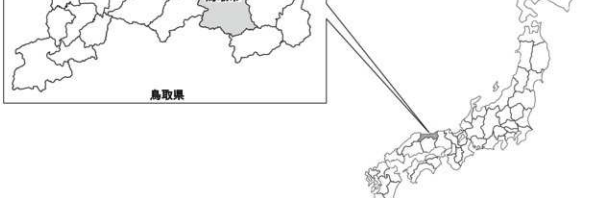
第１節　遺跡の周辺環境

１．地理的環境

鳥取市は、鳥取県東北部に位置する県庁所在地で、概ね東経133度56分から134度26分、北緯35度16分から35度34分に位置し、北は日本海に面し、南は八頭町および一部岡山県、東は岩美町および兵庫県、西は湯梨浜町および三朝町に隣接し、同じ中国地方にある広島市からは陸路で約300㎞、岡山、姫路から100㎞、神戸、大阪、京都からは150㎞の圏内に位置する。

本市は、中国山地から日本海へ北流する千代川水系にひらけた鳥取平野・国府平野に、古代因幡国の中心地として国庁が置かれ、江戸時代には鳥取藩池田家32万石の城下町として栄えた。明治22年(1889)10月１日に鳥取県の県庁所在地として市制を施行し、大正から昭和、平成にかけて周辺の町村を編入するなどして市域は拡大し、平成16年(2004)11月１日に国府町、福部村、河原町、用瀬町、佐治村、気高町、鹿野町および青谷町の８町村の合併により、市域は東西約45㎞、南北約30㎞に、総面積765.31㎢、山陰地方で初めて20万人都市(令和４年(2022)１月現在18.4万人)となり、鳥取県全体の約22％を占め、人口、面積ともに山陰最大の都市となった。さらに平成22年(2010)３月には鳥取県東部１市４町村により、「鳥取・因幡定住自立圏」を形成し、中核都市としての基盤を確固たるものにし、平成30年(2018)４月には鳥取県東部地区に兵庫県北部但馬を含めた「麒麟のまち圏域」を形成し、中核市へと移行した。鳥取市を北流する千代川の下流部には、鳥取市街を中心とした三角州性の沖積平野が広がる。鳥取市の平野部は海抜が低いことや、周辺の山地の突端が半島状や離れ島状に存在することで明確に沈降型山麓線が認められることから、かつて存在した湾が、約１万９千年前に起きた縄文海進後に千代川を含む水系の運び込む堆積物(土砂や礫)で埋められて生じた沖積平野であることが伺える。

市域の山地を組成している岩相は古いものから順に挙げると、①三畳紀中期ごろの弱変成性岩類、②白亜紀後期の火山岩類、③同火山岩類を貫く 中生代後期から新生代にかけての古第三紀と貫入岩の深成岩類の大陸の時代の地層、日本海形成期に形成された中生代以降中部地方西部で活発だった火山活動と同じ時代の貫入岩類を覆った火山岩、および鳥取層群からなる新第三系、④局地的に分布する沖積堆積物、河川周辺に分布する沖積平野、および海岸地域の砂丘からなる堆積岩の第四系から形成される。



第５図　周辺環境

2．歴史的環境

今回報告する鳥取城跡の位置する千代川の東岸から鳥取駅の北側、現在の中心市街地は遺跡の空白地帯にある。城下町形成以前は湿地帯であったと伝わり、昭和期に至るまで、大雨による浸水被害が度々見受けられることからも明らかであり、遺跡が確認できるのは、平野の辺縁部、山裾の微高地より上が中心である中、秋里遺跡は、平野部に確認できる大規模な遺跡である。千代川河岸に位置するこの遺跡は、弥生時代の後期を中心とし、当時の因幡地域における拠点的な集落の一つであったとみられる。

古代、因幡の国庁はより内陸の国府平野に置かれ、中心地として栄えた。中世以降その中心は、湖山池東岸の宇山周辺へ移り、日本海と直接繋がり、内海としての立地を生かし大いに繁栄し、やがて隣接する天神山に守護所が移されてからは、政治的な中心地となった。戦国の動乱期に入ると、布施天神山城を本拠とする守護因幡山名氏と惣領である但馬山名氏との対立が激化、まもなく因幡山名氏は滅亡し、但馬山名氏による支配が進められる。

（1）土造りの鳥取城

①沿革

城下町の正面に位置する久松山は、一つの拠点として利用され、山頂にあった鳥取城は天神山城の出城としての役割を負っていたが、永禄6年（1563）城番として置かれた武田高信が主家である因幡守護山名豊数に対して反旗を翻す。豊数は鳥取城を攻め、城にほど近い湯所での激しい戦闘の後、敗れることとなる。離反の背後には山陰東部地域へと支配を強めていた毛利氏の影響があったとみられる。翌年には山名一族の惣領である但馬守護山名祐豊が因幡へ侵攻、鳥取城下へ迫るも高信の前に敗北する。その後両者は毛利氏の仲介にて和睦、山名軍は但馬へ引き上げたことで伯耆に続き、因幡地域もまた毛利氏の支配下に置かれることとなった。再起を目指す尼子勢力と結んだ最後の因幡守護山名豊国は、武田高信を鳥取城から退けることに成功、天正元年（1573）因幡の本拠を守護所のある天神山城から鳥取城へ遷したが、直後に毛利氏の調略により尼子と決別、鳥取城は再び毛利氏の支配下に置かれることとなった。因幡の拠点となった鳥取城を廻る攻防は、次第に激化し、城下町周辺の様子は不明瞭であるが、調査状況より、未だ居住地としての利用は無かったとみられる。

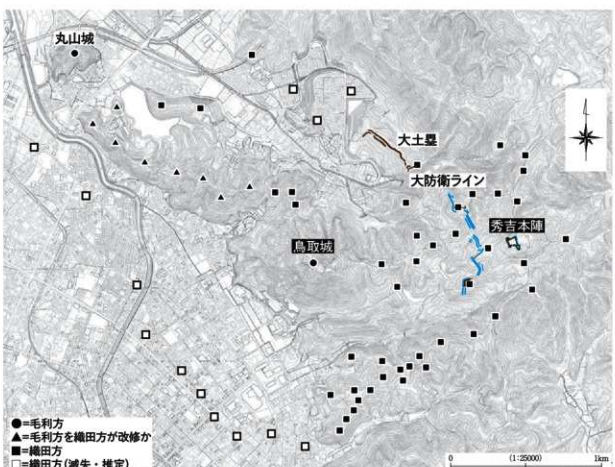
②羽柴秀吉の鳥取侵攻〔第6・7図〕

中国地方全体に勢力を広げつつあった毛利に対し、天下統一を目指す織田信長は覇権を因幡に接する但馬や播磨に拡大、鳥取城はその2大勢力の最前線に立たされることとなった。天正8年（1580）信長に命を受けた羽柴秀吉が因幡に侵攻する（第1次侵攻）。同時に弟の秀長は但馬へ侵攻、山名祐豊の居城出石城は陥落し、山名氏は没落する。秀吉の巧みな戦略の前に山名豊国は降伏を余儀なくなされたが、秀吉が姫路に帰陣すると俄かに情勢が変わる。毛利勢力が因幡まで勢力を盛り返すと、豊国の決定を不服とする重臣たちは山名豊国を追放し、代わって石見国福光城より迎えた毛利方武将の吉川経家を城主とし、再び秀吉に徹底抗戦し因幡国内を奪還する道を選ぶ。天正9年（1581）再び因幡へ侵攻した秀吉は、周辺の山々に大陣城群を巡らせ、鳥取城を厳重に包囲した（第2次侵攻）。鳥取城を取り囲む包囲網は海上・平野部・周辺の山々等あらゆる場所におよび、配置された陣城群の数は70ヶ所以上を数える。鳥取の「渇え殺し」と呼ばれるこの兵糧攻め作戦で、城兵はおよそ4ヶ月の間、飢餓状態で奮戦したものの経家の自決をもって降伏・開城した。この際の陣城群は現在でも山中にほぼ残存する。秀吉の第1次侵攻の際、「市場山下家共不残焼払候て、少虎口を引のけ陣取、二三町之間付城十五ヶ所申付」「羽柴秀吉書状写」（「紀伊続風土記附録」所収利生護国寺文書）との記録が残り、山裾には街が展開していたことがわかるも、範囲は不明瞭である。

③秀吉本陣の構造〔第8図〕

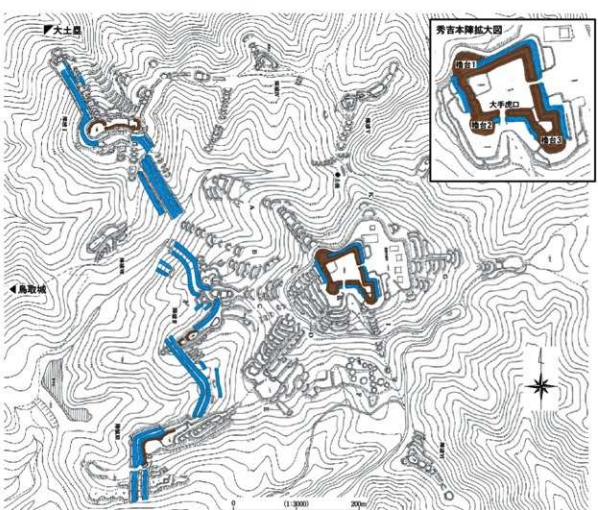
標高263mの久松山頂に占地する鳥取城に対し、秀吉は直線距離で東へ僅か1.3km程にある標高252mの本陣山山頂部に巨大な本陣を造営した。鳥取城は後に近世城郭として整備されたため、当時の様子を

第６図　因幡民談記　秀吉公鳥取城攻陣取図　鳥取県立博物館所蔵



第７図　鳥取城攻め陣城群分布図

知ることはできないが、本陣及び周辺陣城群は明瞭な形で残存する。本陣は標高５mにも達する土塁と堀に囲繞された平面台形状を呈しており、内寸50m、堀を含めた外法は100mにも達する巨大な区画である。虎口は２ヶ所あり南虎口が大手、東虎口が搦手となりいずれも土橋を用いた平入り虎口である。幅3.5m、高さ1.8m、長さ6.2mの東虎口に対し、南虎口は幅６m、高さ２m、長さ8.5mを測り、前面には幅10mを超える大手道が南側へと続き、道を挟む両側には小形の帯曲輪が階段状に連続する。鳥取城を望む土塁の南西・北西隅部には櫓台１・２とした11m四方の突出部を持つ。櫓台３とした内寸幅16m、長さ31m程の突出部が南東隅部にもあり、内部は３段に区画され、土塁に囲われた窪地状であることから、半地下式構造を持つ櫓の存在が推定される。櫓台１・２の前面、鳥取城側に向けて帯曲輪が隙間なく８段程度造られており、大手道を挟む曲輪と連続しながら本陣部分の守りをより強固なものとしていたことが分かる。さらに西側、本陣との比高差100mほどの谷底にかけて曲輪群が造られる。谷底ではこの曲輪群に直交する形で堀が２～３条並列して掘られており、竪堀として両側に延びた後、横堀となって続き、その総延長は700～800mにも達する。堀の途中の尾根上には陣城を配して守りを固め、北端より谷を隔てた対面には数百mにもなる大土塁へと接続する。これら一連の大防衛ラインからも、秀吉側の周到さや圧倒的な兵站差を伺うことができる。信長の武将としての秀吉陣としては最大であるとともに、土造りの城としては最高潮にあったといわれるが、一方で、一城郭を攻めるためのものとしてはあまりにも規格外であることから、対鳥取城だけの目的で造営されたのではなく、日本海側における毛利氏との一大決戦に備えたもので、信長を迎え入れるための陣であったと考えられている。



第８図　太閤ヶ平周辺の縄張り図

（２）石造りの鳥取城（近世城郭）

①関ケ原の合戦以前

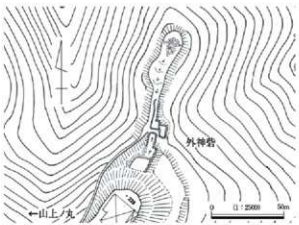
石垣を持つ城郭整備は秀吉の鳥取侵攻後に城代として入った宮部継潤に始まり息子・長煕の代まで続いたとされる。後に五奉行となる有力武将であった継潤は、天正17年（1589）に至り豊臣秀吉から正式に知行を宛がわれ、因幡国７郡の内、法美・邑美・八上・高草４郡と但馬の一部である二方郡を合わせた５万石を受領、名実ともに鳥取城主となった。子の長煕は慶長５年（1600）関ヶ原の合戦で西軍に属し改易となったため、その業績は不明な部分が多いが、宮部継潤父子は因幡における織豊政権の最重要拠点として、それまでの自然地形を利用した土造りの中世城郭から、石造りの織豊系城郭へと発展させ、現在の鳥取城の土台を造ったとみられる。近世に行われた度重なる整備により改変を受けているため、旧来の姿を伺うことは困難であるが、山上に残る登り石垣や山下の楯蔵下段石垣などは、当時の面影を僅かに伝えている。

この時期の山上へと至る大手道は、現在の久松山南西面ではなく、東側にあったと考えられる。山上部の曲輪は東側を意識した構造となっており、織豊系城郭化が進むと尾根端部には外神砦と呼ばれる石垣造りの外桝形虎口が築かれる。近世鳥取城の軸線とは90度も向きが異なる理由は、近世城下町エリアの未開発にあると考えられる。現在の市街地にあたる城下町部分は、近世以前は湿地帯であったとされ、幾重にも蛇行する河川を埋めたてて整備された様子は、近世初期の絵図からも読み取ることができ、近年の城下町発掘調査でも、古い遺構面は確認できず、湿地の上に突然城下町が形成されている様子が明らかになってきた。一方、近世城郭の位置する山裾部分からは弥生時代以来の遺物が出土することから、古くから人の生活があったことがわかる。

また、関ケ原の合戦後、西軍に属していた鳥取城は開城を拒否し、因幡で唯一東軍に付いた鹿野城主亀井茲矩が攻撃し落城させることとなったが、この際の戦闘は大日ヶ谷（樗谿）や湯所という山裾で行われている。後述の楯蔵下段石垣等、宮部時代には山下部分へ石垣が展開されていたことがわかるが、山下すべてが城郭化していたのではなく、城下町もまた山裾に展開していたとみられる。

『外神砦脇の登り石垣』〔第９図〕

山上の東側、尾根先端部にある石垣造りの外桝形虎口。急峻な斜面上に築かれた、大手口とみられるこの桝形からは南北方向へとそれぞれ石垣が伸びており、南側については斜面を30m程上昇しながら登り石垣を形成する。倭城に多様されるこの石積み技法は、朝鮮出兵に参戦した長煕が持ち込んだ可能性が高い。



第９図　外神砦縄張り図

『楯蔵下段石垣』〔写真１〕

多くの石垣が近代の改変を受ける中、後世の改変が行われていない数少ない石垣である。上段部分を含む山下の石垣中でも一見して様相が異なっており、その築造年代は山上部の外神砦同様16世紀代へと遡るとみられる。石垣勾配は比較的緩やかであり、角部の石積みをみると算木積みが未発達である点や、花崗岩質石材使用が基本である中、安山岩質を多様する点などの古相石垣に共通の特徴が残る。

写真１　楯蔵下段石垣

第10図　因州鳥取之城之図（部分）
岡山大学付属図書館所蔵

第11図　因幡国鳥取絵図（部分）
岡山大学付属図書館所蔵

第12図　因幡国鳥取城廻絵図（部分）
東京大学総合図書館所蔵

②17世紀〔第10～12図〕

関ヶ原合戦で西軍についた宮部氏はその後没落、鳥取城は因幡地域で唯一東軍についた鹿野城主亀井茲矩に攻め落とされると、翌慶長6年（1601）因幡7郡内、法美・邑美・八上・巨濃の4郡、6万石の知行を得て入城したのが池田長吉である。徳川政権は樹立されたが、大坂城には豊臣家が健在で豊臣恩顧の大名に対する支配強化のため、徳川家康は厚遇する池田家を西国境に配置したとも言われる。この時、姫路城に池田輝政、岡山城に忠継（輝政の次男）が入り、鳥取城には長吉（輝政の弟）ここに西国境の瀬戸内から日本海を縦断する徳川政権の拠点城郭網が構築され、鳥取城はその一翼を担った。

長吉は堀等の城郭部とともに城下も整備し、鳥取城の基礎を造ったとされるが、具体的な記録や遺構を確認することはできない。当時を描いた絵図は概略である第10図などが僅かに伝わるのみであり、詳細は不明である。なお、江戸時代の地誌を根拠に、これまで鳥取城の現存遺構のほとんどは池田長吉が構築したと信じられてきたが根拠となる『因幡民談記』（17世紀後半成立）には、局所的な普請の様子を詳述してあるが、現存遺構のほとんどを長吉が構築したという記載はない。

息子の長幸期の元和3年（1617）に備中松山城へと移封となり、交代で入ったのが姫路藩主池田光政である。光政入封に伴い小大名に分割統治されていた因幡と伯耆は統合され、現在の鳥取県域とほぼ同じ鳥取藩が誕生、検討の後、藩都を鳥取と定めた。しかし、姫路42万石から32万石へ減封されての入封と言えど、それまで6万石の居城であった鳥取城ではあまりにも手狭であり、大勢の家臣を養うための城郭・城下の大規模な整備が実施された。当時を描いた『因幡国鳥取絵図』（第11図）には、当時、最新鋭であった層塔型と想定される白亜の三階櫓が描かれるなどしている。天球丸の形態などは現在と異なっているものの、ニノ丸などと合わせ、幕末へと続く城郭の骨格部分の大半は、この時期に構築されたと考えられる。

幕府は寛永9年（1632）に池田光仲が3歳で岡山藩主を継ぐと幼少を理由に鳥取藩の光政との「御国替え」を命じた。光仲以降移封はなく、その家系が藩主を継ぐこととなり、ここに光仲を藩祖とする鳥取

池田家が成立する。半世紀を越えるその治世の間に、光政期より続く城郭整備は進み、骨格部分の大半が整ったとみられるが、正保元年(1644)の『因幡国鳥取城廻絵図』(第12図)をみると、内堀より内側部分に家臣団屋敷が多く確認できることからも、敷地不足の状況は引き続いているようであり、17世紀後半にかけて、徐々に堀外への移転が進む。元禄５年(1692)には久松山頂にあった天守が落雷により焼失する。檜皮葺等、瓦葺以外の屋根で描かれたこの建物は、その後再建されることはなく、以降、山下二ノ丸の三階櫓が天守代用施設として広く認識されるようになる。

③18世紀〔第13図、写真２・３・４〕

城郭が大きく転換期を迎えるのは３代藩主池田吉泰の治世である。吉泰は本丸を二ノ丸から中ノ丸(現三ノ丸)へと移転させるための大改築を実施、享保３年(1718)に完成した。しかし、享保５年(1720)４月１日、近世最大の火事と言われる石黒火事により山上ノ丸を含め、城内はほぼ灰燼に帰すこととなった。被害は建物だけでなく、翌年幕府へ提出された鳥取城修覆願絵図(第13図)からは、城内各所で石垣が崩壊している様子が分かる。火事の痕跡は発掘調査で度々確認されており、厚く堆積した焼土や赤変した石垣からも火事の大きさを知ることができる。大手門である中ノ御門の一部については当年中に再建されるが、その他の建物については期間を要し、三ノ丸と大手橋である擬宝珠橋は３年後、天守相当建物である二ノ丸三階櫓に至っては15年後のことであった。この再建工事に併せ各所で改変が進み、大手登城路も太鼓御門を抜けるルートへ変更された。また、中ノ御門から太鼓御門に至る大手登城路周辺では路面の嵩上げを確認した。これは焼けた旧面を覆い隠すように盛土し、新たな登城路を造るもので、最も厚い太鼓御門下では80cmを測り地盤高が上がるため、門高や石垣高は相対的に低くなる。建物は順次再建されるも、未曽有の大災害からの復興には長期を要することとなった。さらに19世紀の初めにかけては、度重なる城下の大火事や大洪水、疫病や飢饉が流行する時期でもあり、大規模な城郭整備が再び実施されるのは19世紀の半ばから幕末期にかけてである。

写真２　石黒火事とみられる火災痕(第34次調査)

第13図　鳥取城修覆願絵図(部分)
鳥取県立博物館所蔵

写真３　拡張された三ノ丸と青木馬場の法面

写真４　太鼓御門の嵩上げ
(下方の２石が旧礎石、段差部分が嵩上げ層)

写真5　太鼓御門前切石積石垣

第14図　鳥取城修覆願絵図(部分)
鳥取県立博物館所蔵

写真6　明治元年架橋の擬宝珠橋

写真7　解体中の鳥取城(明治8～12年)

④19世紀〔写真5、第14図〕

19世紀の半ばになると、本丸を三ノ丸から二ノ丸へ戻す動きが起こり、嘉永2年(1849)完成で敷地を北西方向へ拡張、石黒火事以来の御殿群の再建となったが、居住空間として不向きであると言う理由から、僅か数か月で放棄され、本丸機能は再び三ノ丸へ戻ることとなった。また、嘉永3年(1850)太鼓御門下手の登城路沿いに城内唯一の切石積みの石垣が構築される(写真5)。地震による崩落の修理として積まれたもので、人目に付きやすい部分をより丁寧に仕上げている様子が分かる。

城内最後の大整備は文久2年(1862)完成の三ノ丸大造成である(第14図)。南東側へ大拡張を行い、御宝蔵の移転、登城路の変更により、三ノ丸内の敷地面積を広げている。再び活性化した整備であったが程なくして幕末を迎えることとなる。

(3)近代以降の鳥取城〔写真6～11〕

近代に入ると、明治元年(1868)には大手橋である擬宝珠橋の架け替えが行われ、最後の太鼓橋となった。以降、城郭としての建物新築はなく、城は明治2年(1869)には政庁となるも、2年後の廃藩置県により国有化、所管は藩主から兵部省へと移管され、城郭機能は失われる。明治6年(1873)の所謂「廃城令」においては存城とされたものの、陸軍省の査定により兵営として利用できない大部分の建物(櫓門等を含む71棟)は明治8年(1875)に解体された。残った建物は改修され分遣隊の兵営として利用されるが、西南戦争の終結により隊は撤収、建物は売却されることとなり、明治12年(1879)には象徴的な建物であった二ノ丸三階櫓をもってすべての解体が完了したとされる。

その後、明治22年(1889)現在の鳥取西高等学校の前身となる尋常中学校が移転開学するが、この頃には桝形石垣奥壁部分が解体され、橋から一直線の進入路及びグラウンドが整備されたとみられる。時を同じくして城跡の旧藩主への払下げが認められ、再び池田家の所有となった。城内に学校は存在するも校地以外への立ち入りは認められてはいなかった。池田家出資のもと明治40年(1907)には皇太子の山陰巡幸に際しての宿泊施設として扇御殿跡に仁風閣(重要文化財)が建設され、大正期に入り大正12年(1923)には、折下吉延の設計により久松遊園地(現

久松公園）として整備、公開された。また、市民の強い要望を受け、昭和４年（1929）には久松山の全山が開放されることとなった。私財を投じて城跡整備が進められたが、昭和18年（1943）に発生した鳥取大地震では千人を超える死者が出ることとなり、城内各所で石垣が崩壊した。翌年には震災一周年の復興記念事業として、古跡の保存を条件に久松山が池田家より鳥取市へ寄贈された。

戦後になると昭和32年（1957）には国史跡となり、城郭の保護が図られると、次いで地震にて崩落した石垣の修理を開始、二ノ丸三階櫓下石垣に始まった工事は50年以上を経た現在まで毎年実施されている。園地には、動物舎が置かれ永らく動物公園として親しまれており、一部民地も存在したため住宅や売店などもみられた。昭和30年代になると木造橋は老朽化のため通行禁止となり、昭和38年（1963）には高校の新築と併せ現コンクリート橋へと架け替る。また、この工事と並行して実施されたのが桝形石垣の修理である。明治期に解体された桝形石垣奥壁のうち新造されていた端部が鳥取大地震により崩壊したもので、再度積み直しが行われた。昭和40年代に入ると堀の浚渫や堀沿いの石垣修理が実施され、昭和50年代に入ると公園内の民家や動物舎の移転が完了し、現在の公園へと整備された。

戦後幾度となく持ち上がった、鳥取城復元計画であったが、具体的な計画策定に至ることはないままであった中、平成17年（2005）に史跡鳥取城跡保存整備基本計画、翌年の実施計画でついに形となった。以降復元へ向けたデータ収集を目的とした試掘調査が開始され、第28次発掘調査からは本格的な全面調査へと移行、現在は復元工事として進行中である。

平成30年（2018）には、復元整備の第一弾として擬宝珠橋が、令和２年度（2020）には第二弾として中ノ御門表門の復元工事が完了、多くの市民を集めての完成記念式典が行われた。令和３年度（2021）現在、３年後の完成を目指し、中ノ御門櫓門の復元工事を実施中である。

写真８　鳥取大地震で崩壊した太鼓御門石垣

写真９　二ノ丸三階櫓石垣修理（昭和36年）

写真10　擬宝珠橋渡り初め（平成30年）

写真11　中ノ御門完成式（令和２年度）

写真12　中ノ御門(手前)太鼓御門(奥)

写真13　解体途中の鳥取城

写真14　残存する土塀

3．在りし日の姿〔写真12～14〕

解体以前に撮影され、今に残る古写真は現在7点が確認されている。明治6年(1873)の所謂「廃城令」で存城とされ、明治8年(1875)には71棟の建物が不要と分別され解体、払い下げされた。三ノ丸(本丸)の建物は明治10年(1877)に改修を受け、姫路からの分遣隊の営所となるも翌年には廃止、明治12年(1879)には残存していた二ノ丸三階櫓などの建物すべてが解体撤去された。

古写真は、撮影技師のいなかった鳥取において、明治12年(1879)に兵庫県姫路の写真屋へ見習いに出ていた喜多村勘四郎を呼び戻して撮影されたと伝わる。建物の多くが存在していない写真6(15上)・7・13がその時写されたものと考えられるが、写真12については、中ノ御門・太鼓御門ともに残存し、髷頭、佩刀する人物が写ることから、これらより古い明治4年(1871)の散髪脱刀令以前へ遡る可能性があり、喜多村とは別の撮影とみられる。

解体後、陸軍の駐屯地となるも、明治22年(1889)には尋常中学校が開学し、以降学校用地として利用される。学校の古写真を見ると、少なくとも昭和の初頭までは、校内各所の石垣上には城の塀とみられる土塀が確認できる(写真14)。また、昭和50年(1975)の大風で倒壊するまで、西坂下御門が残存していた。このように解体完了とは言えど僅かながら残存した部分もあったようである。

4．鳥取城跡関連年表

表6　鳥取城跡関連年表1

西暦	元号	出来事
1545	天文14	久松山に出城が築かれたとされる(それ以前より中世山城として存在か)
1562	永禄5	城番であった武田高信が久松山を拠点として、因幡守護の山名氏に反逆
1573	天正1	武田高信を退けた因幡守護山名豊国が、布施天神山城から鳥取城へ守護所を移転
1580	天正8	羽柴秀吉の第1次鳥取侵攻、城主山名豊国降伏、後に豊国追放され毛利方が鳥取城を再奪還
1581	天正9	羽柴秀吉の第2次鳥取侵攻、兵糧攻めの末、毛利方降伏、城主吉川経家切腹
1581	天正9	秀吉の武将、宮部継潤(後に5万石)が城主となり、近世城郭へと改修開始
1600	慶長5	関ケ原の合戦で西軍に付いた宮部氏は没落、亀井茲矩が鳥取城攻撃、城下焼討ち
1601	慶長6	池田長吉、法美・邑美・八上・巨濃郡6万石で城主となる
1617	元和3	池田光政による因幡・伯耆の両国支配。鳥取を32万石の藩都に選定、鳥取城を居城とする
1619	元和5	城と城下町の大拡張工事着手
1621	元和7	擬宝珠橋が創建
1632	寛永9	池田光仲が城主となる(鳥取池田家の成立)、やがて鳥取城下に水道施設が整備される

表７　鳥取城跡関連年表２

西暦	元号	出　来　事
1645	正保２	武家地の水道施設が整備され、水道谷から上水が供給される
1678	延宝６	擬宝珠橋架け替え
1692	元禄５	山上ノ丸の天守が落雷により焼失、以後再建されず
1694	元禄７	擬宝珠橋架け替え
1715	正徳５	擬宝珠橋架け替え
1718	享保３	中ノ丸が拡張され、藩主（城主）の居所が移る。以後、中ノ丸を二ノ丸（後に三ノ丸）と呼称する
1720	享保５	４月１日城下の大火（石黒火事）により、城内はほぼ全焼、　中ノ御門表門は同年再建
1721	享保６	大手登城路、三ノ丸を中心に再建工事開始、２年後に完成
1722	享保７	堀浚渫
1723	享保８	擬宝珠橋再建される、三ノ丸普請完成
1724	享保９	中ノ御門渡り櫓再建
1726	享保11	南御門再建
1728	享保13	石黒火事で被災した二ノ丸三階櫓石垣の修理完了
1729	享保14	袋川洪水、大手橋の内まで浸水
1733	享保18	内堀浚渫
1735	享保20	二ノ丸の三階櫓、走櫓は再建されるが、御殿は再建されず
1749	寛延２	擬宝珠橋架け替え
1774	安永３	擬宝珠橋架け替え
1800	寛政12	内堀浚渫
1802	享和２	内堀浚渫
1803	享和３	擬宝珠橋架け替え
1807	文化４	この頃、天球丸の巻石垣が築かれる
1825	文政８	幕府より屋根瓦への葵紋使用を許可される
1843	天保14	二ノ丸走櫓など焼失
1846	弘化３	二ノ丸の御殿、菱櫓、表御門など再建され、一時的に藩主の居所が三ノ丸から二ノ丸へ移る
1849	嘉永２	二ノ丸を西方へ拡張
1850	嘉永３	大手登城路沿いに城内唯一の切石積み石垣構築
1858	安政５	三ノ丸の南側に籾蔵が建設、城域が拡張する
1861	文久１	三ノ丸を東側へ大拡張
1863	文久３	扇御殿、宝隆院庭園（現存）が造営
1866	慶応２	鳥取城内に初めて写真が持ち込まれ、池田慶徳世子・輝知の撮影が行われる
1867	慶応３	西坂下御門（現・復元門）が創建
1868	明治１	擬宝珠橋架け替え
1871	明治４	廃藩置県後、兵部省の管轄となり、政庁の機能は城外へ移転
1873	明治６	廃城令で軍事上の必要性が認められた鳥取城は、存城となり、陸軍省の所管となる
1875	明治８	陸軍省によって不要な71棟の建物が解体撤去
1877	明治10	姫路歩兵隊の分遣隊派遣が決定、兵舎として三ノ丸御殿等を転用
1879	明治12	西南戦争終結後、治安安定により分遣隊の撤退が決定 大型建造物（二ノ丸三階櫓等）を撤去。城内の解体撤去完了
1884	明治17	陸軍、城内井戸へ木樋を設置し取水する
1889	明治22	陸軍から中学校用地として三ノ丸が鳥取県へ無償貸与され、尋常中学校が移転開学
1890	明治23	陸軍から旧藩主鳥取池田家へ城跡の払い下げ
1907	明治40	扇御殿跡に仁風閣が建つ
1912	明治45	二ノ丸、天球丸で山陰鉄道開通式協賛会開催
1923	大正12	久松遊園地開設。翌年、城代屋敷跡に鳥取公設運動場が開設
1936	昭和11	久松山全山が市民に開放される、鳥取城復興期成会が結成される
1943	昭和18	鳥取大地震により城内各所で石垣崩落、運動場に仮設避難小屋が造られる
1944	昭和19	城跡が旧藩主池田家より鳥取市へ寄贈される

表8　鳥取城跡関連年表3

西暦	元号	出　来　事
1945	昭和20	占領軍が入る
1954	昭和29	鳥取県が史跡鳥取城跡を文化財として仮指定
1957	昭和32	鳥取城跡、太閤ヶ平とともに国史跡に指定
1959	昭和34	鳥取大地震により被災した石垣の修理工事開始
1964	昭和39	鳥取西高等学校の校舎新築
1969	昭和44	久松ロープウェイ開業、昭和50年(1975)まで営業
1972	昭和47	久松山整備審議会設置、鳥取県立博物館会開館
1975	昭和50	堀浚渫に伴い遷撤去、唯一現存してた西坂下御門が大風により倒壊
1978	昭和53	久松公園内の動物舎および民家の移転完了
1985	昭和60	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存管理計画策定
1987	昭和62	久松山北側(円護寺)の追加史跡指定
2005	平成17	史跡鳥取城跡保存整備基本計画策定
2006	平成18	史跡鳥取城跡保存整備実施計画策定
2018	平成30	掘宝珠橋復元工事完了、一般共用開始
2020	令和2	中ノ御門表門復元工事完了、一般共用開始

写真15　古写真と現況

第３章　調査の成果

第１節　調査の方法

１．調査区の目的

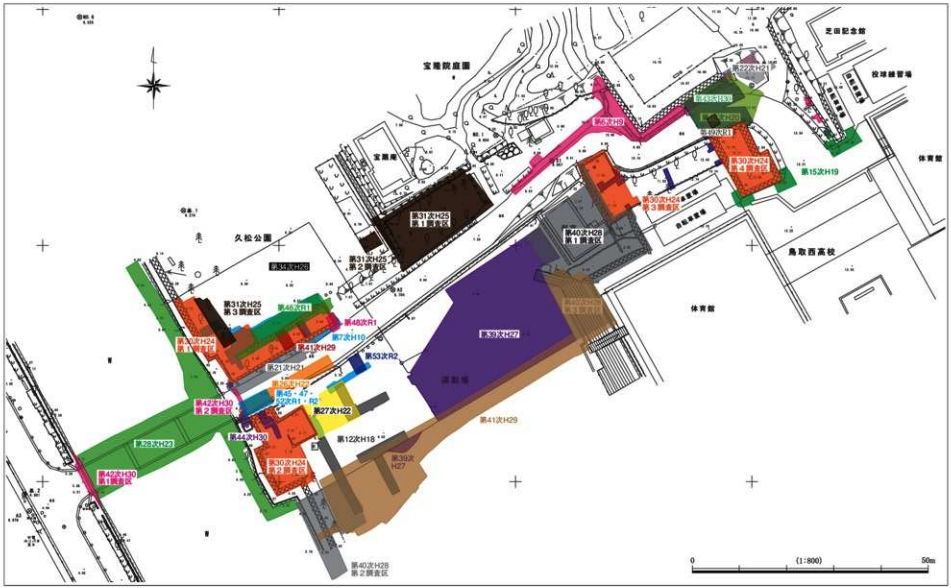
第41次調査結果は、2020年発行の報告書にて報告済である。今回報告する２つのトレンチはこの調査中に実施したものであるが、平面的な大規模調査とは異なり、中ノ御門石垣解体修理に伴う調査であったため先の報告書には含めず、その後一連の修理に伴い実施した第46・48・53次調査と併せてここに報告することとした。同地点は現代の石垣積み直しや樹根の影響で孕み出しが著しい石垣を解体した際、その内側へトレンチを設定し内部状況の把握を目指した。第42次調査は擬宝珠橋の復元工事に伴う調査であり、コンクリート橋の撤去後、剥き出しとなった旧橋設置の際に大きく削平された橋袂部分の土層断面の観察を行った。第43次調査は太鼓御門の調査である。かつての調査では、分割での調査であったため、未調査部分を残しており、これらの調査と全体の三次元測量を行った。続く第49次調査では、近代に動かされた門礎石の取り上げを行い、下部の三次元測量を行った。第44次調査は、擬宝珠橋および中ノ御門復元工事に併せ、掘り下げが必要な範囲についての事前調査である。第45・47・52次は中ノ御門表門復元工事に伴う調査である。傾いた礎石を据え直すため取り上げたところ下層より別遺構が発見されたため３ヶ年にわけて調査を行った。第48・53次調査は今後積み直し予定の中ノ御門石垣雁木部分の調査である。第50次調査は城内園路、第51次は二ノ丸で実施した調査で、近年の豪雨により城内の排水経路の再検討に必要なデータの収集を行った。

２．名称及び出土遺物について

第２図の整備復元イメージ図のとおり、近世当時、擬宝珠橋を渡ると内桝形石垣が築かれており、正面には城の正門にあたる中ノ御門表門があり、ここを抜け桝形石垣内へ歩を進めると緩やかに上昇する傾斜路が続いていた。これを進み正面の桝形石垣奥壁前で右折すると、眼前に迫るのが中ノ御門の内門となる櫓門である。石垣間に立つ、この２階建ての門を抜けた先はいよいよ城内であり、さらに登城路を進むと、坂道へと繋がり、外桝形石垣を通ると、本丸入口の主要な門である太鼓御門に至る。時を知らせる太鼓を打ったことに由来するこの渡櫓門は、一階部分が門で二階部分には太鼓が置かれたとされる。これらを通った先、現在の鳥取西高等学校のある場所が、本丸となる三ノ丸である。

鳥取城の正門にあたる“中ノ御門”とはこの両門の総称であるが、文献上にもそれぞれの門自体に正式な呼称がなく、便宜上、堀に面した正面の門を“表門”、内門を“櫓門”と呼称していることから、調査・報告に際してもこの名称を使用した。

調査で最も多く出土する遺物は瓦であり、次いで陶磁器類などが挙げられる。出土遺物の大半を占める瓦・陶磁器類であるが、いずれも細かく割れた破片ばかりであり、接合が可能なものは少なく、接合できたものを含めても残存率は全体の２分の１以下と非常に小さい。今回報告する遺物は、その中でも図化し得た遺物であり、土器類については径を復元できるものを、瓦については瓦当面を有するもの及び全形が分かるものを中心に選定し記載したが、出土量全体と比較すると僅かな数に留まる。なお、掲載遺物の計測方法については第88図の通りである。



第15図　大手登城路周辺調査位置図

第２節　第41次調査(石垣内トレンチ)

１．概　要

期間：平成29年(2017)６月12日～11月９日　　調査面積：610㎡（全体）

本報告：面積：10.7㎡（Tr1:9.0㎡、Tr2:1.7㎡）

平成29年(2017)に実施した第41次調査は史跡整備範囲と鳥取県立鳥取西高等学校グラウンドとの境界付近の状況を明らかとする大規模調査であり、その結果については報告済である。この調査時、中ノ御門復元工事の一環で実施されていた石垣修理工事では、樹根等の影響により大きく孕み出していた石垣の解体作業が進行中であった。今回の対象となる中ノ御門桝形石垣の北西面(久松公園側)中位付近には横目地が通り、上半部の積み足しが明確であったが、詳細な記録が無く、時期特定ができていなかったことから、今回の調査を実施することとなった。解体工事が横目地付近まで進んだ時点で、石垣内部２ヶ所にトレンチを設定し、構築過程の解明に務めた。なお両トレンチとも第30次調査第１調査区の第３・５トレンチと同じ位置にあり、本調査の時点ですでに失われていた上層部分と、解体された石垣についてはこの時の図面を合成して使用した。

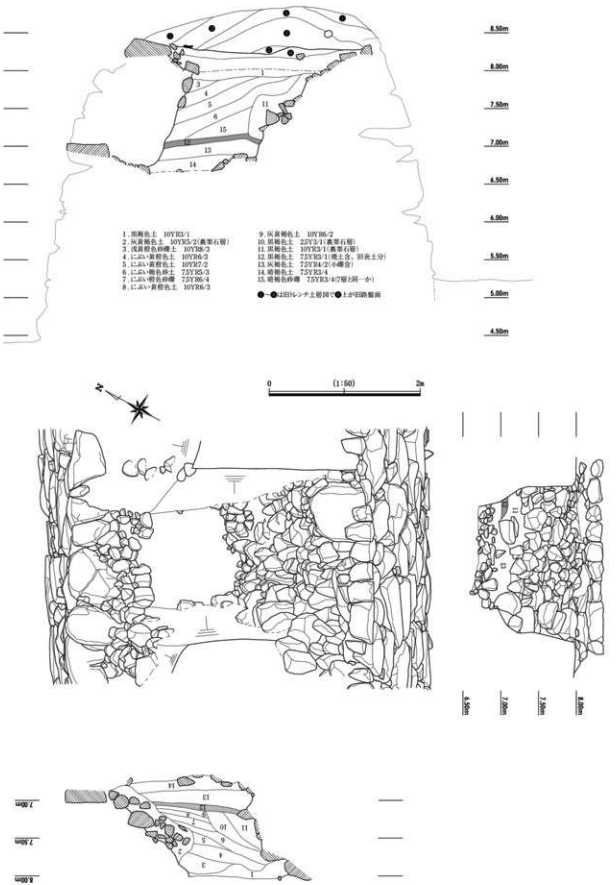
第１トレンチ(Tr1)　〔第17図、図版１〕

２．遺　構

第30次調査第１調査区第３トレンチとほぼ同じ位置に設定した。旧調査により石垣上の幕末地表面は石垣天端に近い標高8.2～8.3m付近にあったことが判明している。面上には明治７年(1874)に実施された中ノ御門解体時に廃棄されたとみられる瓦片が堆積し、その上には近代以降の堆積土が30～40cm載っていた。本調査時すでに旧地表面下まで掘り下げていたことから、１層とした層の上面は旧路盤面ではなく地表下に厚く堆積する旧トレンチ７層中に位置する。なお旧路盤面は❻層上面の標高8.3m付近にある。

標高7.0m付近にある北西側石垣の横目地部分の上面は、やはり平滑な面であったことから、ある時

第16図　第41次調査石垣内トレンチ位置図



第17図　第41次調査石垣内第１トレンチ実測図

期の天端であることが判明した。後述の第７節の第46次調査にてこの石垣の下部を調査したところ、石垣の裾はトレンチ周辺で標高4.4m付近にあったことが明らかとなった。ここから20～30cmが埋めたてられたとすると大凡２m程度露出した石垣であったことが分かる。一方で幕末期の路盤面は標高5.8～5.9m付近にあることから最終的には石垣下部は１m以上も埋まった状態であった。これには石垣の改変と周辺地盤の嵩上げが関連している。

土層をみると石垣の横目地の裏側で大きく土層が変化していることがわかる。旧天端の裏にある12層は、対面側へ向けて緩やかに上昇し、内部には多量の炭片を含む焼土層である。横目地以下が被熱により赤変していることからも旧天端に繋がる旧地表面とみられ、この層を境に上部は斜めに、下部は水平方向に土が敷かれている。

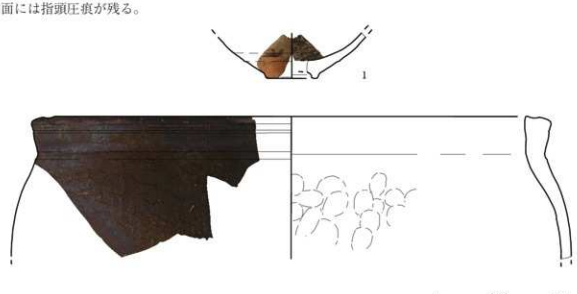
１層は、幕末路盤面の直下にあり、面を構成する層である。南西壁の２層は横目地上に積み足された石垣の裏栗石層で拳～人頭大の石を多く含む。石垣裏に50～60cm程にみられるこの層から、既存の層を掘り込んだ後に石垣が積まれた事が分かる。掘削は下段石垣の天端石の背面付近まで及ぶ。北東壁の斜面部も大凡この２層の掘り込み層のラインと一致する。３～９層は北西側へ向けて大きく傾斜する層である。３～５層はほぼ同質で一体的な土質である。それ以下になると様相が変わり、６層は黄白色系の細砂を多量に含み、７層は中には細かな礫が多くみられ、８・９層は再び砂層である。15層もまた礫が多く含まれることから７層と一連の層とみられる。10・11層は色調が変わり、傾斜角も異なり北東壁側で明らかなとおり、南東側石垣の裏栗と一体的な層である。南東側石垣は、北西側上段とは異なり、掘り込んで据えたものではないことがわかる。

標高7.1m付近に広がる12層は焼土層であり、この層を境として下層は水平堆積となる。南東側へ向かい緩やかに上昇するこの層は、２層により削られるも、本来北西側石垣の旧天端石付近から続いていたとみられることから、被熱した旧天端石と一帯の旧天端面であったと考えられる。

南東壁面をみると石垣裏栗石層が上下に分かれ間には13層が挟まり、上部に比べ下部が小さく、隙間なく詰められていることから、この石垣の上半部分もまた後に積み直されていることがわかる。榊形内から見ると付近で僅かに横目地が通るが、北西側のような天端石上への単純な積み足しではなく、組み直しがなされたと考えられる。

３．遺　物　〔第18図〕

１は11層から出土した肥前の陶器碗の底部、２は10もしくは11層から出土した越前甕で内外には鉄泥、内面には指頭圧痕が残る。



第18図　第41次調査石垣内第１トレンチ出土遺物実測図

第２トレンチ(Tr2)〔写真16、第19・20図、図版１〕

４．遺　構

第30次調査第１調査区第５トレンチとほぼ同じ位置に設定した。第１トレンチ同様、旧調査により石垣上の幕末路盤面は石垣天端に近い標高8.2～8.3m付近にあったことが判明している。面上には明治７年(1874)に実施された中ノ御門解体時に廃棄されたとみられる瓦片が堆積し、その上には近代以降の堆積土が30～40cm載っていた。現地表は標高8.0m付近にあることから、幕末地表面ではなく、表土下20～30cmに位置することになる。

土の堆積状況は第１トレンチと同様である。１層は撹乱の可能性もある土。２層は北西側石垣の裏栗石層である。第３～５・11・12層を掘り込み石が充填される。３～５層は北西側へ向かい傾斜し、一体的に敷かれたとみられる。褐色土の４層を挟み３・５層は砂を多く含む層で、もともとあった６層の傾斜の上に積まれたように見受けられる。６・７層も北西側へ向かい傾斜するが、３～５層とは土質が異なることからも、これより一段階古い層と考えられる。８・９層は南東側石垣の裏栗石層で、人頭大程の比較的大型の石が目立つ。

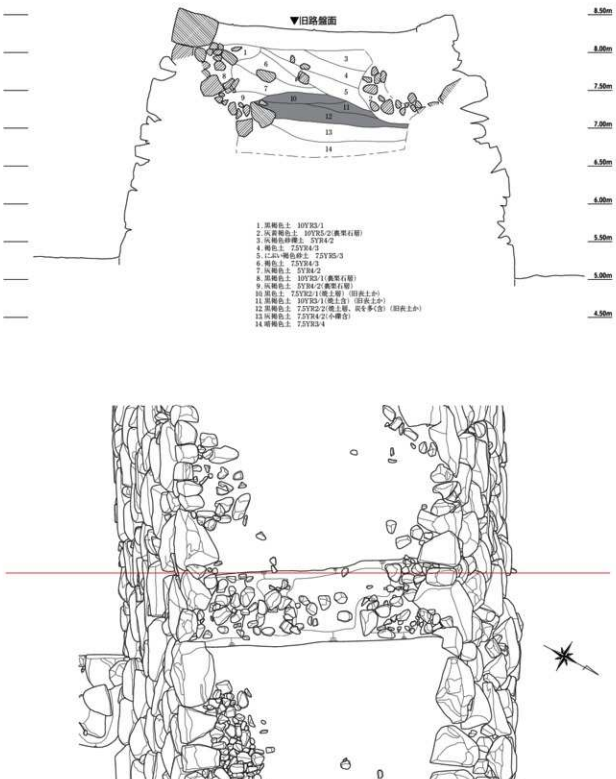
10層以下は上層とは異なり水平方向に堆積する層である。標高7.5mを上面とする10層とその下にある11層はともに黒色を呈する焼土層で、それぞれ15cm程の厚みを持ち写真16のように山なりの形に検出されている。層自体が焼けたものではなく、焼けた土を集積させたような状況にある。その下の12層もまた炭片を多く含む焼土層で、上面の標高は南東側で7.4m、北西側へ向かい緩やかに下降し、北西側石垣の横目地へと続くことから、当層が被熱した際の旧表土と考えられる。13層は第１トレンチの焼土層下にあった13層と同質で小礫を多く含んだ層である。最下層14層の南東側をみると裏栗石が見られないことから、第１トレンチに見られた裏栗石の上下層の中間にあった空間部分に相当するか。

第１トレンチ同様に石垣内中央付近に12層の旧天端面があり、その後南東側の上半部を組み直して積み上げ、裏側は６層のような土羽状としていたものが、やがて北西側の石垣が積み足されて現在の姿となったと考えられる。

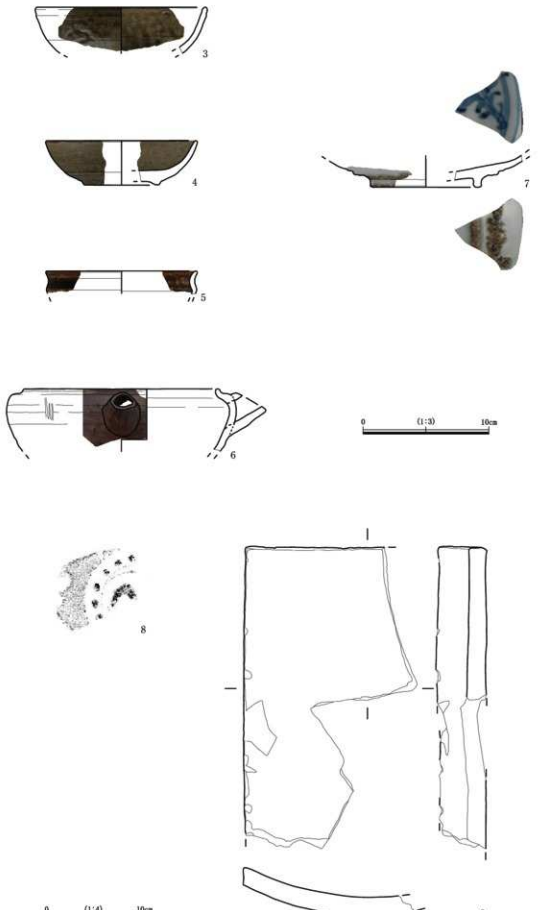
５．遺　物　〔第20図、図版８〕

３は10層上面、４～７・９は10もしくは12層、８は３もしくは４層からの出土である。３・４は肥前の陶器碗、５は瀬戸・美濃の陶器碗、６は備前の陶器片口、７は皿で、高台付近には砂が付着する。８の巴文軒丸瓦は類例がなく、新型の可能性がある。９は平瓦か。

写真16　第２トレンチ焼土層検出状況



第19図　第41次調査石垣内第２トレンチ実測図



第20図　第41次調査石垣内第２トレンチ出土遺物実測図

第３節　第42次調査

１．概　要

調査期間　第１調査区(城下側)：平成30年(2018)３月23～27日　面積：13.3㎡
　　第２調査区(城内側)：平成30年(2018)４月４～11日　面積：3.3㎡

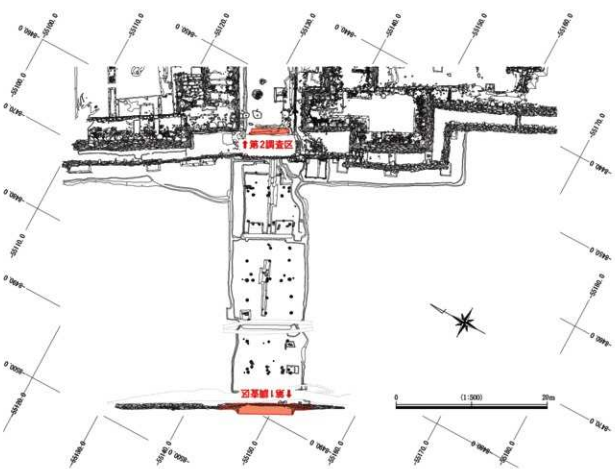
平成27年(2015)に始まった大手橋である擬宝珠橋の復元工事では４脚あるコンクリート橋脚部のうち、水面下の根元部分だけを残し、橋梁部を撤去、残った橋脚上を跨ぐように新たな水中梁を設け、その上に木造橋を架梁した。

今回の調査は、コンクリート橋の解体撤去と合わせ、両袂の石垣裏に埋設された橋台部分付近で実施した。昭和38年(1963)に完成したコンクリート橋建設工事では、本来残存していた橋の取り付き部周辺の堀石垣を解体し、裏側の土を削り橋台を敷設し、再び埋め戻し、石垣を積み直していた。そのため復元工事に際してはまず両石垣のうち、昭和38年(1963)の工事にて積み替えられ、本来とは大きく異なる積み方を見せる石垣および、その胴木を取り外し、背面にある攪乱された土を除去した。その後、調査として人力にて橋台周辺の精査を行い、削り取られた壁面を検出し、その土層堆積状況を記録した。

第１調査区〔第22図、図版１〕

２．遺　構

第１調査区は、城下側の橋の取り付き部に位置する。コンクリート橋建設時に南東側を大きく削平するも、現状では堀沿いの歩道及び道路下に位置することから、掘り方内のすべての再掘削はできず、復元工事においてもそこまでの掘削の必要は無かったことから、橋台の左右幅約3.5mずつの範囲について露出した石垣裏面部分を調査対象とし、土層の精査に務めた。



第21図　第42次調査区位置図

１～４層はすべて現代工事の造成層である。両石垣を見ると上から２石目、標高4.4m付近を上面として大型の石材が並ぶ。本来の石垣天端はここであり、最上段およびその背面にあたる１層は中央付近に向かい山なりとなる現代工事盛土で、コンクリート橋と周辺路盤を合わせるための層である。２層は埋設管の埋砂、３層も何らかの工事の層と見られる。４層はコンクリート橋設置工事の掘り方で、両側へ向かい大きく開く。

僅かに残る５・６層は、石垣に伴う近世期の層である。５層は明るい褐色を呈する整地層で、向かって左側については大きく削平されるが、右側については上面を削平されるも旧石垣天端付近まで35～40㎝程も厚く敷かれる。６層は裏栗石層で、標高4.0m付近を上面とし、現状で標高3.0m付近まで続く。右側と比べ左側の方がやや大きめの石材を使用する。なお、遺物は出土しなかった。

第２調査区

３．遺　構　〔第23図、図版１〕

第１調査区とは異なり、橋台の裏側壁面の調査である。中ノ御門両側の石垣前面角の延長線上の幅5.1mを天端として橋台部までの傾斜部分が調査範囲である。調査時地表部には以降保護の為の不織布と保護砂が敷かれ最終路盤面が隠れていたことから、第23図のとおり、本来の面は破線とし、参考の為に、約2.1m後方にある中ノ御門表門礎石中央付近の断面図を追加した。

１層は今回の工事で入れられた砕石、２層も現代層である。３層は戦前に存在していた電柱の掘り方とみられ、４層も同様か。５層は２層に類似し、現代土とみられる。近現代層である４・５層が近世層である７層下に位置するようにみえるが、これは壁面が傾斜であることによる逆転である。

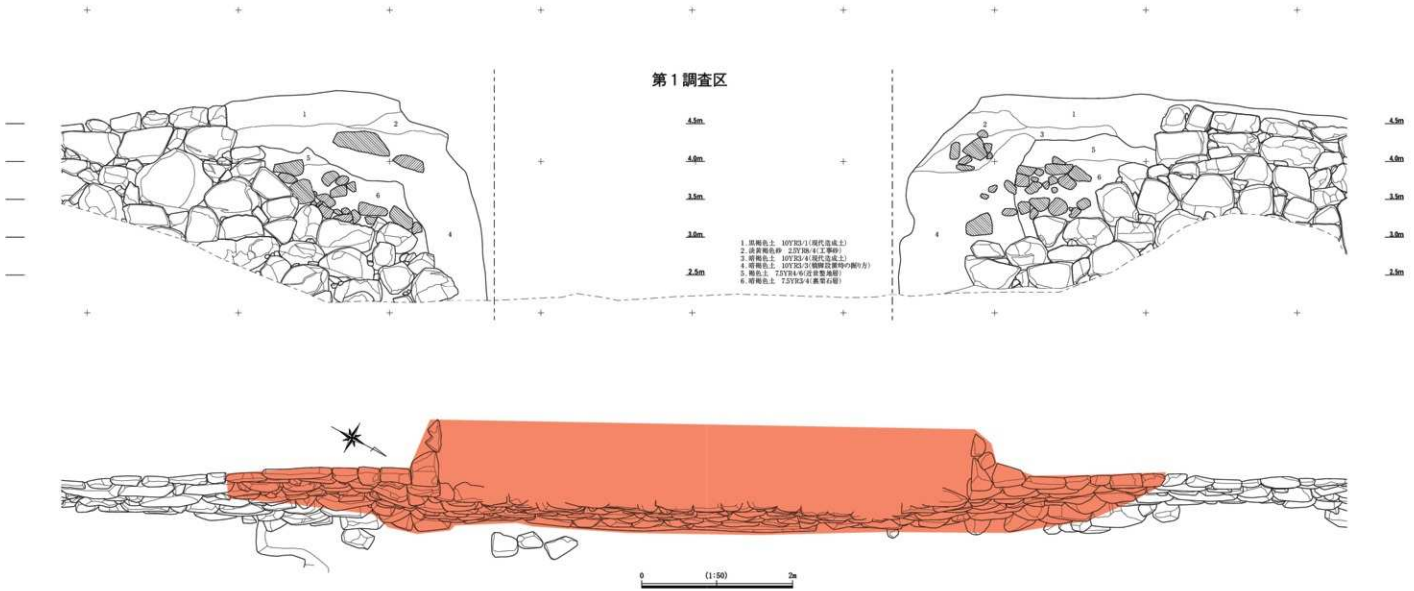
６層以下は近世層である。６層は15㎝程の厚みがある層で、城内整地層によくみられる黄色系の砂礫を用いる。７層は厚さ３㎝程度と薄いながら、硬化しており、ある時期の路盤面とみれらる。標高4.7mの左方より、水路のある右方へ向かい緩やかに傾斜する。黄色系の土を用いた上半部分の層は基本、７層と同様の傾斜をみせる。８層もまた、砂礫を主体とした固く締まった層である。比較的厚い整地層である９層を挟み、11層は様相が異なる。標高4.5m付近を上面として、中央付近で厚さ40㎝ほども堆積する11層は、炭片や焼土を多量に含む層で、均等な整地層とは異なり、投棄された様相を呈する。僅か数㎝の12層の下に部分的に残る13層は、11層の上面と同じ位の高さにあるが、こちらは、被熱し、赤変した路面である。直下の14層は黒変した焼土層であることから、この13層が露出していた時にこの場で火事などの被熱行為があったとみられ、11層はその時出た焼土の堆積である可能性があり、その後に９・10・12層を敷いて新たな路面としたと考えられる。細砂を用いた15層の下には砂礫主体の16層があり、17層と18層は若干離れているが、ほぼ同質であることから一連の層である可能性が高い。

比較的厚い19・20層の下で再び様相が大きく変わる。23層は広範囲に広がる焼土層で、標高4.0m付近にある24層は、被熱し赤変した焼土面である。中央付近には内寸・深さ30㎝の溝と見られる石組遺構が残る。右岸の天端は標高4.25m付近にあり幅30㎝、左岸は25㎝を測り、右岸に大型の石材を用いながら３～４段ほど積み上げる。内部には21・22層の焼土が堆積するが、これらは上部の11層とは異なり、23層に関連するとみられる。また右方24層上には標高4.2mを天端とした２石が残る。平面をみると溝とも考えられるが、天端が平坦であることから、礎石である可能性も残るが性格は不明である。いずれにせよ標高4.0～4.2m付近に広がるこの23・24層が露出していた段階でも火事などによる被熱する行為があったことがわかる。27～30層は中央溝の掘り方で、31層は溝が機能していた頃の堆積土とみられる。

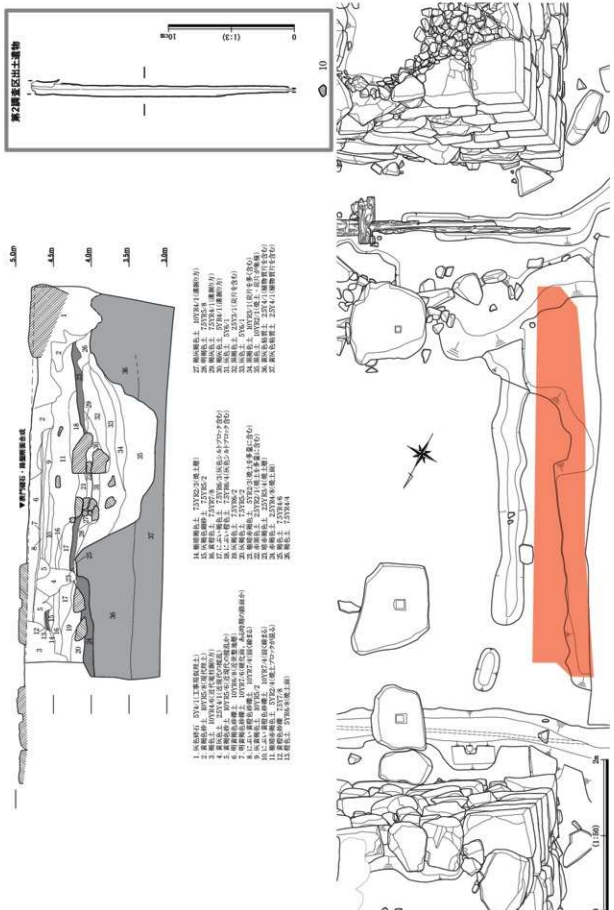
32～35層は幅2.5m深さ1.0m程を測る大型の掘り方埋土である。標高4.2m、36層の上面付近より大きく掘り込み、32・34層は炭片を含み、最下層の35層は焼土や炭片の堆積層であるがその性格は不明である。36・37層は城形成以前の層となる粘質土層で、根などの植物質を含む。

４．遺　物　〔第23図〕

36層より箸が一点出土した。



第22図　第42次調査第１調査区土層断面図



第23図　第42次調査第２調査区土層断面図

第４節　第43･49次調査

１．概　要

調査期間　第43次調査：平成30年(2018)５月８～９月12日　面積：130.7㎡
　　第49次調査：令和元年(2019)10月９～11日　面積：4.6㎡

平成20年(2008)に実施した第18次調査では、道路面直下で太鼓御門礎石(上層礎石)を確認した。また、上面標高で100㎝下より別の礎石(下層礎石)を３石検出した。下層礎石は被熱により赤変し、周辺には焼土がみられたことから、享保５年(1720)の石黒火事の痕跡と推定した。その後、地山由来の良質な土を用いた路盤の嵩上げが行われ、新たな礎石が据えられたことが判明した。第18次調査当時、調査地は道路として使用中であったため、門の半分ずつにわけての調査の結果、中央付近に未調査部分を残し、三次元測量も未実施であったため、今回第43次調査として改めて太鼓御門基本設計へ向けた全面調査を実施することとなった。

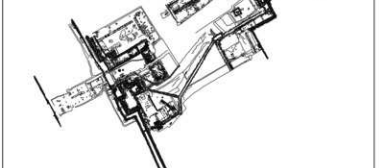
調査の結果３つの上層礎石のうち２石は設置状況から近代に移動されていることが明確となったため、調査中に取り外しを行い下部を調査した。残る１石も想定位置とは異なっていたが先の２石と設置状況が若干異なっていたため残地したが、検討を重ねた結果、同じく近代に移動されていることが判明したことから、翌年第49次調査として取り外し、下部を調査した。

調査開始は重機にて道路面のアスファルトを除去し、前回の埋め戻し土を除去すると太鼓御門礎石が３石が現れる。礎石上面にはコンクリートが塗られており、古写真より旧制の鳥取第一中学校の門柱礎石へ転用されていたことが分かった。また、礎石の周りには緑色凝灰岩製の板石を敷き、背後にはコンクリート製の溝が伴っていたが、調査後も残地していたため、今回これらの取り外しを行った。次に人力にて調査区の中央付近、門の後背部分の前回未調査部分より調査を開始すると、近現代道路とみられるコンクリート路面が現れた。礫や廃材を包含するコンクリートは　遺構面直上にあり、重機の使用はできないことから、前岩機を用い、小片に分割しながらこれらを除去した後に遺構調査を開始した。

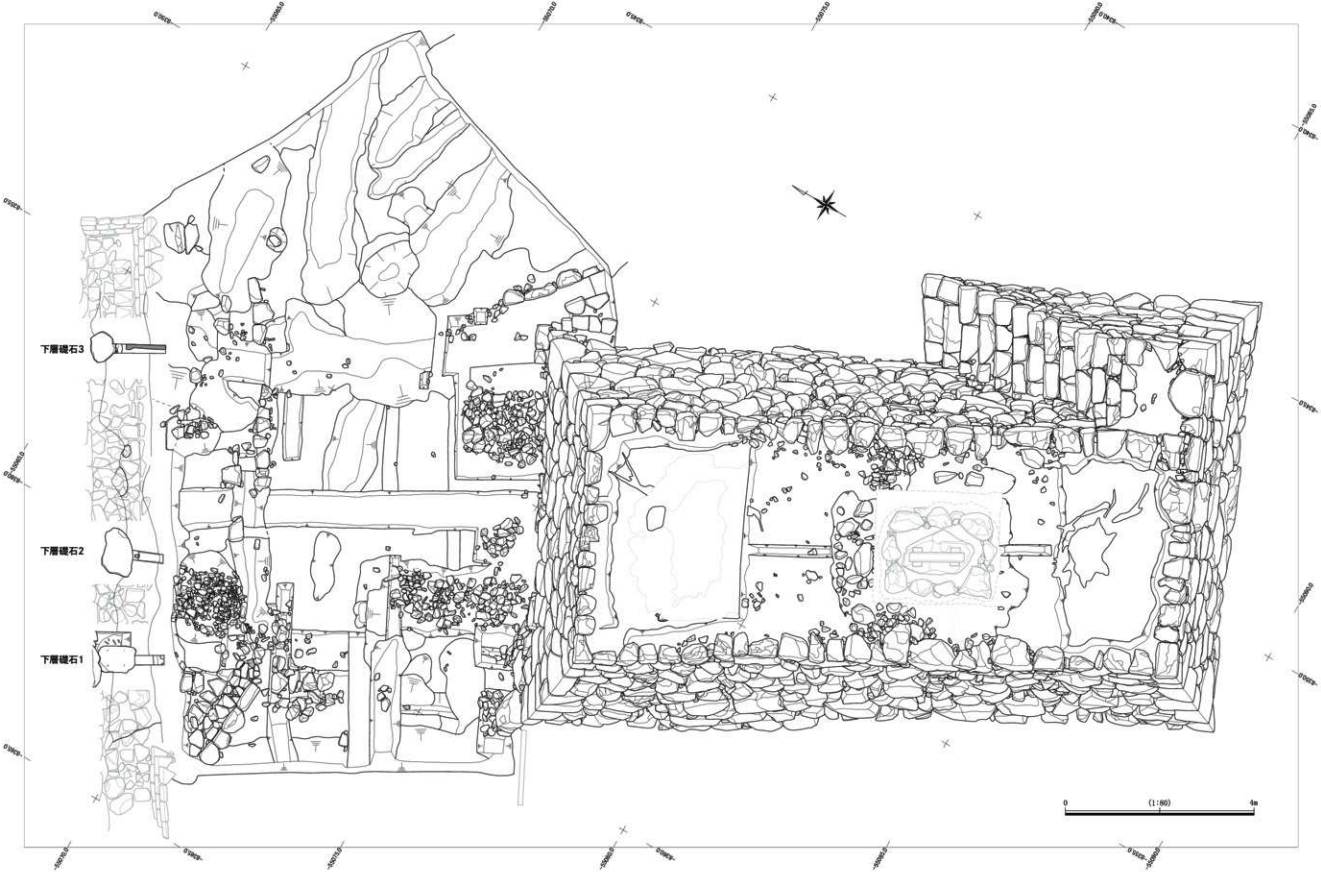
なお、調査区北西側、旧礎石側が一段低いのは近代以降、排水路が設置されていたことによる。第43・49次は一連の調査であることから、次項では個別に扱わず、一括して報告する。遺構の番号については前回調査を踏襲した。

写真17　戦前の校門

写真18　第18次調査状況



第24図　第43･49次調査区位置図



第25図　第43・49次調査平面図

第26図　第43･49次調査オルソ図

2. 遺　構

（1）登城路面

第26図のオルソ図や写真18～22に写る黄橙色を呈する部分が大凡幕末期に登城路面で、門の北東側、背面に顕著である。花崗岩質の地山に由来するこの良質な砂礫は、旧太鼓御門礎石の上に80～100cmも積まれた盛土である。火事により機能を失った旧門跡上に段階的ではなく、一度に積まれていることからも、新門建設に伴い大規模な構造変更があったと考えられる。

本来であれば、この地表部分には生活面としての登城路面が薄いながらも存在していたと考えられるが、近代以降の撹乱が著しく、遺存しておらず、嵩上げ土そのものが露出する状況である。しかしながら、門内水路の側壁石の上面と差はほぼないため、現状の面を登城路として取り扱う。上面の標高は門内で12.2m前後、調査区東辺付近で12.4～12.6mと緩やかに上昇する。

（2）上層礎石

上層礎石を取り囲む敷石と背面のコンクリート溝を取り外した状況が写真19である。黄橙色を呈する幕末登城路面には、３石を囲うように掘り方があり、上層礎石２・３については一連の掘り方のようにみられる。調査ではまず、この掘り方内を掘り下げ、設置状況を確認した。

①上層礎石１〔写真19・20、第25～28図、図版２〕

花崗岩製で平面規模74×92cm、上面は56×60cmの長方形状を呈し、表面には門柱を載せるためのコンクリートが塗られる。背面側の両角は枢門を開閉するための切り欠きがなされる。第19次調査時の断面（写真20）をみると、火事後の礎石と太鼓御門根固め石との間に間隔が空いており、根固め石の上には緑色凝灰岩を砕いたものを厚さ15～20cmも敷き詰め、その上に土を敷き礎石を載せる。城内でも他に例を見ない特殊な工法であったため、据え付け位置に疑問が残るものの、近世遺構の可能性も考えていたが、今回周囲の敷石を取り外し、下部を確認したところ、根固め石群よりずれた位置に据えられ、礎石自体も再加工され、側面や下面は大きく打ち欠かれ厚さ30～40cmの断面台形状となっていることが明らかとなったことから、原位置にはないと判断し取り外しを行った。

②上層礎石２〔写真21・22、第25～28図、図版２〕

花崗岩製で平面規模90×92cm、上面は50×60cmを測る長方形状で、上面にはコンクリートが塗られ、背面角部を切り欠く。他２石とは異なり土上にはなく、栗石に囲われていたことから、原位置にある可能性も考え、一旦

写真19　礎石周辺敷石取り外し状況

写真20　上層礎石１設置状況（第18次）

写真21　上層礎石２設置状況

写真22　上層礎石２取り外し状況

写真23　上層礎石３設置状況

写真24　上層礎石４

は残地したが側面をみると打ち欠きが大きく、周囲の石も根固め石とは違い隙間が大きく、機能している状況ではなかったことから、第49次調査にてこれらを取り外しながら下部の状況を確認したところ、礎石の下部付近より近代初頭前後とみられる磁器片やガラス片を検出した。太鼓御門が存在する状況で礎石を取り外すような行為はできないため、近代以降の据え直しと判断した。また、礎石を取り外したところ写真22のように下部には土が敷かれており、これらを除去し精査すると、本来の根固め石を検出した。

③上層礎石３〔写真23、第25～28図、図版２〕

花崗岩製で平面規模62×76㎝、上面は50×60㎝を測る長方形状で、上面にはコンクリートが塗られ、背面北角を切り欠く。周囲を掘り下げると、上層礎石１と同様に緑色凝灰岩を細かく砕き敷き詰めた層がみられ、上部には土が敷かれていた。また、礎石自体も大きく手が加えられ一部は、写真23のように厚さ20㎝ほどまで薄く仕上げられている。また、これらの土を除去すると下部には本来の根固め石がみられた。

④上層礎石４　〔写真24、第25～28図、図版２〕

調査区北側には、昭和以来の石垣修理の際に発見されたとされる、太鼓御門礎石と伝わる石材がある（写真24）。礎石脇の近代水路付近より出土したとされ、上層礎石１～３同様上面にはコンクリートが塗られていることから、校門柱礎石へ転用されていることは明らかであるが、他の石と異なり、側面の再調整は僅かであり、当初のものと考えられる70㎝もの厚みを持ったままであることが特徴である。これが上層礎石の一つならば、上層礎石１の向かって左方に位置したと考えられ、再加工されていないことから、唯一原位置を留める礎石であった可能性がある。

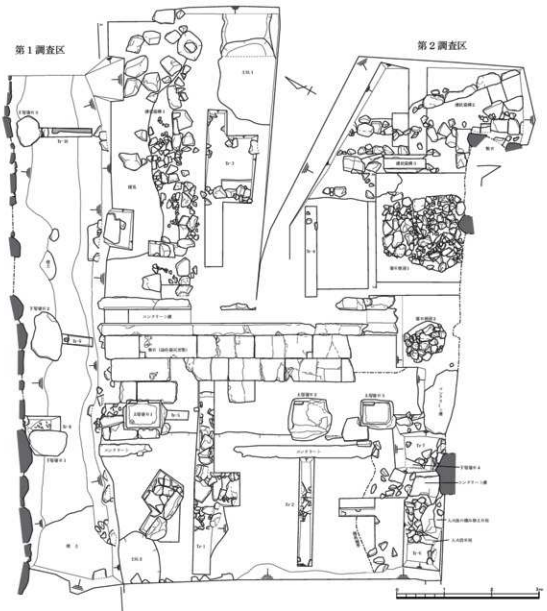
（３）礎石根固め石　〔第28図、図版２〕

根固め石は、嵩上げ土を掘り込み石を充填するもので、礎石を設置するための地業である。礎石こそ原位置を保っていないが、これらの根固め石より、礎石の位置が推定可能となった。根固め石１・２については第18次調査で検出していたが、今回取り外した礎石下や周辺にて新たに根固め石３～５を確認した。

根固め石１は門へ向かって右の脇柱の裏面控柱の位置にあり幅1.8×長さ1.5mの楕円形気味の集石で南東側は石垣と接する。上面の標高は12.0～12.2m付近にあり、集石のうち中央より北西側には人頭大の石がみられるのに対し、南東側にはやや小型の石が多くみられる。集積の中心から南東側へ向けやや窪みがあることからこの付近に礎石が据えられていたと推定される。

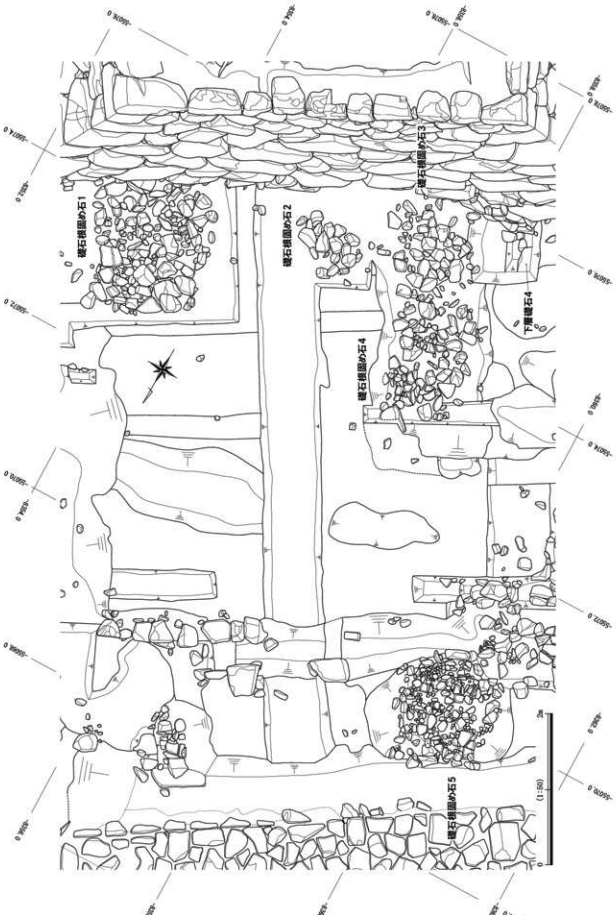
根固め石２は90×80㎝の範囲に見られる人頭大の集石で、石垣からは若干離れた位置にある。中通の控柱礎石の根固めにあたるが、前後の集石の中間にはない。門内を横断する近代コンクリート溝によって北東側を欠くとみられ、本来はより広範囲に敷かれ、中心は欠損部にあったと推定される。

根固め石３と４はほぼ一体的な集石であるが、石材間の粗密より大きく２群に分けた。根固め石３は幅1.6×長さ1.4mの範囲に人頭大の石を敷いたもので、南東側は石垣付近までみられる。北側には嵩上げ土の掘り込みがみられるも、これらは、近代の礎石再設置の際の掘り方と考えられる。脇柱および寄掛柱の礎石の根固め石とみられ、上面の標高は一定ではないものの12.0m付近にある。裏面控柱との中心間の距離は3.8mほどである。

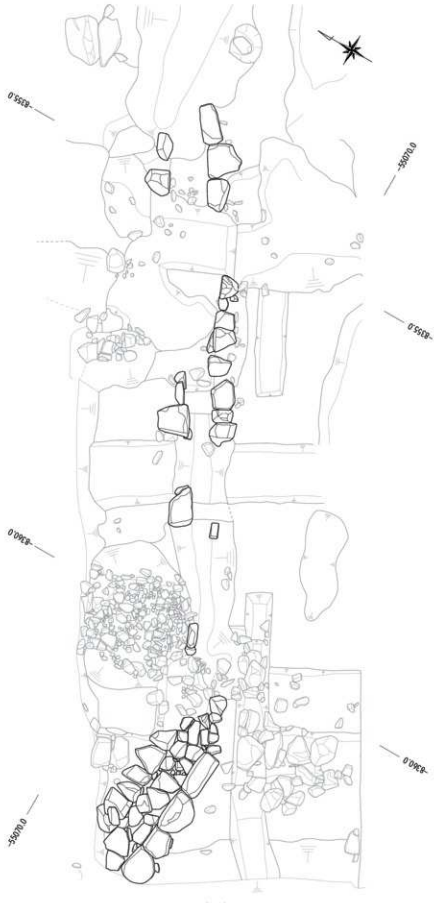


「平成20(2008)年度史跡鳥取城跡太鼓御門跡発掘調査報告書2009」の再録

第27図　第18次調査状況（再録）・第49次調査出土遺物実測図



第28図　太鼓御門礎石根固め石実測図



第29図　溝状遺構１実測図

礎石根固め石４は幅1.7×長さ1.2mの楕円形状を呈し、正面右側の鏡柱礎石の根固めである。上層礎石２の再設置の際に根固め石もまた再利用したようで一部の石は礎石の周辺に若干浮いた状態で検出されたため、礎石とともに取り外した。写真22のとおり礎石直下には土がみられ、これらを除去すると栗石が露出する。石群の外側には、掘り方がみられるが近代の礎石再設置に伴うものである。中央付近に窪みがみられ、上面の標高は凡そ11.9m前後にある。

礎石根固め石５は直径1.5mの円形状で、礎石根固め石４と対を成す正面左側の鏡柱礎石である。上層礎石１の下部には、他の２石より厚く緑色凝灰岩片が敷かれており、これとさらに下部の土を除去すると石群が露出する。第34図や写真20をみると上層礎石１再設置の掘り方下に根固め石設置の掘り方がみられる。南東側は水路の側石と接し、北西側は近現代溝の掘り込みにより若干削られるも遺存状態は良く、検出した石群は平面を上にして中央部へ緩やかに傾斜しながら並ぶ。上面の標高は辺縁部が11.9m、中央部が11.8mである。検出状況からも上部にあった近代の礎石再設置の影響は受けていないようにみえる。比較的大きめの石を敷く他の根固め石とは異なり、拳大から20～30cm程度の石を隙間なく配置し、中には被熱し赤変した石も点在する。

（４）水路・瓦溝

①溝状遺構１　〔第29図、図版３〕

溝状遺構１は正面左側の鏡柱礎石の内側、門扉の下を流れる排水路である。門裏より門内を縦断する形で直進し、門前へ出ると西側へ33°折れて傾斜する。北東側を大きく攪乱されるためその始まりは不明であるが、現状で門背面から8.2m、門前2.2mの計10.4mを検出した。門前は良好な形で遺存するも、門内から門裏へかけては攪乱が激しく往時の姿は失われており、門裏側では幅50cm、深さ30cm、門内では幅30cm、深さ40cm、門前では幅40cm、深さ20cm程を測る。鏡柱付近では、根固め石に接する形で側石を配す。底面をみると、門裏から門下にかけては素掘りのままであるが、門前へ出ると整然と敷石が貼られており、溝深は流路に沿って次第に浅くなる。底面勾配は門下が6.4％であるのに対し門前は17％と傾斜がきつくなることによる洗掘防止に加え装飾的な意味合いもあったのであろうか。

内部より灯明皿（第35図17～19・22・25・27）が多く出土したのが特徴的である。

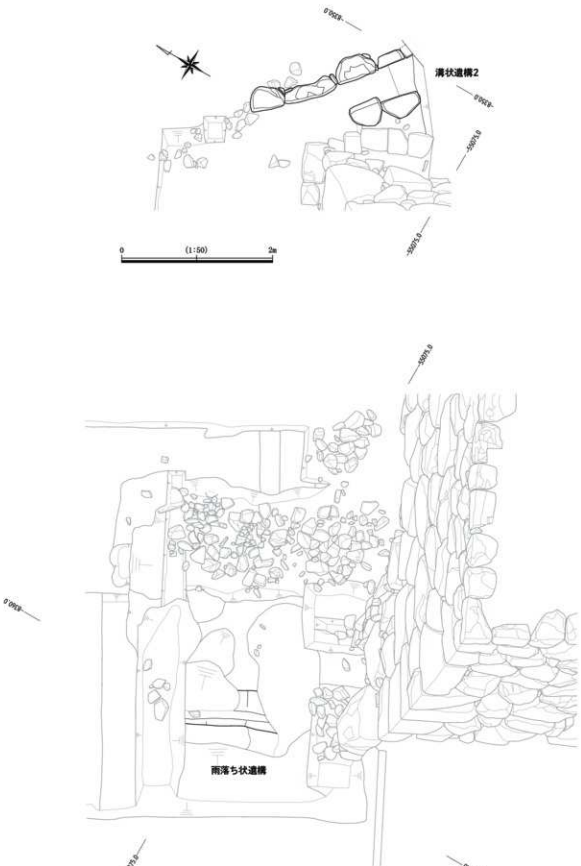
②溝状遺構２　〔写真25、第30図、図版３〕

調査区東端より続く近世期の排水路である。花崗岩を対面させる溝は幅40cm、深さ20cm程と浅く、北側で５石、現状2.2m程を確認した。嵩上げ土を掘って据えられた石列は途中で途切れ、交差するようにコの字の緑色凝灰岩を用いた溝状遺構３が敷かれる。若干浮いた位置にある溝状遺構３は近代溝であり、これらを支えるように花崗岩石が散在するため、これらが本来溝石であった可能性がある。溝状遺構３および周辺の支石を取り外し、嵩上げ土の様子をみると門背面を横断する窪地が現れる。20～30cmの窪みには、溝石列の設置痕は確認できなかったが、溝状遺構１と合流することからも、本溝は若干角度を変え南進していたと考えられ、その場合その位置より、雨落ち溝を兼ねていたことになる。この様子は、中ノ御門櫓門の背面雨落ち溝に類似する。

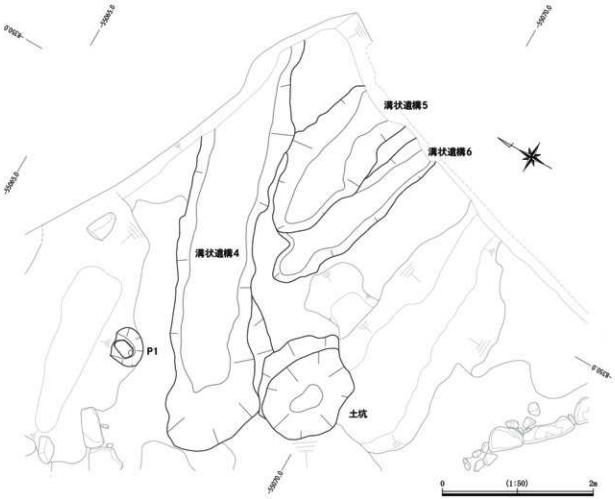
写真25　溝状遺構２・３（第18次調査）

③溝状遺構３　〔写真25〕

緑色凝灰岩をコの字状に加工したU字溝状の近代排水路とみられる溝で幅40cm、深さは10cmに満たず、長さ80cmで連結していたようである。周囲には支えとして拳大～人頭大の石が置かれており、本来はこれらが溝状遺構２を構成していた可能性がある。近代溝であるため周囲の石と合わせて取り外した。



第30図　溝状遺構２・雨落ち状遺構実測図



第31図　溝状遺構４～６・土坑・ピット１実測図

④溝状遺構４〔第31図、図版３〕

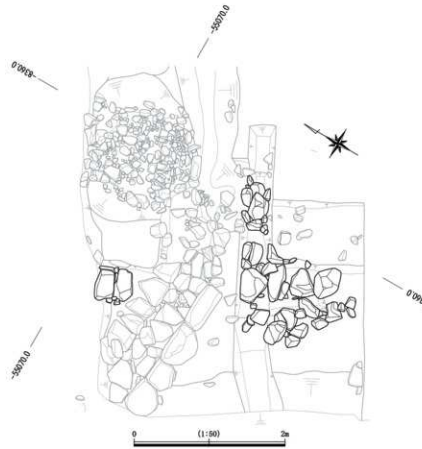
今回の調査で検出した溝である。近代層直下にあり、第18次調査ではその端部を検出し、土坑としていたが、今回その距離は北東壁先まで続くことが判明したため、溝状遺構とした。幅は１m、長さは現状で5.5m、深さは10～20㎝ほどしかない浅い窪地には瓦片が多く堆積する。一見すると廃棄場所の様相を呈すが、全体に浅く、暗渠とすれば出口もないことからその性格は不明である。内部の瓦片を見ると、いずれも古く桟瓦や近世中後期の陶磁器類もみられないことから、近代初頭の城解体時の廃棄ではなく、火事後の地盤の嵩上げとともにできた可能性が高くなる。

⑤溝状遺構５〔第31図、図版３〕

今回の調査で検出した溝で溝状遺構６を若干切る形で並列する。近代層直下の標高12.6m付近にあり調査区東壁より続き幅１m、長さは現状で2.1m、深さは20㎝程度である。内部には瓦片が多く入り、廃棄場所や雨落ち溝状の様相を呈するが性格は不明である。内部の瓦片を見るとやはりいずれも古く桟瓦を含まないことから、地盤の嵩上げとともに作られたとみられる。

⑥溝状遺構６〔第31図、図版３〕

今回の調査で検出した溝である。検出時は溝状遺構５と一体的にみえていたが、掘り下げると中央で分かれたことから、別溝として扱った。近代層直下の標高12.6m付近にあり、調査区東壁より続き幅50㎝、長さは現状で2.6m、深さは15～20㎝程度である。内部には瓦片が多く入り、廃棄場所や雨落ち溝状の様相を呈するが性格は不明である。内部の瓦片を見ると溝状遺構４・５と同じく古く桟瓦を含まないことから、地盤の嵩上げとともにできた可能性が高く、一連でほぼ同時に作られたものと考えられる。



第32図　石列実測図

⑦雨落ち状遺構　〔第30図〕

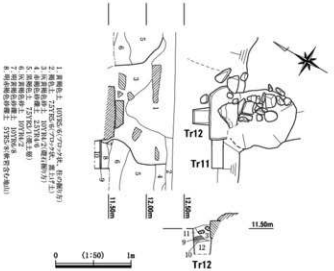
調査区の南側、礎石根固め石前で検出し長さ120cm、幅50cm、深さ20cm程の窪みである。櫓台石垣角付近から門に並行して伸び、中央付近は近代以降の撹乱で残存していないが、その位置より雨落ち部分であったと考えられる。門の背面側には水路兼用の石組み溝が想定されるが、前面側には設けられてはおらず、軒下へ垂れた雨水が直接登城路面を穿っていたようである。

⑧土坑　〔第31図、図版３〕

門背面中央付近の近代層直下の標高12.6m付近より掘り込まれ、平面形は1.3×1.0m程の楕円形状で深さは50cmを測る。内部には瓦片が堆積していることから廃棄土坑の様相を呈する。しかし、内部の瓦をみると桟瓦を含まない古いものであり、廃城解体時の廃棄ではないことから性格は不明である。

溝状遺構４～６と土坑について

今回検出したこれらの遺構は、いずれも性格不明ながら、形態が非常に類似しており、いずれも古手の瓦が堆積する遺構である。周辺からは城解体時とみられる瓦片や陶磁器片が多く出土するがこれらには含まれないことから、近代層直下の幕末期路盤と同標高にあれど最終的な瓦廃棄層ではない可能性が高い。遺構のある地盤自体、石黒火事後の整地(嵩上げ)層そのものであり、層上方には他調査地点にみられるような各世代の重層的な地盤面はみられない。近代以降の掘削にてすべて削平されているとも想定できるが、溝石の上面と比較しても、現路盤面上に厚く存在していたとは考えにくく、僅かながらも堆積していたとは推定されるが基本的には嵩上げ後は幕末までほぼ同じ高さの面であったとみられる。このことから浅い位置にあっても石黒火事よりそれほど時間を置かない頃にできた遺構と推定した。また、現状その形状により溝や土坑と呼び分けたが、隣接するこれらの遺構は実際すべてが一体の遺構である可能性もある。その場合、登城路の中央にあるということからも、機能としては暗渠が想定される。



第33図　ピット２実測図

門の背面には上層へ上がる階段があり、地形的にも斜面裾部にあたることから降雨時の泥濘防止の措置であった可能性もある。この瓦溝の南東側には遺存こそしていないが、門背面を横断していた雨落ち溝があったとみられることから、併せて山伝いに下る水を門へ向かわせないように設置された瓦片とも考えられる。

⑨石列　〔第32図、図版３〕

礎石根固め石５の中心付近から南東側へ1.7m、門前面部分の登城路面下10cm程度には門に並行するように石列がみられる。長辺が40cm程の石は平面的には階段状にみえるが、上面は平らではなく凹凸がある。石列は門前を横断してはおらず、門へ向かって左半側のみにみられ、直上には溝状遺構１の石組水路が走ることからこれらの支えのために入れられたとも考えられる。溝は門前で傾斜を付け流れ落ちるのに対し、盛土である嵩上げ土は門側へ向かい厚みを増すため、北東側からかかる土圧と水流のことを考えての地盤強化の意味を持つと考えられる。

⑩ピット１　〔第31図、図版３〕

門の背面、溝状遺構１の延長上の脇に位置する柱穴で、現代撹乱により北東半を欠くも直径50cmを測る。標高12.46mの地盤より掘り込まれ、底部には礎板として標高12.16mを上面とし28×18cmの石が据えられる。その位置より、門裏の北東側に置かれた番所遺構の一部と考えられる。

⑪ピット２　〔第33図、図版３〕

礎石根固め石５の背面3.6m、礎石根固め石１に並列する位置にある大型の掘立柱穴である。撹乱により南側を除き掘り方の大半を失っているが、残された断面からみると本来は直径1.5mを超える大型の柱穴が想定される。溝状遺構１の北東側、嵩上げ後の地盤である標高12.3m程から掘り込まれ、底部には上面標高11.6mとした礎板となる長さ75cm、厚さ20cmを超える扁平な大型の石材を据え、上面中央には厚さ10cmほどの扁平な石材を載せる。検出時は割れて数片に分かれていたが、本来は50cmを超える石材で、この石上に柱を据えていたとみられ、周囲には支えとみられる拳大の礫が囲う。

断面をみると、石上には掘り方とは別に掘り込み状の窪みがみられ、前回の調査ではこれを後の撹乱と判断したが、柱の抜き取り痕跡である可能性があり、礎板自体も太鼓御門控柱のものとしていたが、他の柱穴と合わせ門裏北側にあった番所跡の端部と改めた。しかし、60cmの深さを持つこの掘立柱穴は、ピット１や、第22次調査で検出した同番所の掘立柱穴と比較しても規模が大きすぎるという疑問も残る。

⑫第11・12トレンチ(Tr11・12)　〔第33図〕

礎板脇に設定したトレンチで、第11トレンチは幅15cm、長さ35cm、トレンチ12は20cm四方である。１

1 黒褐色砂質土 10YR3/2(現代掘乱)
2 黒褐色砂質土 10YR3/2(現代掘乱)
3 黒褐色砂 2.5Y3/1
4 黒褐色砂 2.5Y3/1
5 明るグレー褐色砂 層 2.5Y3/3(礎石)
6 黒褐色砂質土 2.5Y3/2(礎石裏側砂ブロック多く含む)
7 黒褐色砂質土 2.5Y3/2(礎石裏側砂ブロック多く含む)
8 暗褐色砂質土 10YR4/4 (～5mm の玉石多く含む)
9 褐色砂質土 10YR4/6
10 褐色砂質土 10YR 4/6
11 乱掘
12 明るグレー褐色砂質 土 2.5Y3/3(礎石裏側砂ブロック・
13 明るグレー褐色砂質 土 2.5Y3/3(礎石裏側砂褐色砂質土ブロックを多く含む)
14 明褐色砂質土(2.5Y3/3 (礎石裏側砂褐色砂質土ブロック含む)
15 褐色砂質土 10YR3/3(ブロック状に暗褐色土ブロック含む)
16 褐色砂質土 10YR4/6(礎石下)
17 褐色砂質土 10YR4/4(褐色粘土ブロック含む)
18 にぶい褐色砂質土 10YR4/3(上部は焼土層)
19 にぶい褐色砂 10YR5/4(2.5Y3/1 ブロック含む)
20 黒褐色砂質土 10YR3/6(現代の撹乱か)
21 黒褐色砂質土 10YR3/2(10cm 前後の礫を含む)
22 暗褐色砂質土 10YR3/4(10Cm 前後の礫を含む)
23 暗褐色砂質土 10YR3/3(10cm 前後の礫を含む)
24 黒褐色砂質土 10YR3/2(～5mm の礫を多く含む)
25 褐色砂質土 10YR4/6
26 褐色砂質土 10YR4/6
27 褐色砂質土 10YR4/4
28 にぶい褐色砂質 10YR5/3
29 にぶい褐色砂 10YR4/3
30 褐色砂 10YR4/4
31 黒褐色砂質土 10YR3/2(10cm 前後の礫を含む)
32 にぶい褐色砂質土 10YR5/4
33 黒褐色砂質土 10YR3/2(10cm 前後の礫を含む)
34 黒褐色砂質土 10YR3/4(10cm 前後のブロック多く含む)
35 暗褐色砂質土 7.5YR3/3(10cm 前後の礫を含む)
36 暗褐色砂質土 7.5YR3/3(10cm 前後の礫を含む)
37 褐色粘質土 10YR4/4(粘土が30%と、礫多く上部は焼土層)
38 暗褐色シルト 7.5YR5/8(地山)

第34図　下層礎石実測図(Tr13以外は再録)

層は礎板設置のための掘り方で、上部へ向け大きく開き、現状で最大1.7mほどを測る。第11トレンチ側では石の際付近まで、第12トレンチ側では15～20cm外側までを掘削する。２層は地山由来とみられる良質な土がブロック状に混ざる太鼓御門の大規模な嵩上げ層である。３層も同様の嵩上げの一部となるブロック土である。４・７層は色調こそ違うが、一連の層とみられる嵩上げ土の一部である。２・３層より良質で混ざりの少ない地山由来とみられる砂礫であり、10cm程の厚みを持ち５層の焼土層を覆い隠すように敷かれる。標高11.4mを上面とする５層は焼土層である。同標高で広範囲にみられていることから旧太鼓御門を焼失させた享保５年(1720)の石黒火事の痕跡とみられる。６層は地山である７層上に敷かれた砂土で、火事前の太鼓御門の路盤となる層である。

（５）下層遺構

第18次調査では、太鼓御門路盤面より60～100cmより下層にて火事層と、旧太鼓御門の礎石(下層礎石１～４)を確認した。被熱した礎石から火事被害の大きさが伝わる。今回の調査では旧遺構は対象外であったため、下層礎石１と４のみを再検出し、１の脇にトレンチ13を設定し、礎石の据え付け状況を確認した。

①下層礎石１〔第34図、図版３〕

礎石根固め石５の西側で確認した80×57cmの礎石である。焼失した旧太鼓御門の礎石とみられ、上面標高は11.35m、被熱の影響で全体的に赤変し、平坦に仕上げられた表面には35cm四方くらいの柱跡らしき痕跡が僅かに看取できた。背面側を掘り下げると、地山とみられる岩盤に直接据えられていることが判明した。岩盤には表面を加工した際の鑿痕が多数残る。

②第13トレンチ(Tr13)〔第34図〕

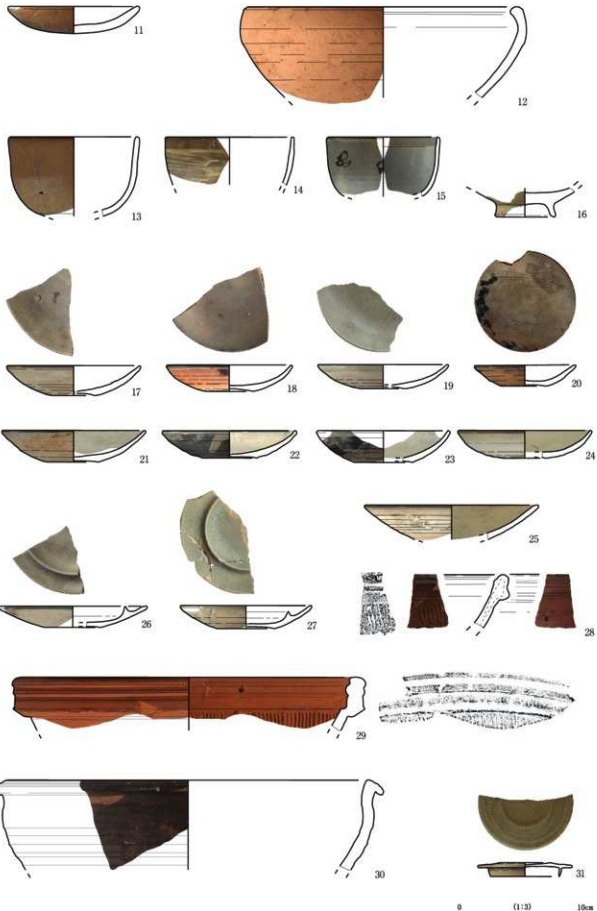
下層礎石１沿いの南東側に設定した60×20cmのトレンチである。礎石の側面には被熱の痕跡がみられ上面から３～４cmは黒変、その下７～８cmは赤変する。黒変の範囲が表出部分とみられる。礎石は地山を掘り下げて据えられており、石下には小型の石が置かれる。下層礎石１より50cmほど離れた地点より新たに下層礎石５を検出した。全形は不明ながら断面台形状を呈するこの礎石の上面標高は11.22mと隣接する下層礎石１より20cmも低いことから本来は上面にもう１石載っていたと推定される。

土層をみると１層は現代撹乱、２層は石黒火事後に新太鼓御門建設に伴う地盤嵩上げ層で地山由来の良質な砂礫土を主体とし、80cmほど敷かれる。３層は厚さ２～３cmの土で下層礎石１の脇から５の上面へ向けて下降する。４層は焼土層で３層同様傾斜する。５・６層はそれぞれ礎石設置の為の掘り方で、７層の地山を掘り込み据えられている様子がわかる。火事の痕跡である４層の傾斜は、本来下層礎石５の上面にかけて堆積していたものが火事場整理等で削平されたもので、その上に敷かれた３層は地盤嵩上げまでの一時的な登城路面と推定される。

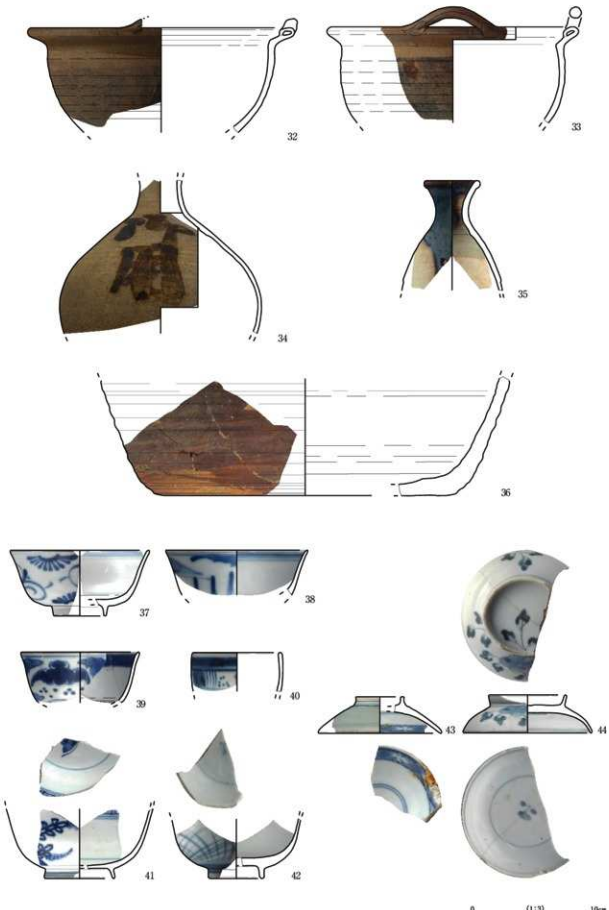
３．遺　物　〔第27・35～39図、図版８・９〕

13・14・20・21・23・24・29・30・36・43・44・46・47・50・52・54・55・60～64は掘り下げ中や近現代の撹乱層など遺構外、28は上層礎石１下の緑色凝灰岩礫層、12・15・17・18・19・22・32・33・34・37・38・39・42・45・66は溝状遺構１内の埋土、25・27・31・35・48・49・56は溝状遺構１でも上層礎石１脇での側石抜き取り部分の埋土、40・41は溝状遺構１の側石抜き取り部分でも門前付近の埋土、16は溝状遺構２、58・59・67～69は溝状遺構４、53は溝状遺構５、11・26は雨落ち状遺構付近、51・57・65は土坑より出土した遺物である。

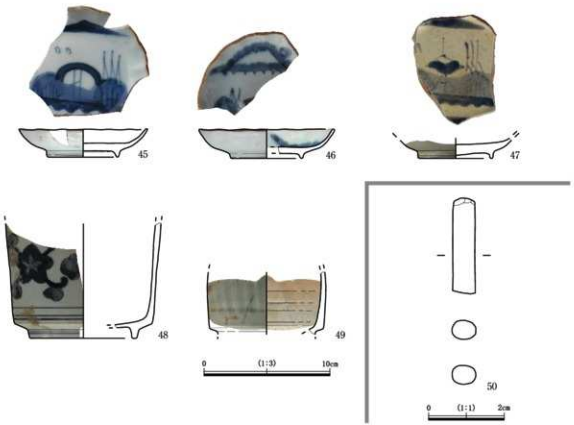
11は土師皿、12～36は陶器で、12は素焼きの焙烙、13～16は碗で13は在地か、14は肥前の刷毛目碗、16は瀬戸・美濃。17～24は灯明皿の上皿、20・24は在地とみられるがそれ以外は信楽と考えられる。17・18には目跡が、19・20はカキメが残り20は素焼きである。17～23は碁笥状の底部であるが24は丸底となる。25は煤が付着することから灯明皿と考えられるが、復元口径が13.8cmと大型である。26・27は信楽の灯明皿下皿、28・29は関西系の擂鉢で後者の復元口径は28cmである。30は越前の捏鉢で31は蓋。



第35図　第43次調査出土遺物実測図１



第36図　第43次調査出土遺物実測図２

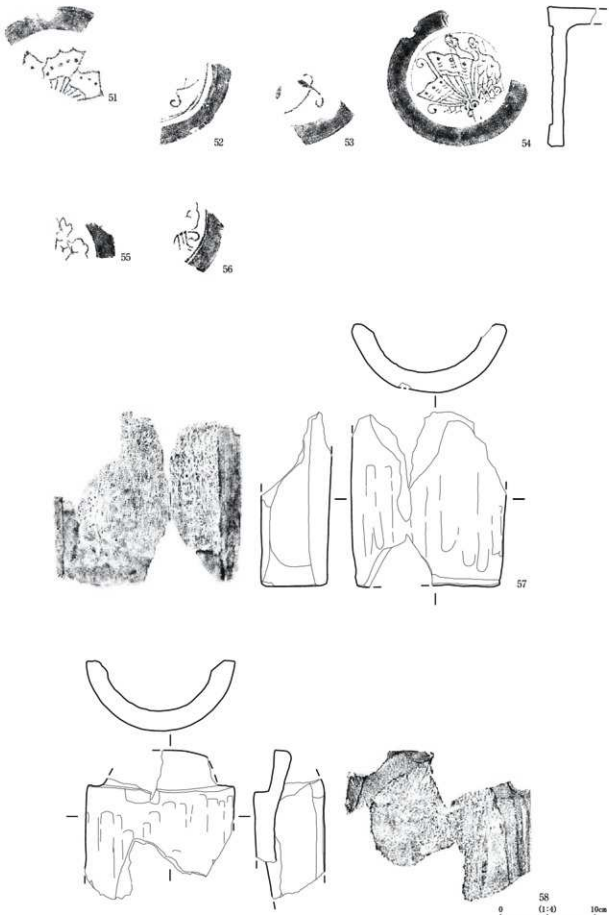


第37図　第43次調査出土遺物実測図３

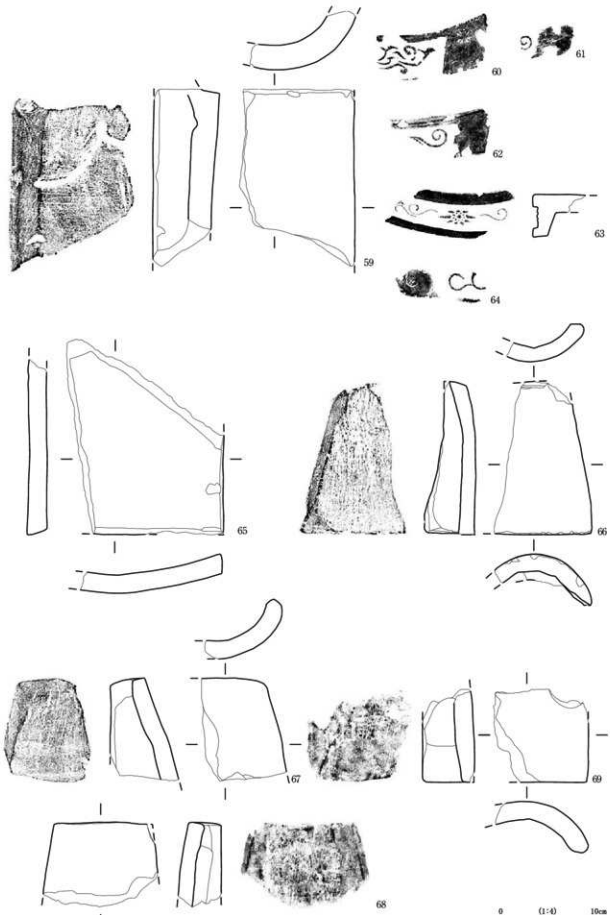
32・33は在地の土鍋、34は在地の徳利で外面には「御用」と描かれる。35は瓶、36は越前の鉢底部で鉄泥がみられる。37～49は磁器。37～42は碗、37は瀬戸、38～41は肥前、42は在地産、43・44は肥前の蓋で前者は外青磁、後者は草花文である。45～47は肥前の皿で見込に山水を描く。48は蓋付の鉢で、49は青磁の火入れ。50は城内から多数出土する用途不明の石製品で、直径６㎜ほどの断面円形で先端を尖らせる。

51～69は瓦。51～56は軒丸瓦の瓦当面で51は蝶２型、52は蝶５型もしくは６型、53は蝶６型、54は蝶14型で瓦当面は比較的薄いつくり、55・56は蝶18型。57～59は丸瓦で59の内面には吊り紐痕がみられる。60～64は軒平あるいは軒桟瓦とみられる瓦当面で、60は平23型の左軒桟瓦、61は平41型の右軒桟瓦、62はこれまで未確認の型で、63は平68型の左軒桟瓦、64は幕末期にみられる刻印をもつ新型。65は平瓦とみられ小口部には傾斜がみられる。66～69は棟込瓦で66の全長は16.2cm、幅10.3cmを測る。

また、紙面の都合上第27図に第49次調査の際に出土した瓦片を掲載した。197は取り外した礎石脇の近代再設置に伴う栗石中にある蝶20型の鳥衾瓦片である。



第38図　第43次調査出土遺物実測図４



第39図　第43次調査出土遺物実測図５

第５節　第44次調査

１．概　要

調査期間　第44次調査：平成30年(2018)６月25日～７月13日　面積：16.4㎡

鳥取城跡第44次調査区は鳥取城大手登城路復元整備計画に伴って実施されている登城路や周辺施設の情報を得るための試掘調査として中ノ御門周辺に最終的に４ヶ所のトレンチ(30Tr1～4)を設定した。また、隣接する平成24(2012)年度に調査され埋め戻されていた第30次調査の第５トレンチ(24Tr５)も合わせて再掘削した。

中ノ御門表門右側壁のお堀側石垣(F面)裾に設定したTr1周辺には、平成26(2014)年度の第34次調査で「旧水路とみられる石材が斜め方向へかろうじて遺存」した溝６が想定されている。同じく表門左側壁のお堀側石垣(Q面)裾には30Tr1の結果を踏まえて30Tr2を設定した。また、右側壁石垣上では平成24(2012)年度に第30次調査が実施されていたが、今回さらに情報を得るためのトレンチ30Tr3と30Tr4を設定した。(石垣面名は、『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅲ』(2016)第87図参照)

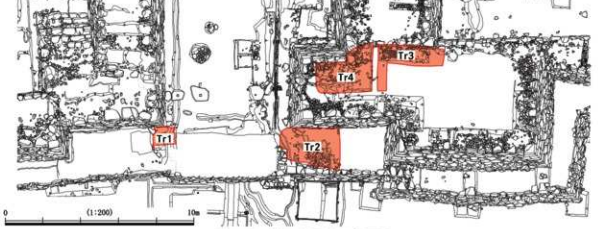
第１トレンチ(30Tr1)

２．遺　構　〔第41図、図版４〕

石垣FP面角石の堀側(F面裾)に北東～南西方向2.2m、北西～南東方向4.0mで設定したトレンチである。このF面前の犬走り部分には現代になり「史跡鳥取城跡附太閤ヶ平」の石碑が設置され大きく撹乱を受けていたが、上述のとおりこの石碑除去面には石材が遺存する状況が認められた。このため、溝の底面の確認と堀までの溝の確認を目的として遺存石材に直交方向のベルトを設定して上位の撹乱土を除去した。その結果、堀内に遺存する木製桝から注ぎ口部と想定されていた堀石垣の天端石上面よりも低い位置まで現代ゴミが入る(第６、10層)など撹乱が及んでおり、溝を構成すると想定されていた石材のいずれも本来の位置を保つものではないことが判明した。このことから、想定されていた溝６は調査地内ではすでに喪失したものとみられる。

なお、トレンチの北東端部近くから直径約20cmの丸柱とみられる刺さった状態の木材を検出した。材質はマツで、直径はやや小ぶりながら、位置的に、登城路入口の堀に架かる擬宝珠橋の城側付け根から「ハ」の字状に開いた袖部先端に設置された擬宝珠橋親柱と考えられる。

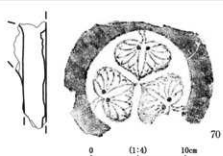
またその他の遺物としては、撹乱土中ではあるが瓦のほかに肥前系の陶器皿等が出土している。

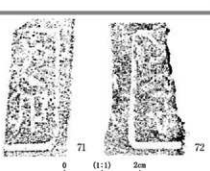


第40図　第44次調査区位置図

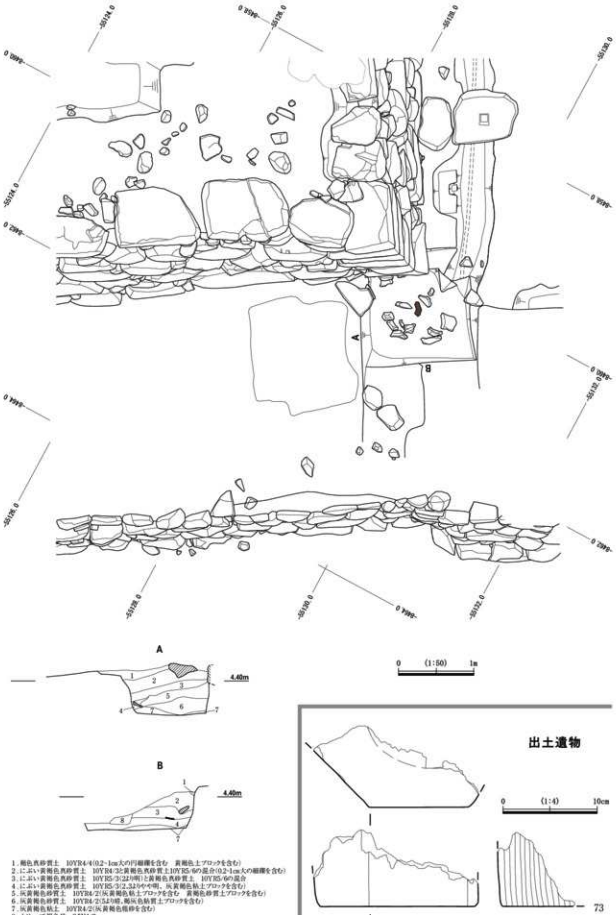
1. にぶい黄褐色砂　10YR5/4(0.5 ～ 4cm大の砂石を密に含む)
2. 褐色砂　10YR4/6
3. 褐色砂　10YR4/6 ～ 4/4(2ｽｼやや暗)
4. 褐色砂　10YR4/4(3ｽｼやや暗、褐灰色粘性砂質土ブロックを含む)
5. にぶい黄褐色砂　10YR4/3
6. 褐灰色粘性砂質土　10YR4/1(現代ゴミを多く含む)
7. 褐色砂　10YR4/4(2ｽｼやや暗)
8. 褐灰色粘土　10YR4/1
9. 灰黄褐色粘性砂質土　10YR4/2
10. 褐色砂　10YR4/4(ナイロンゴミ等を含む)
11. 褐灰色粘土　10YR4/1(やや砂混り)
12. にぶい黄褐色砂　10YR4/3(3ｽｼやや明)

出土遺物





第41図　第44次調査第１トレンチ実測図



第42図　第44次調査第２トレンチ実測図

第２トレンチ(30Tr2)

３．遺　構〔第42図、図版４〕

30Tr1で擬宝珠柱とみられる柱材が検出されたことから、それに対応する石垣QE面角石の堀側(Q面)裾に柱痕の有無確認のため設定した北東～南西方向1.2m、北西～南東方向1.5mのトレンチである。地表面から約0.5mにわたって南西側の堀の方に下る若干の傾斜をもって0.1～0.2m程度の整地層とみられる真砂土や砂質土が続き(１～６層)、その下は灰黄褐色粘土層(第７層)となる。

この７層上面に座る形で、平面多角形状、底面は平らに加工され、遺存高約８cm、最大遺存長18cm程度の木材片が検出された。周辺にはこの木材を囲むかのように20cm大の石材が遺存するが、木材片との関係を明確にはできなかった。また平面的に柱穴は検出できなかったものの、位置的に30Tr1と同様に橋の袖部先端に設置された擬宝珠橋親柱の基部の可能性が考えられる。材質は第１トレンチ同様マツであった。

なお遺物としては整地層中から陶器片が僅かに出土している。

第３トレンチ(30Tr3)

４．遺　構〔第43図〕

30Tr1の北東隣に立地する中ノ御門表門と櫓門が架かる桝形右側壁石垣上の表門側と櫓門側の接点部分に設定した北東～南西方向2.35m、幅約0.5mのトレンチである。櫓門側の南西側石垣(第30次調査時のJ面石垣)に沿って上述のとおり平成24年度(2012)に実施された24Tr5についても改めて浚渫し、30Tr3と平面L字形に接する。24Tr5の調査時には表土下は石垣下部まで整地層が続き、地表面下0.3～0.4m付近で古段階の整地に伴う栗石状石材の集中が認められており、今回の調査ではこの栗石の広がりと第30次J面の南西側に階段状遺構等の施設の有無を確認することを目的とした。

調査の結果、栗石状石材の集中はJ面から南西方向約1.15m付近まで広がることが確認された。またそのほかの遺構の有無については、栗石上位の整地層について検討し、30次J面側が階段状にも見受けられる水平堆積(第１、２、10層)と確認した。しかしながら石材等の遺存もなく本トレンチの掘り下げ結果だけでは階段等のほかの遺構があったかどうかは明確にできなかった。

なお遺物としては瓦片のほか陶器細片がごく僅かに出土した。

第４トレンチ(30Tr4)

５．遺　構〔第43図〕

30Tr３の北西側にベルトを挟んで設定したL字形のトレンチである。北西～南東方向約1.3m、北東～南西方向約2.5mの南西端から幅約0.3mで北西方向に約1.7mで、整備のためにすでに解体の始まっている石側壁P面石垣裏となる。ここでは平成24年度(2012)第30次調査で階段状遺構とされた石材の南東側延長線上の情報を得ることを主目的とした。調査の結果、第30次調査石材の延長線上には長軸長0.7m及び1.0m程度の石材が南西側に面をそろえて一段検出された。松の株による大きな撹乱があり、かつまた石垣の解体も進んでおり、第30次調査の階段との関係を直接確認することはできなかったが、石垣F面天端から約2.2m と位置的にはほぼ同一線上に続き、一連の階段状遺構の続きとみられる。天端標高は7.7～7.8m 程度で、第30次調査結果と合わせると石材は５石が認められ長さ約4.5mの残存となるが、今回検出の２石は整地層に直接置かれている。第30次調査ではもともとは２段積であった可能性を指摘しているが、これらの石材の北東側には隣接して長軸長0.4～0.5m程度の石材５石が天端標高を7.6～7.7m程度にそろえてほぼ平行に並ぶ傾向が見受けられる。第30次調査で検出されている階段状石材３石の北東側については確認できなかったが、表門の左側壁のほぼ対照的な位置に階段状遺構２段が遺存していることを考慮すると、30Tr4のこれらのやや小ぶりな石材上にも同様の階段が存在した可能性が考えられる。

また、第30次J面との間にもさらに小ぶりな0.25～0.45m程度の石材がこれらの石材及び第30次J面石

垣とほぼ平行に長さ1.35m程度にわたって並ぶようにも見受けられる。30Tr3では明確にできなかった櫓門側壁への階段等の遺構が存在した可能性を示すものとも考えられるが、標高も7.4～7.8mとバラつきがありＮ面・Ｏ面に伴う栗石の可能性もあることから、やはり階段の存在を明確にすることはできなかった。

なおトレンチ南東部の下位には古段階の整地に伴うとみられる栗石状石材の集中が認められ、上述のTr3や24Tr5の栗石の広がりに接続するものとみられる。

遺物については、陶器片のほか土師器皿細片が出土している。

６．まとめ

今回の調査は復元を進めている国史跡鳥取城跡附太閤ヶ平の大手登城路入口にあたる擬宝珠橋及び中ノ御門周辺について、排水に関して第34次調査の溝６の追加情報と表門右側壁部分の追加情報を得ることを目的として実施した。

その結果、30Tr1の調査では溝６についてはすでに喪失しており、第34次調査時の石材については後世にその位置に置かれた可能性が考えられた。しかしながら擬宝珠橋の扇状に開く北東端部で、すでに失われたものと考えられていた柱(断面円形状)が遺存していることが確認された。そのため急遽同橋の北西端部に設定した30Tr2からも同様に柱の基部の破片と考えられる断面多角形状の木片が検出された。柱の断面形状の違いについてはこれまでの橋の付け替え等さらに検討が必要となったが、それぞれの柱の位置をあらためて確認できたものと考えられる。

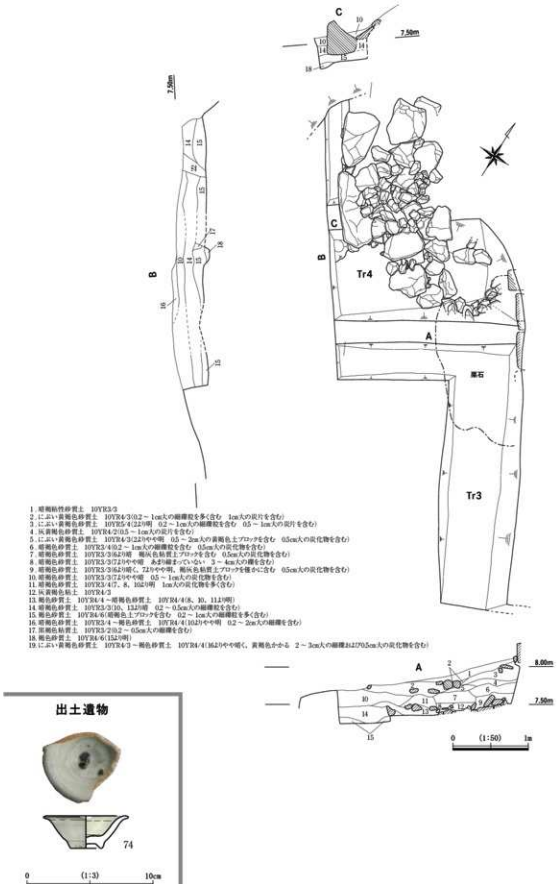
次に表門右側壁部分については、第30次調査で確認された階段状遺構が南東側に延び約4.5mにわたって残存することが確認されるとともに、当時の指摘のとおり表門左側壁部分と同様に２段積み以上であったものと考えられる。また24Tr5で検出された古段階の整地に伴うとみられる栗石状の集石が北側の30Tr4南東隅まで広がることも確認された。

７．遺　物　〔第41～43図、図版９〕

70～72は第１トレンチ溝側壁裏付近より出土した。70は葵１型の軒丸瓦で「作」の刻印、71・72は平瓦もしくは桟瓦に刻印された「文卯」と「文子」で文化或いは文政年間の製品である。

73は第２トレンチより出土、擬宝珠橋の親柱本体の破片とみられる。本来は八角形と推定され一辺10.5cmの２辺が残る。材質はマツ。

74は第４トレンチ埋土より出土した小坏。



1. 暗褐粘性砂質土　10YR3/3
2. にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3(0.2～1cm大の細礫粒を多く含む　1cm大の炭片を含む)
3. にぶい黄褐色砂質土　10YR5/4(22ﾍﾟ明　0.2～1cm大の細礫粒を含む　0.5～1cm大の炭片を含む)
4. 灰黄褐色砂質土　10YR4/2(0.5～1cm大の炭片を含む)
5. にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3(22ﾍﾟ中明　0.5～2cm大の黄褐色土ブロックを含む　0.5cm大の炭化物を含む)
6. 暗褐色砂質土　10YR3/4(0.2～1cm大の細礫粒を含む　0.5cm大の炭化物を含む)
7. 暗褐色砂質土　10YR3/3(6ﾍﾟ明　褐灰色粘質土ブロックを含む　0.5cm大の炭化物を含む)
8. 暗褐色砂質土　10YR3/3(7ﾍﾟ中明　あまり縮まっていない　3～4cm大の礫を含む)
9. 暗褐色砂質土　10YR3/3(6ﾍﾟ明く、72ﾍﾟ中明、褐灰色粘質土ブロックを僅かに含む　0.5cm大の炭化物を含む)
10. 暗褐色砂質土　10YR3/3(72ﾍﾟ中明　0.5～1cm大の炭化物を含む)
11. 暗褐色砂質土　10YR3/4(7、8、10ﾍﾟ明　1cm大の炭化物を多く含む)
12. 灰黄褐色粘土　10YR4/3
13. 褐色砂質土　10YR4/4～暗褐色砂質土　10YR4/4(8、10、11ﾍﾟ明)
14. 暗褐色砂質土　10YR3/3(10、13ﾍﾟ明　0.2～0.5cm大の細礫粒を含む)
15. 褐色砂質土　10YR4/6(暗褐色土ブロックを含む　0.2～1cm大の細礫粒を多く含む)
16. 暗褐色砂質土　10YR3/4～褐色砂質土　10YR4/4(10ﾍﾟ中明　0.2～2cm大の細礫を含む)
17. 黒褐色粘質土　10YR3/2(0.2～0.5cm大の細礫を含む)
18. 褐色砂質土　10YR4/6(15ﾍﾟ明)
19. にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3～褐色砂質土　10YR4/4(16ﾍﾟ中明く、黄褐色かかる　2～3cm大の細礫および0.5cm大の炭化物を含む)

第43図　第44次調査第３・４トレンチ実測図

第６節　第45･47･52次調査

１．概　要

調査期間　第45次調査：平成30年(2018)10月15～30日　面積：21.3㎡
第47次調査：令和元年(2019)７月３日～８月６日　面積：21.3㎡
第52次調査：令和２年(2020)４月17日～６月３日　面積：21.3㎡

鳥取城第45・47・52次調査は、中ノ御門表門南東(正面右)側鏡柱礎石周辺で実施した。同一地点での連続する調査であるためここにまとめて報告する。本調査区にある礎石は、南東側へ向かい大きく傾いており、本来平坦である上面には10cmほどの高低差があった。大手復元整備工事に先立つ発掘調査が開始される以前、礎石脇には写真26の通り近代に組まれた石組水路が走っていた。学校のある三ノ丸から堀へ通ずるこの主要排水路には降雨時には多量の雨水が流れ込み、石組側壁の隙間を通り、裏にある近世層を抉り取る状況であったことが、礎石傾斜の原因と考えられた。復元整備工事では、門復元に際し、礎石を再利用することとしたが、動いていない他３石に対し、本石は正位置に据え直す必要があったため、一旦これを取り上げ、下部の状況を調査した上で戻す計画とした。これが第45次調査原因である。

写真26　礎石と近代水路(第26次調査)

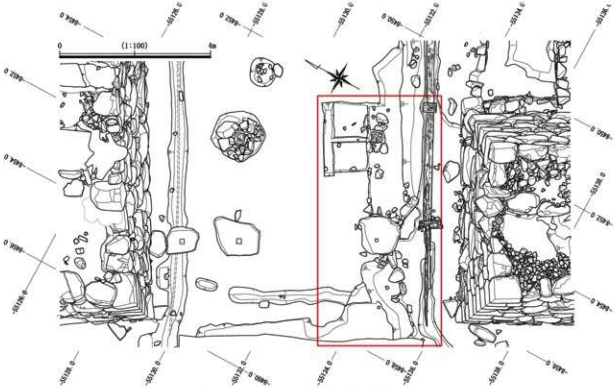
写真27　礎石取り外し前(第45次調査)

写真28　礎石取り外し後(第45次調査)

平成30年(2018)に実施した第45次調査では、前回調査後に遺構面上に敷いていた保護層と不織布を取り除き礎石を露出させ、周辺を掘り下げた。近代水路による洗掘で礎石の南東側は大きく露出していたため、側面からロープを掛けて固定し、重機にて吊り上げた。礎石を取り外したところ、直下より焼けた板列が検出し、円形となることから井戸と判断し、調査区の制限上内部を掘り下げることはできないことから、一旦埋め戻すこととした。井戸であるならば、地盤自体の耐荷性も問題となるため、この大型遺構の全容を把握する為に翌令和元年(2019)実施したのが第47次調査である。

第47次調査では、同じく復元を目指す礎石脇の水路側壁の確認を兼ね、礎石の背面にある控柱本体までトレンチを延長した。調査の結果、井戸としたものは遺存部の深さが80cm前後の大型桶であることが判明、半裁し設置と廃棄状況を確認し、再び埋め戻した。調査後、今後の対応を検討したところ、礎石下には特に根固め石は確認できなかったことから、礎石再設置時には地盤固めの必要性が上がるも、礎石と桶との間は僅か数cm程しかなく、桶を残地・保護した上での施工は困難であると判断されたため、翌令和２年(2020)に取り上げを目的とした調査を実施することとなった。

第52次調査では、桶の全面検出と取り上げを行った。桶内の焼土と炭を取り出し桶底に堆積していた種子を多量に含む土については別途分析業務に出し、完掘後は三次元測量を行った。その後側板から底板と順次解体しながら取り上げを行った。また、控柱も併せて取り上げた。



第44図　第45･47･52次調査区位置図

２．遺　構

（１）礎石取り外し前

①礎石〔写真29・30、第45・46図、図版４〕

旧調査にて礎石４とした鏡柱礎石は幅110cm、長さ100cmの不定形を呈し、材質は花崗岩である。石は全体に赤みを帯びており、縁部分は被熱にみられる玉葱状剥離による凹凸が目立ち、西端は大きく欠けることから火事を跨いで使用された礎石と推定される。上面の前寄りの位置には幅11cm、長さ9.5cm、深さ3.5cm程度の断面逆台形状の礎石が残り、ほぞ穴縁より前方へ11cmの位置には柱裾を囲った根巻金物の痕跡とみられる錆染みが残る。南東側へ向かい大きく傾斜した礎石の最高点は標高4.86m付近にあり、標高4.8m付近にあった周辺暴末路盤面からは僅かに頭を出す状況であった。周辺を10～15cm程掘り下げると、礎石を囲うように15～20cm程度の比較的大きめの石が露出し、特に前面側に顕著であった。平面的にみると礎石周囲を固めるための石群にみえるが、栗石同士は特に組み合ってはおらず、礎石自体と接し、支えとなっているものもほとんどない。栗石群内より出土した遺物からみても、礎石設置時のものではなく、19世紀頃までに追加された石とみられ、後述の溝石設置工事に伴う可能性もある。

写真29　礎石取り外し状況

写真30　水路および礎石側面

周囲の石はいずれも礎石上部付近に散在しており、こ

れらを取り外し礎石を吊り出した状況が写真29であるが、調査前に想定された太鼓御門のような礎石根固め石はみられず、また特別な地業等も確認できず、土中に直接設置されていることが判明した。なお、正面左方にある脇柱礎石となる礎石２や、鏡柱礎石となる礎石３には周囲を囲う石群はみられず、同じく土中に直接据えられていた。

②水路　〔写真30・31、第45・46図、図版４〕

取り外した礎石と南東(正面右)側の石垣と接する位置には近代に取り外された脇及び寄掛柱礎石があり、両者の間には堀へ通じる水路が存在していた。櫓門を出た水は石垣伝いに進み、一旦桝形内の石組桝へと注いだ後に下流側へ流出し、斜め方向へ進み、本礎石脇を通り抜け堀へと至る。桝より下流側の流路は近代水路敷設により大部分を失っていたが、礎石脇にはかろうじて数石残存していた。水路の平面形は礎石を中間とした「く」の字を呈し、右斜め上方向から入った水は礎石付近で屈曲し、右斜め下方向へ出ていく流路であった。

水路の側石は５石が残存しており、礎石を挟む様に細長い石材を配しているが、屈折部分については、別石は置かず礎石側面を利用し直接水があたるようなつくりであった。底石はみられず、水路の深さは現状で30cm程であるが、側石天端は路盤面下にあり、礎石上面とは20cm以上もの標高差があることから本来は上部に石を載せ２段積み以上であったと推定される。礎石脇の石背面には若干の裏栗石もみられ、第46図にある桶断面図中の１・２層がそれである。側石の下部には20cmほど灰色の粘質土が敷かれているが背面側では顕著ではない。ちなみにこのシルト層は第46図の３層にあたり、桶を跨いで敷かれてその上に写真31のように溝石を置いていることから、少なくとも石材設置時は桶の存在を知っていたこととなる。側石の背面から出土した遺物をみると19世紀のものがみられることから、その頃に何らかの手が入ったことがわかる。礎石の周囲の石群からも新しい時期の遺物がみられるため、一体的な工事があったのであろうか。なお、礎石や側石天端付近が、水の作用とみられる鉄分の付着がみられるが、水路によるものか、近代水路からの浸水の影響なのかは判断できない。

写真31　第45次調査桶検出状況

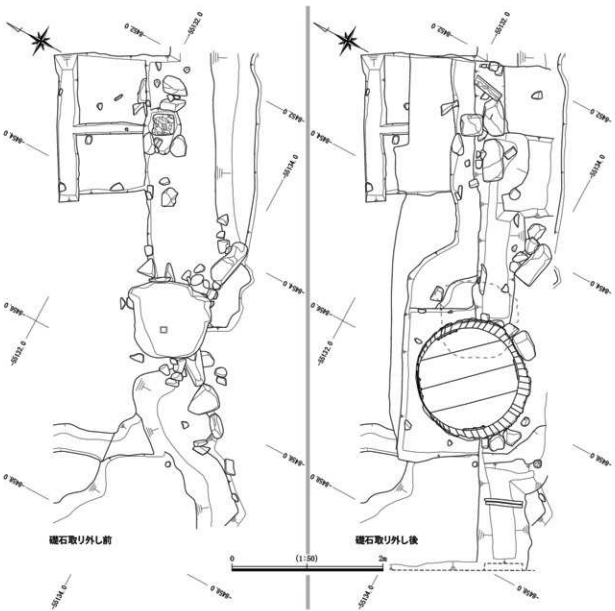
写真32　第47次調査桶半裁状況

写真33　第52次調査桶内掘り下げ状況

（２）礎石取り外し後

①桶　〔写真31～33、第45・46図、図版４・５〕

鏡柱礎石を取り外すと、想定されていた礎石根固め石等はみられず、土中に直接据えられた状態であったため、地業等の下部構造の有無を確認する意味で掘り下げを行ったところ、僅か５～６cm程下より、縁が焼けた井戸枠状の木材が見つかった。内部には多量の焼土や炭化物がみられたことから、火災を契機としてして機能停止したと判断された。大手登城路沿いの旧地形は谷部にあたり、このルート上には「御前井」「車井戸」と呼ばれる「御水」を採るための井戸を含め３基が存在していたため、この遺構も第45次調査時点では井戸と考えていた。翌年の第47次調査にて桶であることが判明すると、さらに翌

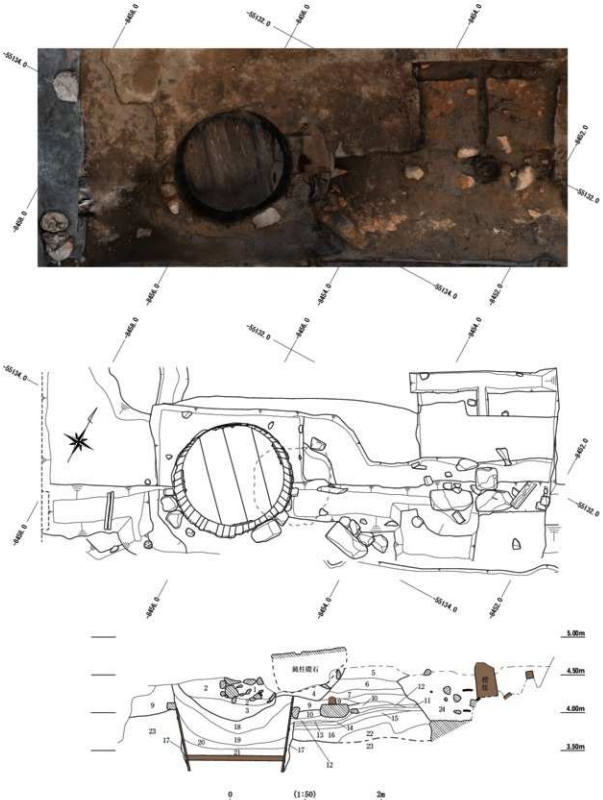


第45図　第45・47・52次調査平面図

年の第52次調査で全体を検出した。

植材はスギ製で52枚の側板と４枚の底板から成り、外面には４状の箍が残る。側板は全体的に外側へ向けて倒れており、北西側は垂直気味に立つも南側へ向けて傾斜する。調査時は、側板の隙間から水が流入する状態であった。桶縁の外側には規格は様々であるが石を並べる。桶北西半については、桶上部に焼失材片が付着していたことから、掘削を途中で止めたため南東半より10cm程高く、周囲を囲う石の検出には至らなかった。

口径は北西～南東方向で159cm、南西～北東方向で145cm、底部径は134cm、残存部の深さは南東側の最深部で内高75cm、外高100cmを測る。北から東側へかけての側板が最も高い位置まで残り、標高4.2mの頂部から下へ10cm程度は焦げて黒変していた。その他の部分の縁も標高4.1m付近を境に上部が焼け落ちていることから、焼失時は標高4.1m以上の部分が地上へ露出していたと考えられる。周囲を囲う石の上面高もまた同標高にあることから、地上部との境に置かれたものであろう。調査区北西半をみると、焼けた側板の破片が標高4.37cm付近まで散在することから少なくとも地上に25cm程度は表出していたとみられる。



1. 灰黄褐色砂土　10YR5/2(水路石設置層)
2. 黄橙色砂　10YR7/8(水路石設置層)
3. 褐灰色粘土　10YR6/1(水路石設置層)
4. 褐灰色砂　10YR5/1(礎石の設置層)
5. にぶい褐色砂土　7.5YR6/3(上面はある時期の面か、焼土含む)
6. 褐灰色粘質土　7.5YR5/1
7. 褐灰色砂　5YR6/1(ある時期の面)
8. 黒褐色粘質土　7.5YR3/1(木片多数含、廃棄層か)
9. 褐灰色砂土　10YR5/1
10. にぶい黄色土　2.5Y6/4(ブロック状、整地層、旧表土か)
11. 灰黄褐色砂土　10YR6/2
12. 黒褐色土　10YR3/1(粘性あり　木片・製品分多数)
13. にぶい赤褐色土　5YR4/4(極設置時の面)
14. 灰黄褐色砂　10YR6/2
15. 黒褐色土　10YR2/2(粘質あり　下部は黒い)
16. にぶい黄褐色砂　10YR4/3
17. 褐灰色土　7.5YR5/1(極側り方)
18. 暗褐赤褐色土　5YR2/3(ブロック状の焼土層)
19. 暗褐赤褐色土　5YR3/3(焼土に大型の炭)
20. 赤黒色炭　2.5YR2/1(小型の炭)
21. 黒褐色土　5YR3/1(焼子を多く含む、焼)
22. 黒褐色粘質土　10YR3/1(木製品片多く含)
23. 褐灰色粘質土　10YR5/1(木片含)
24. 褐灰色土　5YR6/1(燃柱抜き取り・設置層)

第46図　第45･47･52次調査平面オルソ・断面図

第46図の通り桶は地山となる23層の灰色シルト中に直接設置される。図中右方では側板裏に５～６cm程度の掘り方(17層)がみられるも、左方は基本的に直接地山と接する。桶取り上げ後に底板下を確認したところ、掘り方はみられず地山と接していたことから、底部は側板部分のみを掘り下げて設置したとみられる。

52枚の側板の幅は不均一で、最小８cmから最大17cmまでと様々である。厚みは上部で１～1.5cm程度であり、下部へ行くにつれ厚みを増し、底部では２cmほどとなる。

桶底の対面する形で４箇所に幅30cm厚み３cm程度の断面方形の棒状木材が置かれる。底板の浮上防止の為に設置されたとみられ、材の片側４～６箇所に切れ込みをいれて湾曲させて側板と設置させ鉄釘で留めるもので、釘数は南東側のみ４箇所、残りは３箇所に打たれていた。検出時は既に側板とは接合しておらず痕跡より位置を復元した。

４枚の底板は、厚さ６cm、幅は北東側から28cm、36cm、34cm、36cmと一枚だけ狭く残りはほぼ近い数値である。裏面は側板底から14cm程高い位置にある。底板同士の接合部には図版５のように幅２cm程の竹製の合釘が４箇所ずつ打ち込まれ、その合わせ目の中心には位置合わせの破線状の工具痕が残る。裏面には調整痕が多く残る。

写真34　覆屋礎石および柱

写真35　中ノ御門控柱および礎板

桶内の土層をみると、18層の焼土層、19・20層は炭片堆積層である。厚く堆積するこれらの層はその量から考えても焼けた桶片の堆積ではなく、周辺整理のために投棄されたような状況である。また、これらの下層、桶底には21層が堆積していた。火災痕跡を含まないこの層は、桶機能時の堆積層であり、内部には多量の種子が含まれていた。調査後に21層の土を分析に出したところ、多くの寄生虫が確認できたことから、便であることが判明し、桶は便槽と判明した。なお、分析の詳細については第12節(113頁～)に掲載した。

桶覆屋設置層である７層より第47図75の瀬戸・美濃産の皿が出土しており、大窯第３段階後半にあたることから桶の設置も16世紀第四四半期に近い頃が想定され、近世初頭に池田家が入り大手門となる前まで存続していたこととなる。

②礎石および柱　〔写真34、第45・46図、図版４〕

桶の北東側50cm、延長したトレンチの壁面より柱が載った状態の礎石を検出した。礎石は幅40cm、厚さ17cm、上面幅32cmで、上面には10cmの角材とみられる柱の根元部分約10cmが残存していた。桶に伴う地盤面に据えられていることから、同一時期の遺構であり、その位置から桶の覆屋の柱と推定される。

③掘立柱および礎板〔写真35、第45・46図、図版４〕

中ノ御門表門礎石のほぞ穴より背面側へ2.7mの地点には掘立式の控柱が残存する。中ノ御門の控柱であるが、対面側にも残る控柱の調査から、幕末期には埋め立てられ礎石立となっていたことが分かっている。近代石組水路の敷設により柱付近まで撹乱が及んでいたが、掘り下げを行った所、柱の下に大石材を検出した。石は花崗岩製で、検出分だけでも長さ50cm、厚さ30cm以上にもなり、上面標高は3.9mである。地山となる22・23層を掘り込み置かれているが、設置のための掘り方は確認できなかった。石の肩より上方へ伸びる24層は、この石に伴う掘り方ではなく、控柱に伴うものである。桶機能時の地盤より下にあるがより古い遺構でなく、その位置から当初の控柱礎板であると考えられ、元々24層のライ

ンと近い位置に掘り方があったと推定される。

控柱は一辺が約28cm程度の方形で材質はクリである。頂部の標高が4.6mで長さ46cm程度が遺存し、柱周囲は固定のための掌大の石が多くみられた。若干傾いた柱の底部にも小型ではあるが、礎板とみられる扁平な石が敷かれていた。石は被熱し、赤変しており周囲にも同様の石が点在していた。またこの礎板状の石と柱底部は密接はしておらず、3～4cm程の隙間がみられ、そこには間詰めとして平瓦とみられる瓦片を重ねて挟んでいたが、それらもまた焼けて赤変していたことから、この控柱は火事後に再設置されたものと判断した。柱に伴う層である24層は直径が1.5mを超える大型の掘りこみであるが、内部から出土する瓦は被熱したものが目立ち、陶磁器類は17世紀代のものが多いことから、この層は、石黒火事後の門復元に伴う控柱再設置層と判断した。元々礎板上に立っていた控柱が火事により焼失し、土中に残った根元部分を掘り出すための掘り方であった可能性があり、掘り出しと再設置を同じ穴で行ったため、大きな掘り方となったとも考えられる。その他24層中からは、建築部材の一部と思われる破片が多く入っていた。底部に瓦片を挟む状況も併せ、大手門の柱の設置としてはやや乱雑な感じも受けるが、あらゆる施設に先駆けて、火事当年中に再建された門であったということを勘案すれば、急ピッチで行われた工事であったことが想像される。

（3）トレンチ土層　〔第46図〕

樋内にある1～3層は礎石脇の水路設置に伴う層で、厚く堆積する18層の焼土層を大きく掘り込む。1・2層は砂を主体とする裏栗石層で拳～掌大の石を多く含む。3層は側石の下部にあたり、灰色の粘質土がしっかりと敷かれる。検出段階ではこれを鏡柱礎石設置のための地業として考えたが、位置が異なっている点や側石背面の調査によって、側石に伴う層と判断した。4層は礎石を囲うように入り礎石設置の掘り方にみえるが、含まれる遺物からも側石設置に伴う側面側からの掘り込みとみられ、もしくはそれと同時あるいは近い時期に行われた、礎石辺縁部への栗石充填の掘り方とも考えられる。

5～7層は近世前期の層と考えられる。5層は上面標高4.6m付近にある砂質の層で上面は硬化していることから、ある時期の地盤面であったとみられる。この上層には焼土を含む土があり、さらにその上、標高4.78m付近が幕末路盤面である。粘性のある6層を挟み、7層はきれいな砂層である。上面標高4.3mのこの層は、下層にある堆積物や樋焼失に係わる層を覆い隠すように敷かれており、ある時期の路盤面であるとみられる。

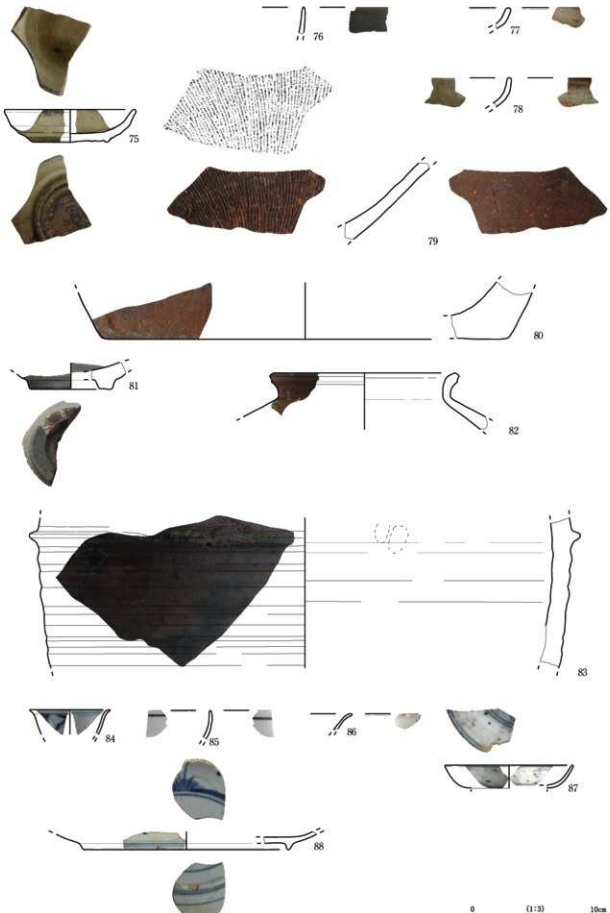
8・9層は樋に伴う面を覆う層である。8層は木片の堆積層で、屋根材をはじめとした木製品の破片が多量に含まれており、廃棄層の様相を呈する。礎石上の柱は9層中に遺存していたことから、柱の廃絶から時を置かずに堆積あるいは敷かれた層であろうか。

10～12層は樋および礎石設置のための層である。旧表土であった13層上に12層を敷き、礎石を設置、さらに10層を敷き路面とした。またその際、樋周囲に石材を配している。10層上面の路面は樋付近で標高4.0m付近にあり、礎石を挟んで緩やかに上昇する。

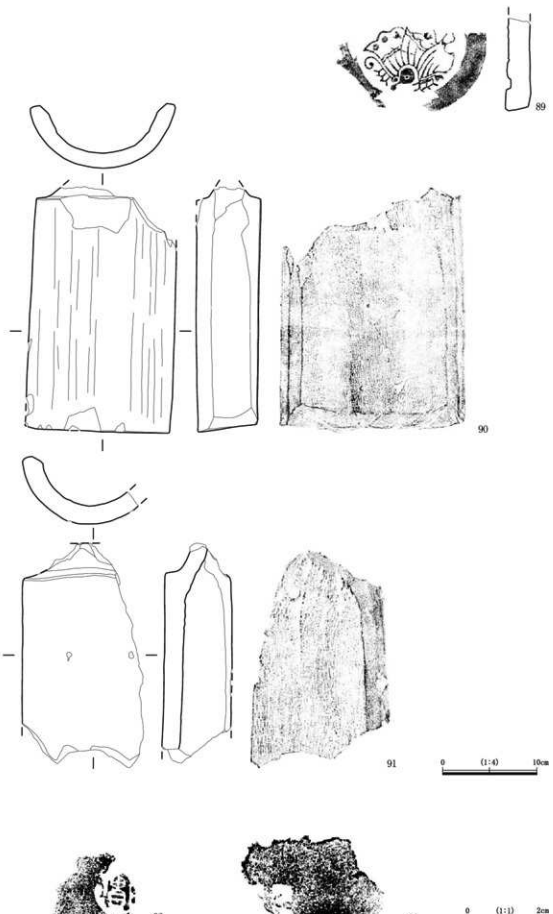
13層は樋設置時の旧表土で14～16層も旧堆積土である。壁面右方（山側）へ向かい上層するこれらの層をみると、14層は砂層、15層は粘質層、16層は再び砂層となる互層状であり、地形に沿った自然堆積状の様相を呈している。

17層は樋設置の掘り方である。左方（堀側）に余掘りはほとんどなく、地山となる23層に接する形で掘えられ、下方に僅かに掘り方がみえる。一方右方は標高4.4m付近にある13層以下を掘り込んで掘えられており、樋外側5～6cmに掘り方が確認できた。

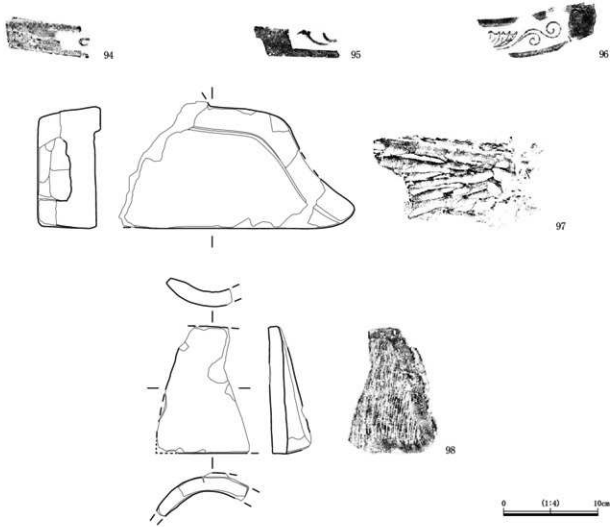
18～21は樋内堆積層で、18～20層は火災関連、21層は樋に伴う堆積物である。18層はブロック状の焼土層、19層は拳大ほどを含む大型の炭片堆積層で小型の石を含む。20層もまた炭片堆積層であるが、こちらはより細かな破片が重なる。これら3層は樋縁へ向かい弧をなして堆積しており、周囲から投棄されたような状況から火事場整理の痕跡と想定される。21層は土質の異なる樋底の堆積物である。多量の



第47図　第45・47・52次調査出土遺物実測図１



第48図　第45・47・52次調査出土遺物実測図２



第49図　第45･47･52次調査出土遺物実測図3

種子を含んでいたことから分析に出したところ多種の寄生虫を確認し、便であることが判明した。

22・23層は周辺の地山とされる灰色のシルト層である。

24層は長さ1.5mを超える大型の掘り方埋土である。標高4.5～4.6m付近に上面があるとみられ下部には上面標高3.9mとした大型の石材が置かれる、内部には焼石や焼瓦を含むことから火事後の旧控柱抜き取りと新控柱再設置の為の掘り方と考えられる。

３．遺　物　〔第47～53図、図版９・10・11〕

89・96は遺構に伴わない近代水路の撹乱と思われる位置より、111は掘り下げ中に出土した。近世中ノ御門に係わる遺物と、それ以前の焼失桶に係わる遺物に二分され、中ノ御門関連では、控柱設置のための掘り方である24層より76・81・90～95・97・116・132・133、礎石脇の水路付近では側石設置層である４層より88・110、側石直下より78・79、側石裏より98、水路床面付近より113・114が出土した。

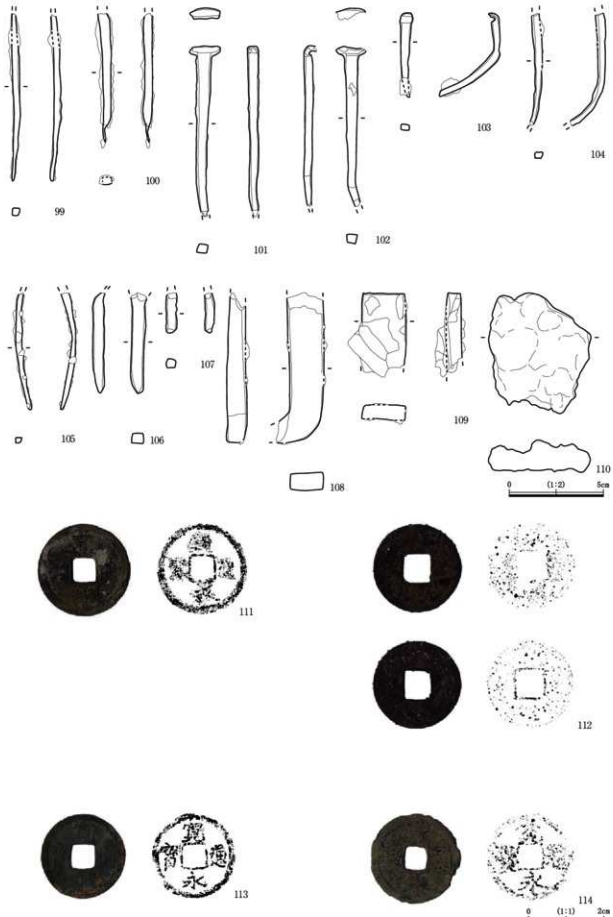
焼失桶関連では焼土層である18層より83・99・100・115・119・121～123・125、炭層である19・20層より86・87・101～109、桶底の堆積物層である21層より112・126～130、層位不明の120、また、桶上には桶を焼失させた火災に関係するとみられる焼土ブロックが散在しており18層との関連が考えられるが、ここより80・82が出土した。

桶から控柱までに設定したトレンチ部分をみると、桶の焼失後に堆積した木片堆積層である８層より84・124・131・134、桶を覆う９層より77、それらを覆い隠すように敷かれた７層より85が出土、桶機能時の路盤面である10層より118、桶設置以前の層である15層より75、15ないしは16層より117が出土した。75～83は陶器、75・77・78は瀬戸・美濃産の皿、79は須佐産の擂鉢、80は備前甕の底部、81は肥前産の香炉とみられる底部、82は備前の壺口縁、83は備前産とみられ突帯がめぐる。84～88は磁器、84～87はいずれも中国産とみられ、84は小坏、85は碗、86は白磁の皿とみられ87の皿は桶内炭層からの出土で、被熱により煤が付着する。88は肥前産の皿。

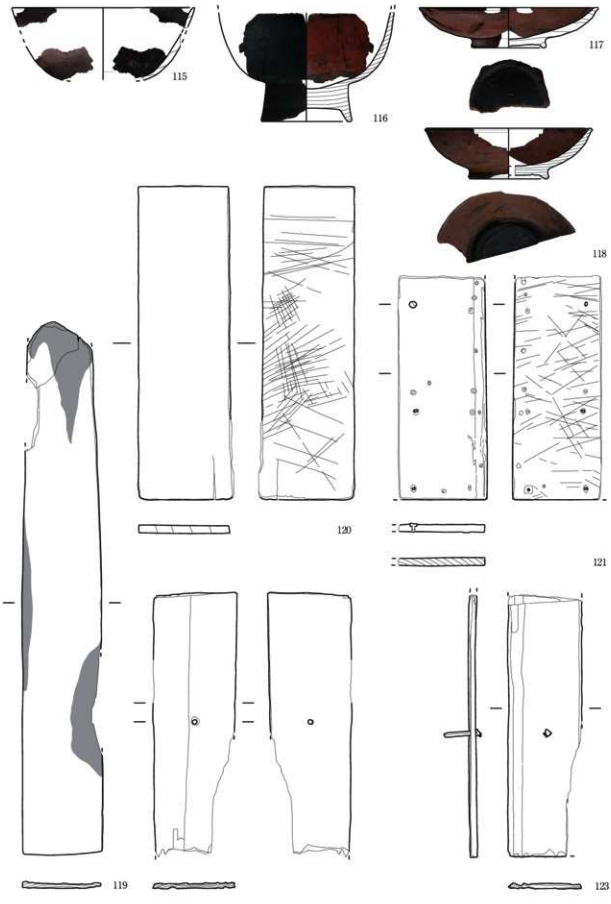
89～98は瓦、89は螺20型の軒丸瓦、90・91は丸瓦、92・93は平もしくは桟瓦の小口に押された刻印で、○に實と四菱、94は新型の軒平瓦とみられ、中心飾りは不明ながら、17世紀代にみられる唐草、95は平26型とみられる軒平瓦、96は平44型の軒平瓦である。97は被熱し赤変した鬼瓦、98は棟込瓦で全長13.5cm。

99～114は金属製品、99～107は釘で101～103・106の頭部は頭巻となる。108は取手状、109は断面長方形状の鉄製品で、110は溶解した鉄とみられる。111・113・114は寛永通宝、112は文字が判別できない。

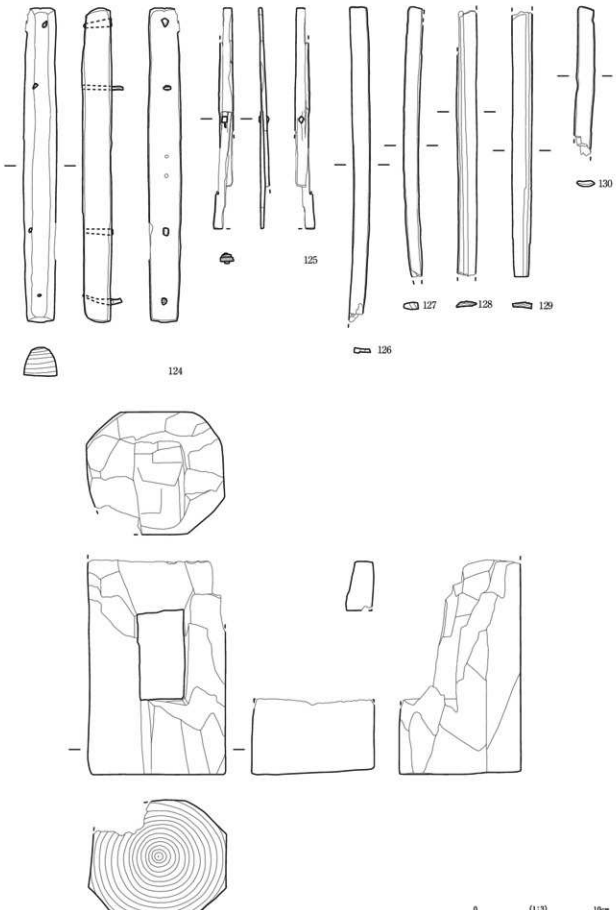
115～133は木製品、115～118は漆器の椀で115は復元口径14.4cm、116は３cmの高台を持ち、117は復元口径14.2cm高さ3.2cmを測り、118は復元口径13.2cm、高さ4.0cmを測る。119は火を受け部分的に焦げた屋根材とみられる。120は長さ24.8cm、幅7.3cmの長方形の板状で片側には擦痕が多数みられる。121は途中で割れるも10箇所以上の釘穴があり、うち４箇所には木釘が残る。釘の断面形はＴ字形で外面には多数の擦痕が残る。122・123も屋根材とみられ中央付近に釘穴と木釘が残る。124は長さ24.9cm幅2.6cm厚さ2.2cmの断面蒲鉾状の木製品で上下２箇所ずつに鉄釘が打たれる。125は長さ17.5cm、幅1.6cmの長方形材が方形の留め具で重ね留めされている。126～130は桶底の堆積物中より出土、箆状の形状から籐木の可能性があるため図化したが今後の検討が必要である。131は柱材の一部で直径9.7cmの断面八角形の材に長さ7.3cm幅3.5cmのホゾ穴を持つ。132は中ノ御門控柱本体で、28×29cmの方形材で、高さ46.1cmほど残存し、年輪は82本を数える。材質はクリ。133は多角形状の柱材の一部とみられる。134は獣骨。



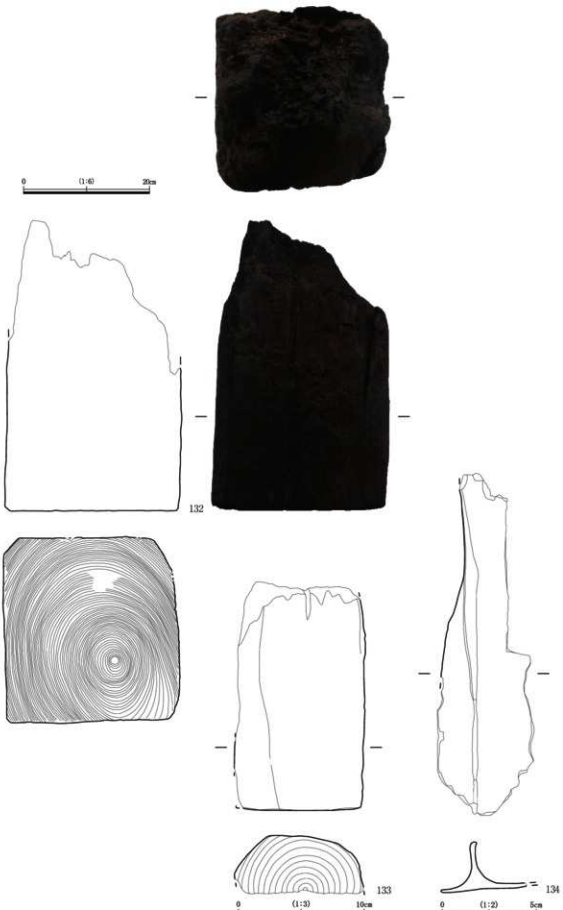
第50図　第45・47・52次調査出土遺物実測図4



第51図　第45・47・52次調査出土遺物実測図5



第52図　第45･47･52次調査出土遺物実測図6



第53図　第45･47･52次調査出土遺物実測図7

第７節　第46次調査

１．概　要

調査期間　令和元年(2019)６月３日～７月３日　面積：78.2㎡（Tr1:74.0㎡、Tr2:4.2㎡）

鳥取城跡第46次調査は、石垣解体積み直しに伴い実施した調査で中ノ御門桝形南西石垣外(公園)側沿いに設定した第１トレンチとそこから折り返した北東石垣沿いに設定した第２トレンチからなる。トレンチが接する石垣上には近年まで複数の樹木が生えており、その樹根の影響で南西側石垣は大きく孕み出し、一部は大型土のうで崩落防止を行わなければならない状況であった。また北東石垣は明治期と昭和期に大部分を積み替えられていたため、これを修理することとなり、併せて石垣前面部分にトレンチを設定し調査を実施した。

２．遺　構

(１)第１トレンチ(Tr1)および石垣　〔写真37、第55・56図、図版５〕

北西側石垣沿いに設定した３×21.4mのトレンチである。過去の調査の際に石垣沿いは掘り下げられ、長辺側の壁面はすべて埋土でありかろうじて土層が残る北東壁を図化した。また、調査区中央付近には平成10年(1998)に実施した第７次調査の際の第６トレンチの掘り方が残っていたため再掘削し、土層を確認した。トレンチ床面はこの中央を頂部として両側へ向かい山なりとなるが、これは旧調査跡を踏襲したもので直接旧路盤面となるわけではない。トレンチ長辺の両端付近は根石付近まで露出する。

Tr1沿いの石垣中位付近の標高7.0m付近には明確に横方向の目地が通る。第１節の第41次調査でも報告したが、当初目地を天端としていた石垣についてまず享保５年(1720)の石黒火事以降、対面の桝形内側を高め、その後18世紀の末までに上半を積み足しているため、上下で積み方が大きく異なる。石垣の底をみると北東端が標高4.9mにあるのに対し、中央部では標高4.4mと１石分多く入っており堀側へ向かい傾斜をみせる。最下部に小型の石を敷くも胴木はみられない。また石垣修理中積み足された上半部

第54図　第46次調査区位置図

写真36　第46次調査第２トレンチ床面

分の石材のうち３石より墨書が発見された。石の下面に書かれており、「宮崎組　七月廿日　㊍」、「五月」、「五月拾五日　㊍　宮崎□」(写真37)と確認できる。

(２)第２トレンチ(Tr2)および石垣〔第55・56図、図版５〕

第１トレンチから折れた北東側石垣前の位置に設定した２×1.8mのトレンチである。

この面の石垣は本来、図中左方へと18m程続いていたが、明治期の桝形石垣解体時に現在のように短くなり、昭和18年(1943)の地震では積み替え部分が大きく崩落し、昭和30年代に現在の姿となった。従って向かって左角および上半部はこの時新造されたもので、裏側には川原石が充填される。第１トレンチ側で確認できる横目地も本来こちらの面にも続くと考えられるが下半のみの残存であるため明確ではない。路盤面自体が近世期の間に段階的に高くなるため、早くに埋没したとみられる下部については、間詰石が良好に残る。

(３)トレンチＡ～Ｃ面土層　〔写真36、第55・56図、図版５〕

掲載した第１トレンチ・第２トレンチ土層図のある壁面は近接した位置にあり基本的に共通した層であるため以下にまとめて報告する。

１層の送電管理設の掘り方により大きく撹乱され面としては残らないが２層上面、標高5.9m付近が幕末期の路盤面である。20cm程度厚く敷かれた２層に対し３層以下は厚さ５cm以内の層が続く。標高5.7mにある３層上面は砂礫が硬化しており、その下５層上面もまた鉄分が沈着し硬化していることから、それぞれある時期の路盤であった可能性がある。６～８層は同質の砂礫層であるため一体的な整地か。９・10層は一体的な砂層でありこの上面もまたある時期の路盤面であるとみられ、Ｃ面ではここに22層の砂層が敷かれここが面となる。11層のシルト層を挟み、12層は再び砂層となり、ある時期の面と想定される上面はＡ面で5.3m付近にあるが、緩やかに下降しＣ面では5.1mで石垣と接する。

13・14層は石垣設置に伴う近世初期頃とみられるブロック状の整地層である。

15～18層は石垣構築以前の層である。15層は木製品堆積層で、様々な製品片(第60・61図169～186)が含まれ、廃棄層状の様相を呈す。中でも箸が目立ち図化し得なかったものも含め僅かな範囲内から多くの出土をみた。Ｃ面では下降しながら標高4.9m付近にある石垣の根石下へと入り込んでおりこの層上に石垣が築かれる。また、第２トレンチ底面付近では写真36のように15層中あるいは直下付近に焼土や焼石がみられる。16層以下は自然堆積状である。

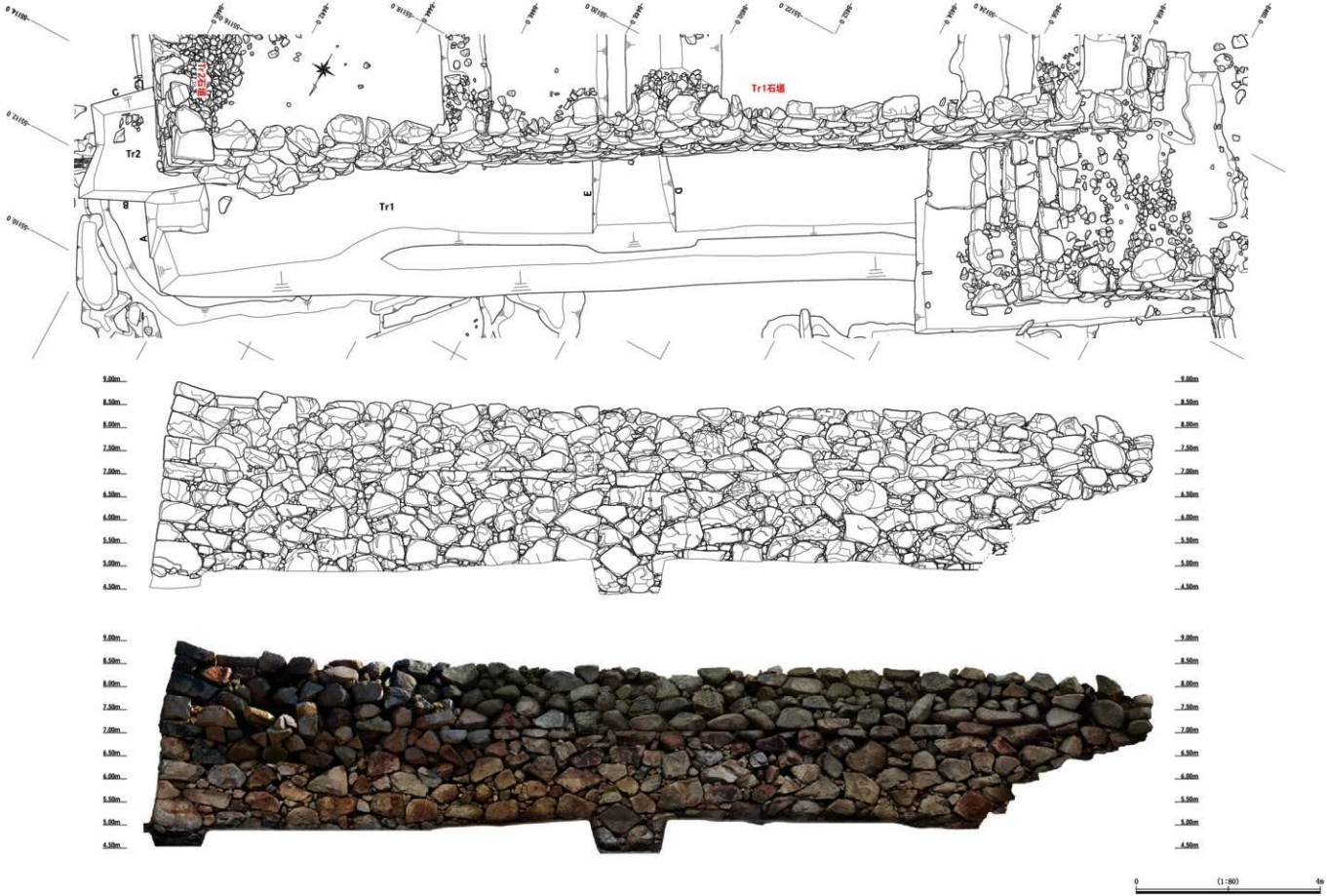
19～21層はＢ面上方にあり、19層上には鉄分が沈着し硬化することから５層の延長と考えられ、一連とみられる20・21層は７層に相当するか。

22～24層は関連する層とみられる。Ｃ面の標高5.4m付近に水平堆積する22層はある時期の路盤と想定される。その下、９層付近から深さ30cm程、ピット状に窪む24層は焼土堆積層で、内部には炭化物がみられる黒色の層で、これを隠すように灰白色砂である23層が載り、22層がさらに覆う。

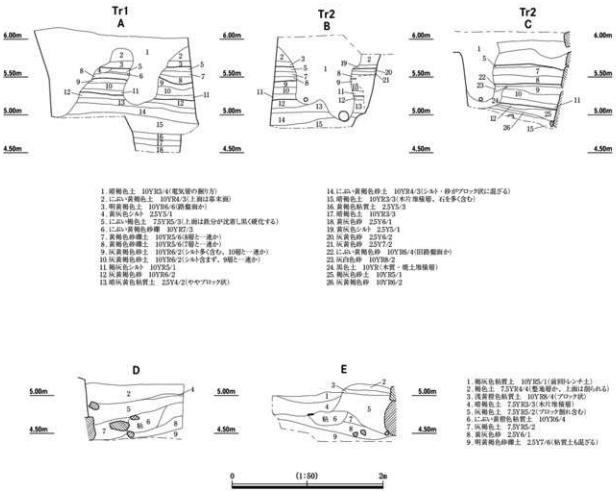
25・26層はＣ面石垣根石下部付近にみられる。石垣構築時の基盤となった15層上に薄くみられる26層とその勾配をなくすように入る25層の上に路盤面となる12層の砂が敷かれる。

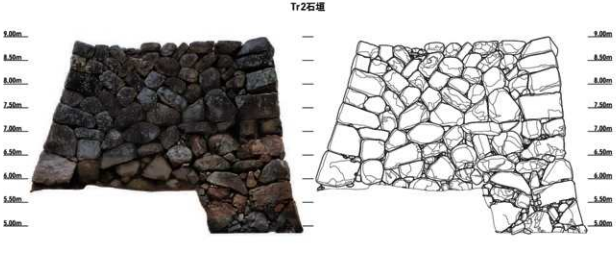
(４)トレンチＤ･Ｅ面土層　〔第55・56図、図版５〕

第７次調査第６トレンチにあたり、標高5.2m以下を再調査した。Ａ～Ｃ面でみられ砂礫を用いた明るい色調の薄い整地はみられず、検出された比較的厚い層は、13層以下に対応するとみられる。Ｄ面で顕著であるが層は石垣へ向かい傾斜する。４層は木片堆積層であるが、石垣下にみられたＡ～Ｃ面の15層とは別のものか。その下、中央付近には粘質土である６層がレンズ状にみられるが性格は不明である。

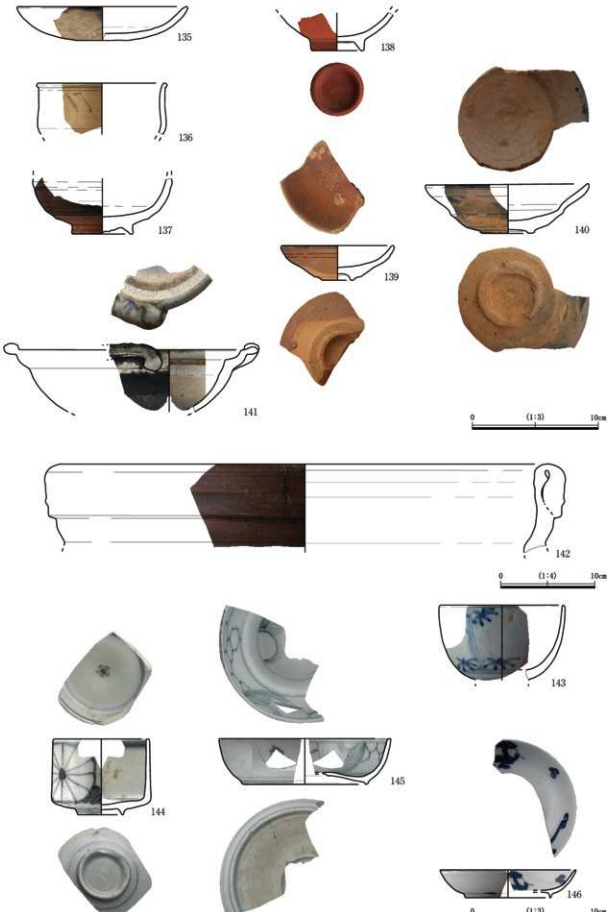


第55図　第46次調査平面・立面・オルソ図

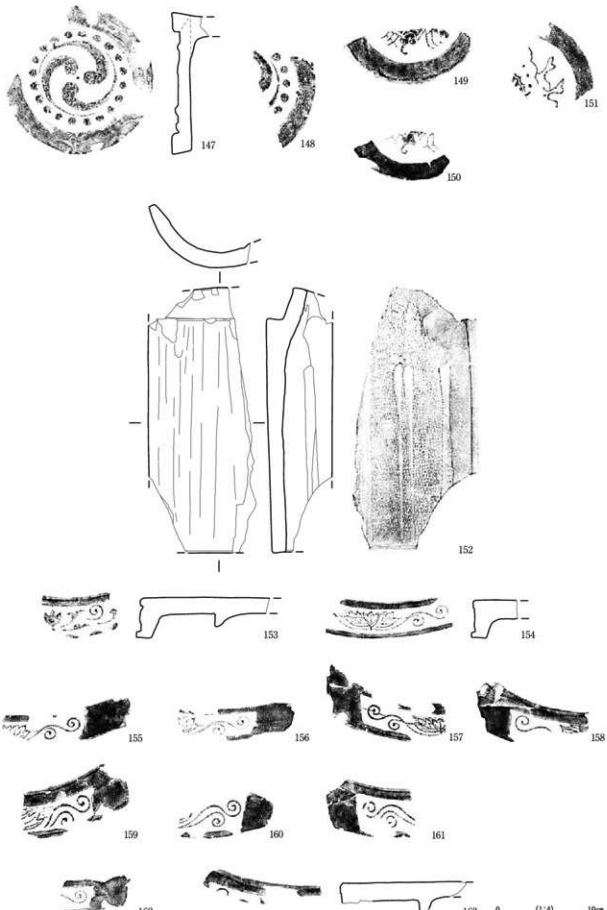




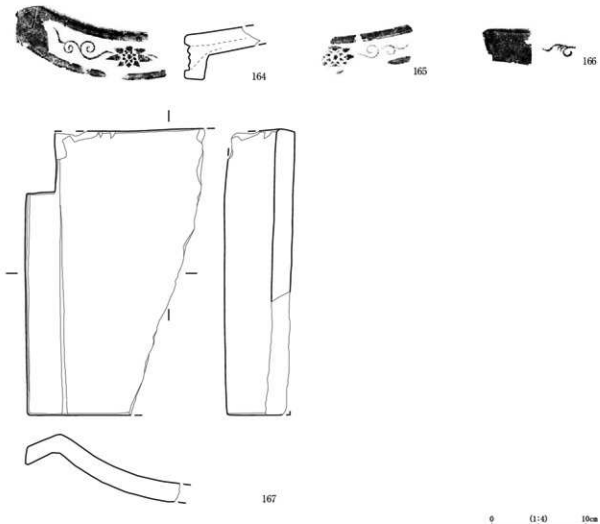
第56図　第46次調査トレンチ土層・石垣立面・オルソ図



第57図　第46次調査第１トレンチ出土遺物実測図１



第58図　第46次調査第１トレンチ出土遺物実測図２



第59図　第46次調査第１トレンチ出土遺物実測図３

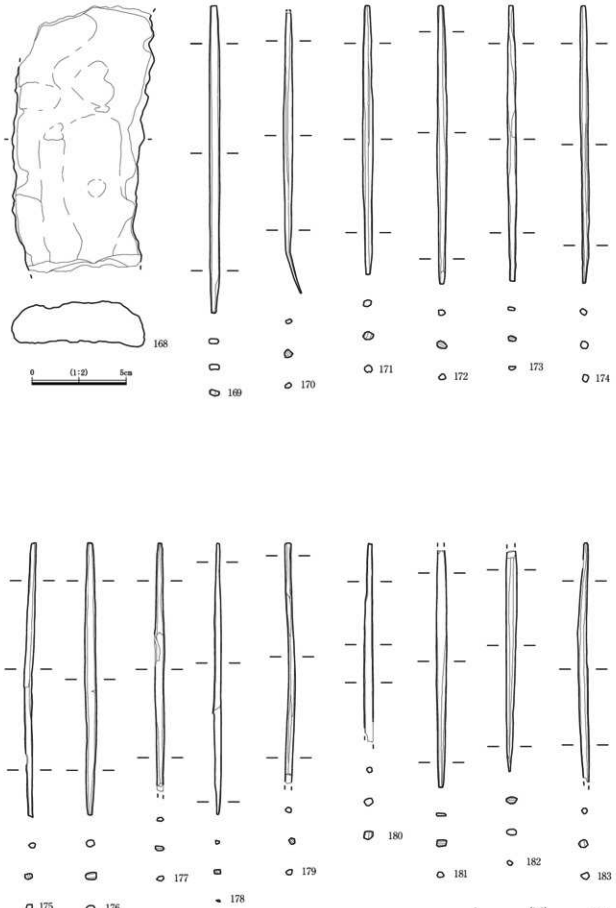
８層は明るい色調の砂層で10cm以上も厚くみられる。また、標高4.4m付近にある石垣下部へ入り込む層は９層の砂礫層であり、この上に石垣が構築されている事がわかる。

３．遺　物

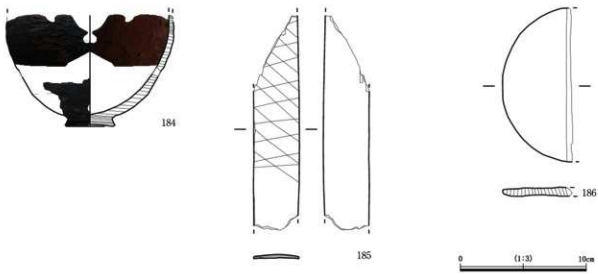
（１）第１トレンチ出土遺物　〔第57～61図、図版11〕

旧トレンチ埋土より136～145・147～167、木片堆積層である15層より135・146・169～186、18層より168が出土した。135は土師皿で復元口径13.5cm、136～142は陶器、136は肥前の京焼風陶器碗で外面には鉄絵、137は肥前産の碗、138は常滑産の碗で「常154」の窯番号が入る。139・140は肥前産の皿で碁笥底状の底部をなし、後者の口縁～外面にかけては煤の付着がみられる。141は土鍋、142は越前甕の口縁部。

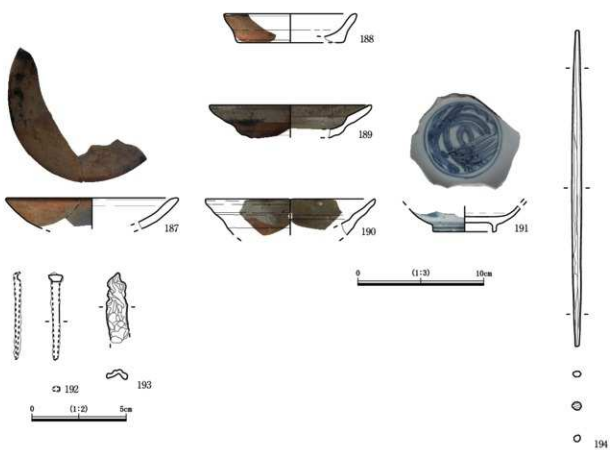
143～146は磁器、143は肥前の碗で外面は竹文、144は肥前系の筒形碗で外面には菊花文で見込に五弁花、145は肥前系の皿で底部に歪みがあり、高台内は蛇の目釉剥ぎ、146は中国産の皿で薄い器壁の内面に雲龍文。147～167は瓦、147・148は今回新たに発見した巴20型の巴文軒丸瓦で、20個の珠文を持ち上部の丸瓦部との接合部の断面形は大きく反る。149・150は蟇10型ないしは11型の軒丸瓦、152は丸瓦で全長28.4cmを測る。153～166は軒桟瓦。153は平18型、文様から右軒桟瓦とみられ裏面には滑り止めが付く。154～163は上向き三葉文とみられ、154～157は平41型の右軒桟瓦、158は平45型の右軒桟瓦、159は平51型の左軒桟瓦、160・161は右軒桟瓦の平55型か、162・163は型不明で、後者には滑り止めが付く、164・165は平66型の右軒桟瓦、166は五葉文の平81型で、左軒桟瓦とみられる。167は右桟瓦で全長



第60図　第46次調査第１トレンチ出土遺物実測図４



第61図　第46次調査第１トレンチ出土遺物実測図５



第62図　第46次調査第２トレンチ出土遺物実測図

は30.3cmを測る。168は不明鉄製品。

169～186は木製品、169～183は箸、端部を欠くものがあるが最長22cm程度である。184は漆器椀、185は不明木製品で幅3.6mmで片面に斜格子を刻む。186は蓋物もしくは底板とみられ、復元口径12.2cm。

（２）第２トレンチ出土遺物〔第62図、図版12〕

硬化面である５層より193、７層より190、14層より191、木製品堆積層である15層より187・188・194、焼土層である24層から189・192が出土した。187・188は土師皿、187は復元口径13.7cmで煤が付着する。189・190は肥前陶器皿で、後者は輪花皿、191は中国産の磁器碗で見込には雨龍を描く。

192は頭巻釘で全長4.6cm、193は不明銅製品で何かに付属させたものか。194は箸で全長25cmと長い。

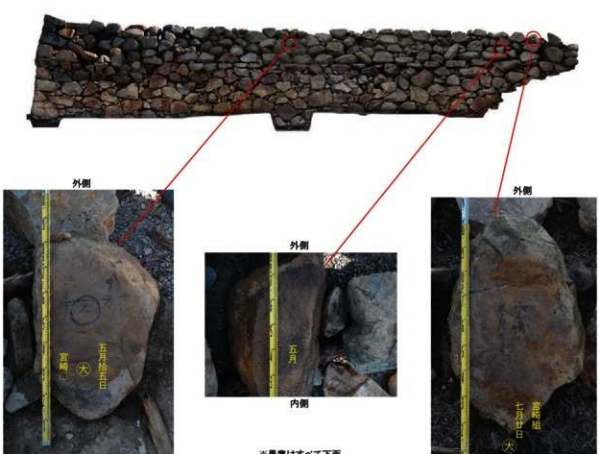


写真37　墨書のある石材

第８節　第48次調査

１．概　要

調査期間　令和元年(2019)10月７・８日　面積：6.6㎡

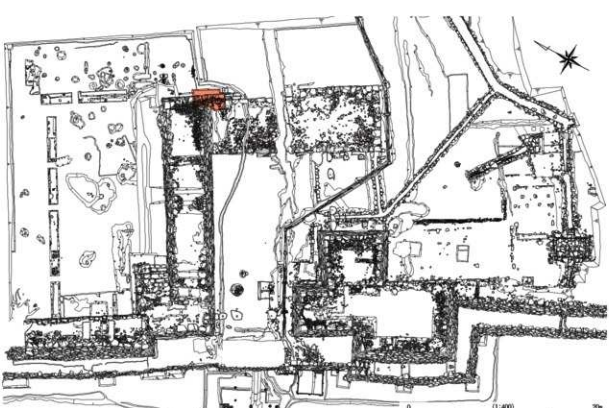
鳥取城跡第48次調査区は中ノ御門桝形石垣北東部の外側、雁木脇に設定した約3.4×2.4mのトレンチである。調査区付近は第46次調査第56図で報告した通り、明治期に積み換えられた石垣は、地震で崩落後、昭和30年代に現在の形となった石垣が存在していたが、桝形石垣の復元工事に伴い解体されたことにより下部にあったもとの石垣の状況を確認する目的で実施した。

２．遺　構　〔第64・65図、図版５〕

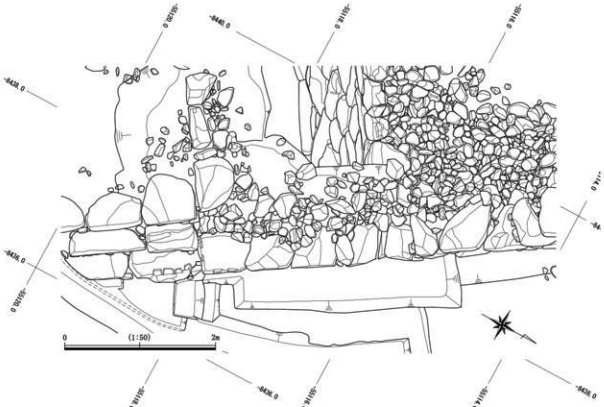
第65図のとおり新規で積まれた石垣は標高5.8m付近にあった幕末路盤面付近より積まれており、角部付近は下部にある近世期の石垣とは組み合ってはいなかった。近世期石垣は標高5.7mより下に残存しており、幅50～60㎝程度の石材が並ぶ。図面中央付近、雁木脇の石材には角を付けたものを配し、正面および雁木側には幅12～14㎝程の矢穴痕が２箇所ずつ残る。第46次調査よりこの面の石垣は標高4.8m付近より据えられていることから、ここに今回確認した石垣は下から２段目とみられる。石垣背面には拳～掌大の栗石が詰められており中には、赤変したものも含まれる。

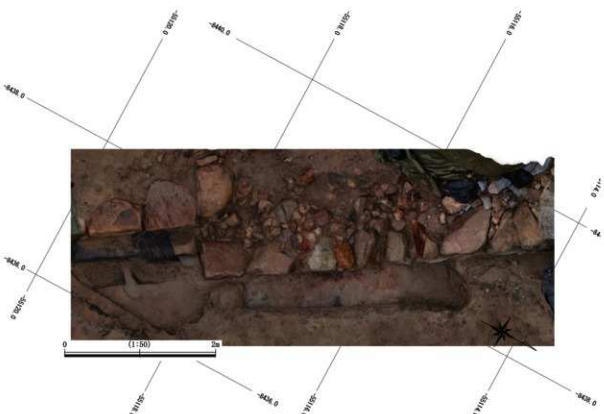
３．遺　物　〔第66図〕

195は石垣前面の標高5.4m付近より出土した肥前の溝縁皿、196は裏栗層中より出土した螺10型ないしは11型の軒丸片である。

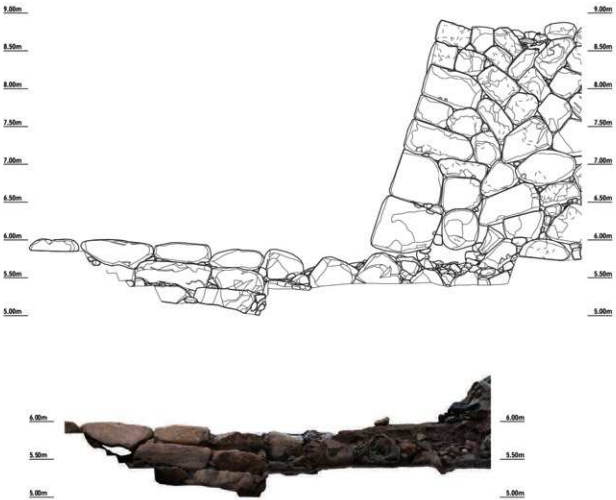


第63図　第48次調査区位置図





第64図　第48次調査平面・オルソ図



第65図　第48次調査立面・オルソ図

第66図　第48次調査出土遺物実測図

第９節　第50次調査

１．概　要

調査期間　令和元年(2019)10月15日～11月27日

面積：7.3㎡（Tr1:1.1㎡、Tr2:1.4㎡、Tr3:1.6㎡、Tr4:1.0㎡、Tr5:2.2㎡）

鳥取城跡第50次調査は二ノ丸南西側の石垣沿いで実施した。西坂下御門を抜け南東側へ直進し二ノ丸へと向かう登城路沿いに位置する。現在、重要文化財となっている仁風閣を右手にして進むこの路は勾配が急なため、降雨時石垣を伝い流れる水が路面を削り、近年の集中豪雨による影響は顕著であり、排水路の設置も検討する必要があったため、地表下の状況を確認するために５箇所にトレンチを設定して調査を実施した。

第１トレンチ(Tr1)

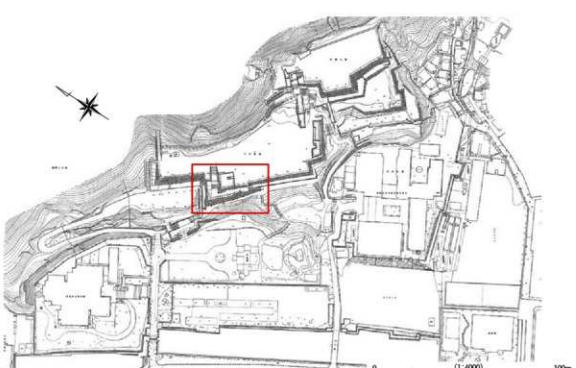
２．遺　構　〔第69図、図版６〕

１～２石程度の僅かな出角部分の角付近に設定した１ｍ四方のトレンチである。石垣をみると23.1m付近にある現地表面直下に幅100cm、高さ50cm程の大型の石材があり、下辺となる標高22.7ｍの下には小型の石が数石みられる。根石の可能性があり取り外しは行わなかったが、高さからもここが根石とは考えにくく、下段の石垣は存在するとみられる。この大型石材は前方へ若干滑り出していると想定される。

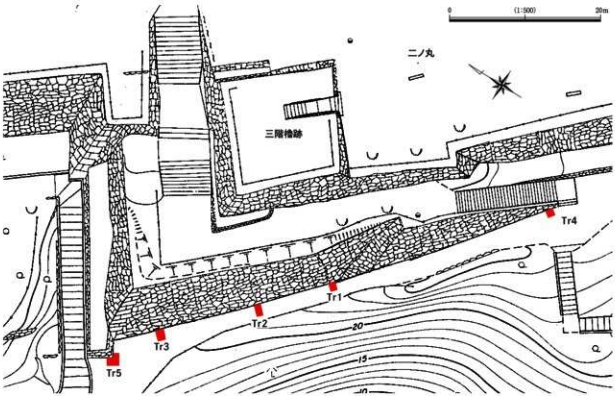
１層の表土を除去すると整地層とみられる２層が広がる。地山由来とみられる明るい色調の土はある時期の路盤面とみられるが近代以降の面の可能性もあり、大型石材の裾付近へと続く。３層はブロック状の土で４層には瓦片が多く含まれ、５層には焼土が含まれる。

３．遺　物　〔第70・71図、図版12〕

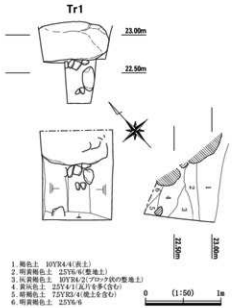
200・202～210は１層、198は２層、199・201・211は３層出土である。198は越前の捏鉢、199・200は肥前系磁器の筒形碗と皿である。201～208は軒丸瓦の瓦当部分で201は蝶14型、202・203は蝶15型、204は蝶11型、205～207は蝶17型、208は不明の蝶文である。209の丸瓦の外面には㊥の刻印が残る。210は隅袖瓦、211は左桟の目板瓦で小口には「文戌」の刻印。



第67図　第50次調査区位置図



第68図　第50次調査トレンチ配置図

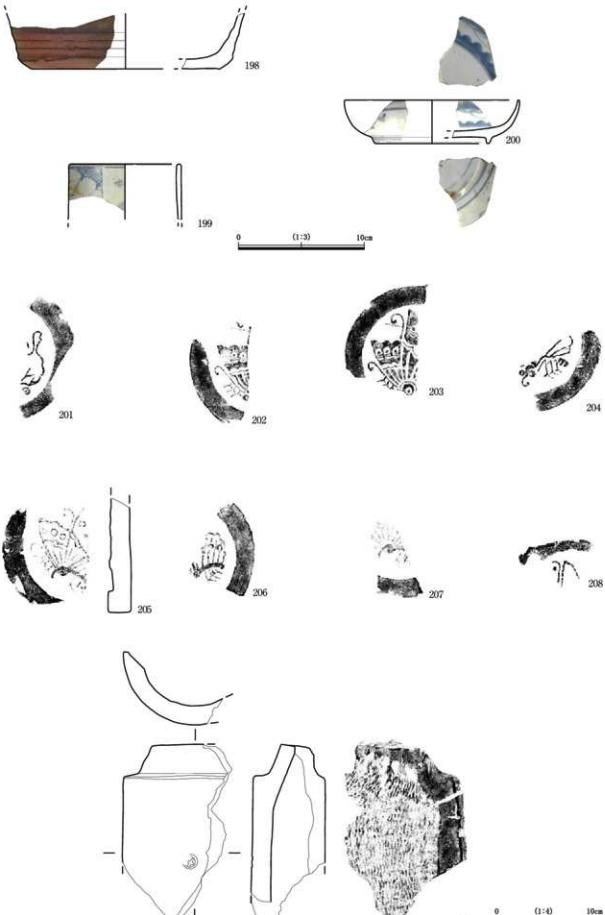


第69図　第50次調査第１トレンチ実測図

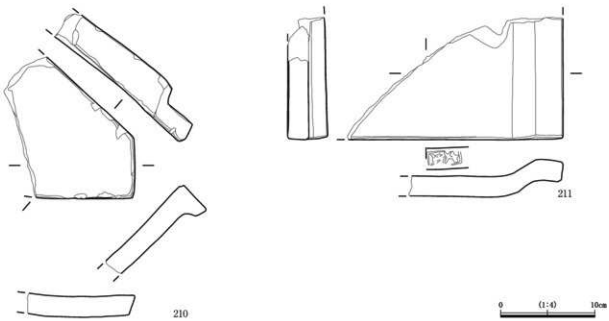
第２トレンチ(Tr2)

４．遺　構〔第72図、図版６〕

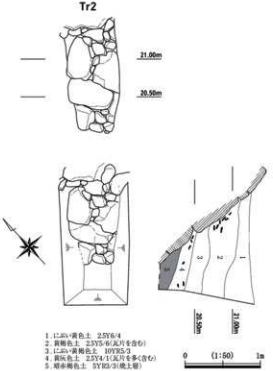
第１トレンチより北西方向へ11mの位置に設定した170×80cmのトレンチである。上面の標高は第１トレンチより２m程下った、標高21.2m付近にある。石垣は標高20.0m付近まで確認しており、付近が石垣底とみられる。中央付近は石材を縦位に使用しており、この２石は下部の石材より若干前方へ滑り出ている。全体的に間詰石が多い印象を受ける。



第70図　第50次調査第１トレンチ出土遺物実測図１



第71図　第50次調査第１トレンチ出土遺物実測図２

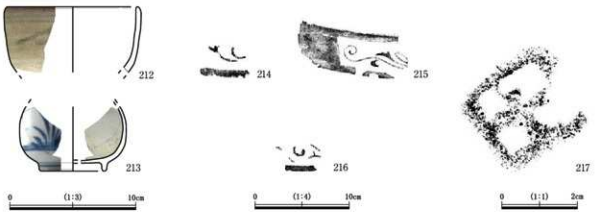


第72図　第50次調査第２トレンチ実測図

表土である１層下は傾斜に沿った斜め方向の層である。２層は厚さ40cmほどもあり瓦片を多く含む。３層を挟み４層もまた瓦片を多く含む層で５層は焼土層である。３層が幕末路盤面とも考えられるが、４層の瓦層をみても比較的新しい瓦が含まれるため確定には至らなかった。

５．遺　物　〔第73図〕

215・217は１ないしは２層、その他は３ないしは４層で多くは４層より出土した。212は肥前の陶器碗で表面は被熱のためか釉がとび、213は磁器瓶。214は平26型とした軒平瓦で、215は平96型、216は平97型、いずれも今回の調査で新たに確認した笵である。217は四菱である。



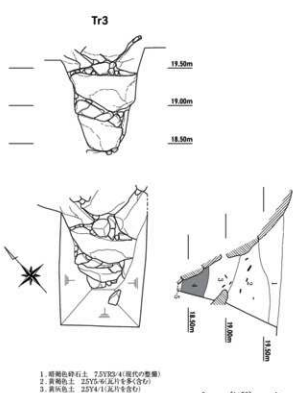
第73図　第50次調査第２トレンチ出土遺物実測図

第３トレンチ(Tr3)

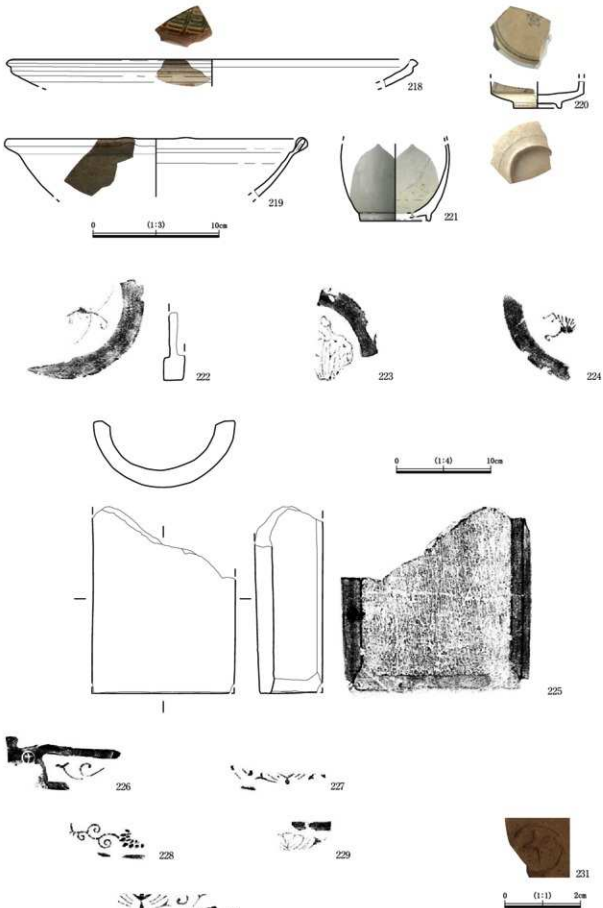
６．遺　構〔第74図、図版６〕

第２トレンチより北西方向へ13mの位置に設定した160×100㎝のトレンチである。石垣は大型の石材が２石あり、標高18.3m付近まで確認したが、さらに下部へと続くようである。

標高19.7m付近、地表下にある１層は表土である。２層は瓦片を多く含み、締まりのない層には19世紀代の遺物が含まれることから、城解体時およびその後に堆積した層と考えられる。その下、３層は上面が撹乱されているようで明確な硬化面はみられないものの、下部へかけて締まりのある土となり整地層状を呈するため幕末期路盤面の一部か。４層は焼土層が30㎝ほど厚く堆積する。最下層の５層からは第75図222の17世紀の螺文瓦が出土した。



第74図　第50次調査第３トレンチ実測図



第75図　第50次調査第３トレンチ出土遺物実測図

７．遺　物　〔第75図〕

主に２層からは224・230、２もしくは３層からは220・223・227～229、231、３層からは218・219、４層からは221・225・226、５層から222が出土した。218は肥前陶器の二彩手の大皿、219は陶器の鉢で220の磁器筒形碗は見込に五弁花がみられ、被熱の影響か釉が飛んでいる。221は磁器瓶。222～224は軒丸瓦で222は蝶６型、223は蝶14型、224は蝶７型、225は丸瓦、226～230は軒平あるいは軒桟瓦で226は軒平瓦の平26型、227と230は今回の調査で新たに見つかった平97型で桟の有無は不明である。228は花文の平63型の右軒桟瓦とみられる。229も今回の調査で新たに見つかった平96型である。

第４トレンチ(Tr4)

８．遺　構　〔第76図、図版６〕

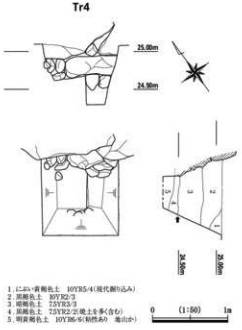
第50次調査区が並ぶ石垣面の南東端に位置し、二ノ丸へと上がる雁木脇に設定した100cm四方のトレンチである。最も高所に位置し、周辺地表面の標高は25.1m付近にある。

石垣をみると地表下に横長の石材を置き、その下に20cm程度の石を並べ、それ以下には石がみられないことから、これらが根石とみられ底部の標高は24.5mである。他トレンチと比べ石垣が深くまで続かず、下記の焼土を多く含む４層が下部に入り込むことから、当初からのものはなく、ある時点で新たに積まれた石垣と考えられる。

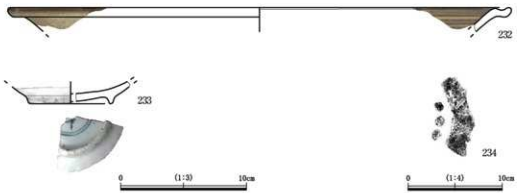
１層は現代撹乱層、２層は現表土であり、締まりがなく近現代堆積層とみられる。３層は締まりのある土で、根石上の横長の石材中位ほどに取りつくことから、近世層と考えられる。その下４層は焼土を多く含む層で、石垣根石下へと続く。最下層の５層は地山とみられる明るい色調の硬化面で４層同様石垣下へと続く。

９．遺　物　〔第77図〕

232は２層より出土した肥前陶器の大皿、233は３層直上より出土した肥前磁器の皿で高台内に「天下太平」を描く。234は巴文軒丸瓦で巴15型。



第76図　第50次調査第４トレンチ実測図



第77図　第50次調査第４トレンチ出土遺物実測図

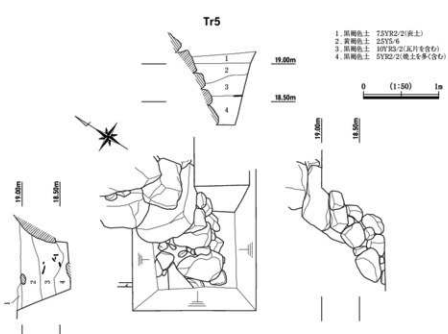
第５トレンチ(Tr5)

10. 遺　構　〔写真38、第78図、図版６〕

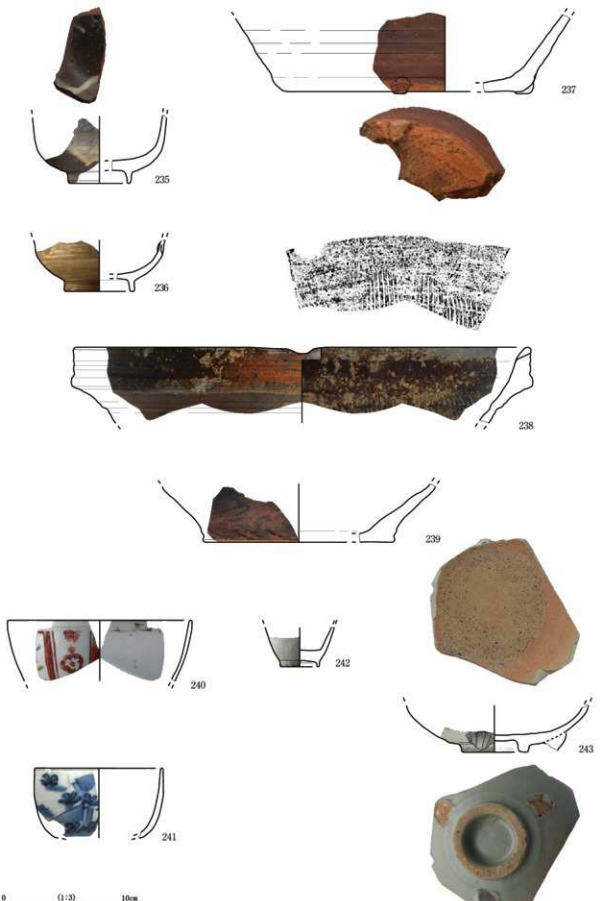
一連のトレンチの北西端、右膳丸へと上がる雁木脇の石垣角部に設定した1.6m四方のトレンチである。この石垣は、第１～３トレンチを設定した石垣面に取り付き、幅2.5m程の登り石垣状を構成しておりトレンチはその前面角に位置する。地表面の標高は19.1m前後である。

石垣は現地表付近に幅80cm、厚さ40cm程の扁平な石材を置き、上部は算木積みとなる。方形に近い形状のこの石より下は石材もやや小振りなものとなり積み方が異なる。下部は南西側トレンチ外へとさらに続くようであることから、本来別の石垣であったものを解体し、上部に積み足しを行い現状の登り石垣状としたと考えられる。石垣下部は18.2m付近までは確認したもののそれ以下まで続くようである。

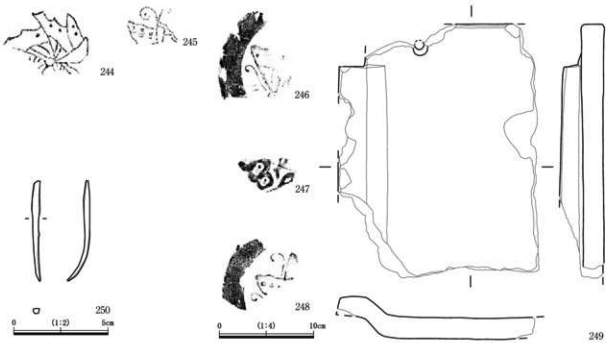
表土である１層下、標高19.0m付近にある２層は礫を多く含む近現代の層か。３層は瓦片を多く含み、４層は30cm以上も厚く堆積する層で焼土を多く含む土である。



第78図　第50次調査第５トレンチ実測図



第79図　第50次調査第５トレンチ出土遺物実測図１



第80図　第50次調査第５トレンチ出土遺物実測図２

11. 遺　物　〔第79・80図、図版12〕

237・241・243・248は１層、238・239・246・247は２層、235・236・240・245・249は３層、242・244・250は４層より出土した。235～239は陶器である。235・236は肥前の刷毛目碗で前者には鉄絵が描かれる。237は越前の鉢、238は備前の擂鉢で擂目は10条１単位である。239は越前の甕底部とみられ内外面には鉄泥が施される。240～243は肥前磁器である。240・241は碗で前者は色絵である。242は小坏、243青磁の香炉である。

244～247は軒丸瓦、248は鬼瓦の瓦当面である。244は最も古相の蝶１型、245は蝶７型、246は蝶13型、247は蝶15型、248は蝶９型である。249は右桟の目板瓦。250は鉄釘。

写真38　第５トレンチ遠景（南から）

第10節　第51次調査

１．概　要

調査期間　令和２年(2020)３月２～24日　面積：7.4㎡（Tr1:4.6㎡、Tr2:1.6㎡Tr3:1.2㎡）

鳥取城跡第51次調査は二ノ丸三階櫓脇、曲輪への入口となる裏御門を抜け雁木を上がった先に設定した３つのトレンチである。雁木より北西側は弘化４年(1847)に曲輪の拡張が許可されており、これ以前は存在しない部分であった。近世当時この拡張部分の中央付近には暗渠が埋設されており、北西端の石垣内より外側へ吐水する仕組みであった。しかし、現状吐水口はみえるものの、暗渠自体は埋没しており機能していない。近年の豪雨により、城内各所にそれまでなかった雨水の流路が形成されてしまっていることから、本来の水路の機能回復を検討する必要があり、旧水路の位置確認のために調査を実施することとなった。水路についての詳細な絵図はなく、曲輪内の何処を走っているか不明であったことから、現在舗装され園路となっている部分を避け山側に近い位置を調査した。

トレンチ調査の結果、探していた水路を検出することはできなかった。

第１トレンチ(Tr1)

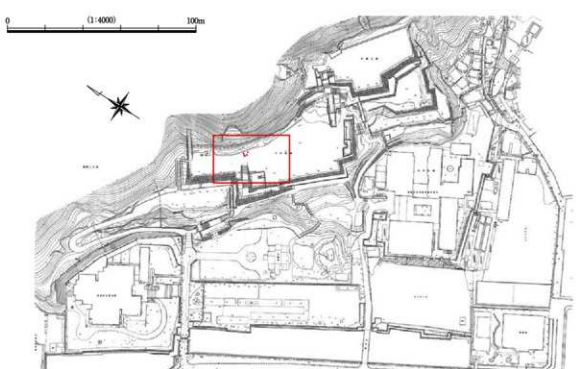
２．遺　構　〔第83図、図版６〕

4.7×1.5mのトレンチである。北東側にある１層は送水管埋設時の掘り方であり、２層は表土、３・４層は現代の公園整地層である。５～７層も近現代の堆積層とみられる。トレンチ南西側には対面する石がみられる。内寸40cmを測る石材間をみると北進する水路ともとれるが、石材の配置が一定しておらず、石上面に繋がる面もなかったことから石組水路と判断するには至らなかった。

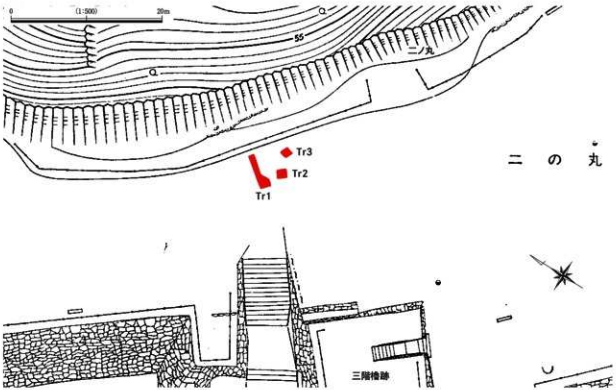
第２トレンチ(Tr2)

３．遺　構　〔第83図、図版７〕

第１トレンチの南東に設定した125cm四方のトレンチである。トレンチ内には北西－南東方向に走る溝を確認した。緑色凝灰岩製の溝は直方体に切り出された石材を並べたもので、幅11cmの側板間に底板



第81図　第51次調査区位置図



第82図　第51次調査トレンチ配置図

を敷いたもので内寸は25cmである。側板の側面には細かな調整痕が残るものの、上面は平滑に仕上げられていることから、蓋石が載っていたとみられる。側板の北西側には石材が数石みられ、側板を押さえるために置かれたと考えられる。南西側にはこれらに接続する板石があったとみられるが、撹乱のため残存しない。

１・２層は現代造成土で３は溝埋土、溝天端から続く４層は標高37.6m付近を上面とし締まりはないものの、上面に瓦片の散在が認められることから幕末路盤面である可能性がある。

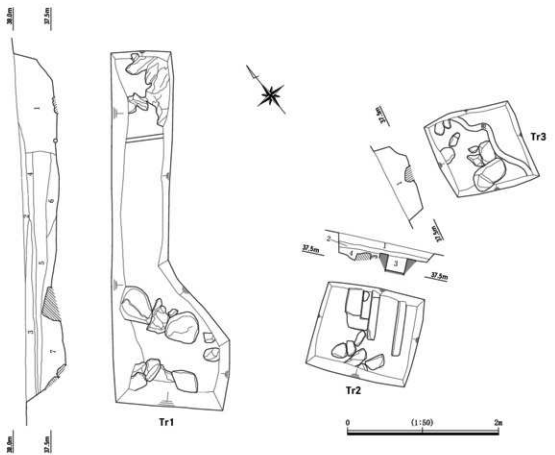
第３トレンチ(Tr3)

４．遺　構　〔第83図、図版７〕

第２トレンチの北東側に設定した110cm四方のトレンチである。37.8m付近にある地表面より30cm程掘り下げたが、現代撹乱とみられる１層内に石材が散乱する状況であり、遺構は確認できなかった為それ以下の調査は行わなかった。

５．遺　物　〔第84図〕

251は第２トレンチ掘り下げ中に出土した平91型の瓦である。



Tr1
1．黒褐色土　7.5YR3/2(法名管理土)
2．黒褐色土　7.5YR3/1(表土)
3．明黄褐色土　10YR6/6(現代公園整地)
4．黒褐色土　5YR5/6(現代公園整地)
5．明赤褐色土　7.5YR5/3
6．黒色土　7.5YR2/1(現象種)
7．黒褐色土　10YR2/2

Tr2
1．明黄褐色土　10YR6/6(現代公園整地)
2．黒褐色土　5YR5/6(現代公園整地)
3．黒褐色土　10YR2/2(漆喰土)
4．黒褐色土　10YR2/2(近世遺か)

Tr3
1．黒褐色土　7.5YR3/2(現代撹乱か)

第83図　第51次調査トレンチ実測図

第84図　第51次調査出土遺物実測図

第11節　第53次調査

１．概　要

調査期間　令和２年(2020)11月４～６日　面積：8.8㎡

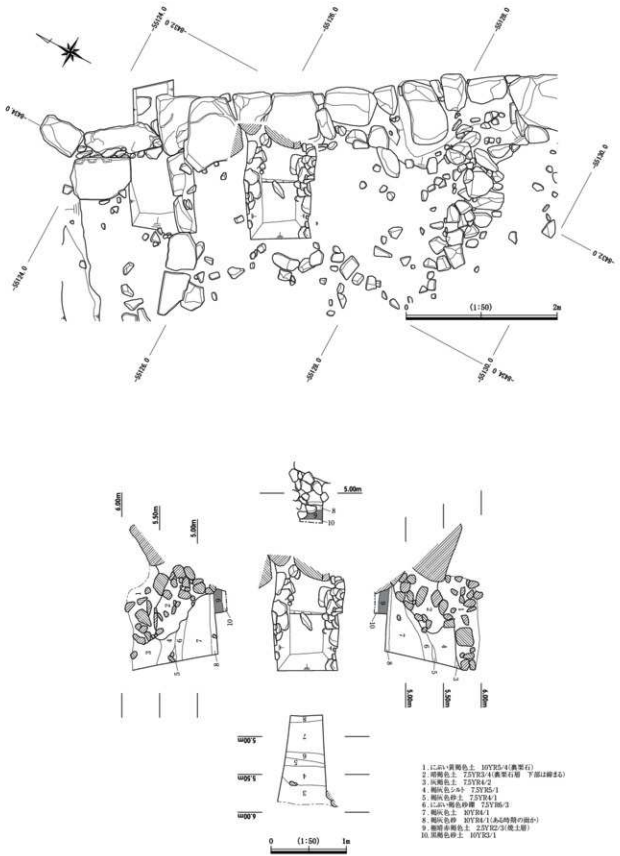
鳥取城跡第53次調査区は中ノ御門桝形石垣北東辺の雁木脇の石から数え２石と３石目の裏側に設定した150×100cmのトレンチである。これまでの調査の結果桝形石垣は、明治期に旧地表面付近で解体されていることが判明した。僅かに残存する石垣下部から当初の規模を想定することは可能であったが、内部の状況は不明であった。復元工事ではこの石垣上に再び石を積む計画となっていたことから当初の設置状況を確認する目的で調査した。

２．遺　構　〔第86図、写真39、図版７〕

残存する石垣の上面標高は5.7～5.8m付近にあり、背面側は5.9m前後にある。近代以降の土を除去した状態であり、石垣内部側には裏栗石とみられる拳～掌大の石が散見され、地点によっては密集するが、調査区付近では、主に土が露出する。

調査の結果、露出する石の下にもう１石存在することが判明した。正面側よりの確認でないため詳細な規模は不明ながら、２段が残存するようである。土層をみると、１層は露出する石垣の石尻付近へと続く層である。栗石層であるこの層は、３層を掘り込むものの、ほぼ同質であり４層以下とも土質が異なることから、一体的な層である可能性も残すが、現存しない上部の石垣を構築した際の層である。２層もまた石垣設置に伴う掘り方と裏栗石層である。斜め方向に４～９層までの70cm以上も大きく掘り込むこの層内には栗石が充填されており、石垣に向かい密度が高くなる。埋没する下段と合わせ石垣設置に伴う層である。明確な掘り方を持つが、修理等に伴う石垣解体再設置のための掘り方か、根石据え付けのための当初からの掘り方かの判別はつかない。４層は土質が変わりシルト層であり、砂礫主体の５・６層を挟み７層は40cm以上も厚く広がる。

第85図　第53次調査区位置図

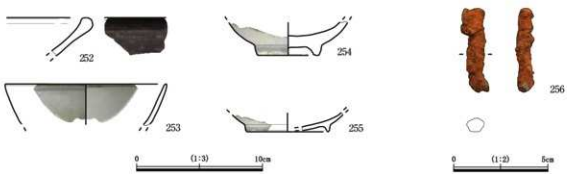


第86図　第53次調査区実測図

標高4.8m付近にある厚さ６～８㎝程度の８層は他層とは異なる砂層である。直下の標高4.7m付近にある９層は厚さ10㎝程度の焼土層であり、黒変した土から直接的に被熱した層とみられ、８層はこれらを覆い隠すように敷かれた新たな路盤面とも考えられる。

３．遺　物　〔第87図、図版12〕

252は９層か、253は２層、254は１層、255は７層、256は堆木上の幕末路盤面付近より出土した。



第87図　第53次調査出土遺物実測図

写真39　第53次調査区遠景（北西から）

第12節　鳥取城跡土壌分析業務報告

土 壌 分 析 業 務 報 告

鳥取城跡第 52 次発掘調査

鳥 取 市 教 育 委 員 会

株式会社 古環境研究所
Paleoenvironment Research Institute Co.,Ltd.

鳥取城跡土壌分析業務報告

株式会社古環境研究所

１．はじめに

鳥取城跡第 52 次発掘調査では、中ノ御門表門の礎石直下より埋桶が出土した。出土状況から、当該遺構が当時の便槽である可能性が想定された。そこで、埋桶内の堆積土を対象として寄生虫卵分析、花粉分析、種実同定、動物遺存体同定、昆虫同定を実施することになった。

２．試料

分析試料は、中ノ御門表門の礎石直下より出土した埋桶内最下層の堆積物である。分析に用意された堆積物は２袋あり、便宜上、試料１、試料２とした。それぞれを観察したところ様相が異なっており、試料２は水分を多く含んでいた。

３．寄生虫卵分析・花粉分析

３-1．方法

寄生虫卵・花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

１）試料から１cm^3を採量
２）0.5%リン酸三ナトリウム（12 水）溶液を加え 15 分間湯煎
３）篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す
４）25%フッ化水素酸を加え 30 分静置（２・３度混和）
５）水洗後サンプルを２分
６）２分したサンプルの一方にアセトリシス処理を施す
７）両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製
８）検鏡は、プレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって 300～1000 倍で行う

基本的にアセトリシス処理を施したプレパラートで花粉分析、アセトリシス処理を施していないプレパラートで寄生虫卵分析を行う。以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、２分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）を参考として、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示す。イネ属については、中村（1974，1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。なお、花粉分類では樹木花粉（AP）および非樹木花粉（NAP）となるが非樹木花粉（NAP）は草本花粉として示した。

３-2．分析結果

寄生虫卵分析の結果を表１、図１に、花粉分析の結果を表１、図２に示す。主要な分類群の顕微鏡写真を図版１・２に示した。

（１）寄生虫卵分析

１）分類群

分析の結果、回虫卵、鞭虫卵、肝吸虫卵、横川吸虫－異形吸虫類卵の４分類群が検出され、消化残渣も認められた。以下に検出された分類群を記載する。

・回虫　*Ascaris　lumbricoides*

回虫卵は、比較的大きな虫卵で、およそ80×60μmあり楕円形で外側に蛋白膜を有し、胆汁色素で黄褐色ないし褐色を呈する。糞便とともに外界に出た受精卵は、18日で感染幼虫包蔵卵になり経口摂取により感染する。回虫は、世界に広く分布し、現在でも温暖・湿潤な熱帯地方の農村地帯に多くみられる。

・鞭虫　*Trichuris　trichiura*

卵の大きさは、50×30μmでレモン形あるいは岐阜ちょうちん形で、卵殻は厚く褐色で両端に無色の栓がある。糞便とともに外界に出た虫卵は、３～６週間で感染幼虫包蔵卵になり経口感染する。鞭虫は、世界に広く分布し、現在ではとくに熱帯・亜熱帯の高温多湿な地域に多くみられる。

・肝吸虫　*Clonorchis　sinensis*

卵の大きさは、およそ30×16μmでなすび型で一端に陣笠状の小蓋を有する。卵殻の表面には亀甲状の紋理を認める。糞便とともに外界に出た虫卵は、水中で第１中間宿主のマメタニシに食べられ、セルカリアになり水中に遊出し、第２中間宿主のモツゴ、モロコ、コイ、フナ、タナゴに侵入してメタセルカリアとなり、魚肉とともにヒトに摂取され感染する。肝吸虫は、アジア地域に広く分布し、特に中国、日本、ベトナム、韓国に多い。日本では岡山県南部、琵琶湖沿岸、八郎潟、利根川流域などが流行地として知られている。

・横川吸虫－異形吸虫類　*Metagonimus　yokogawai－Heterophyes*

卵はおよそ27×17μmで、短楕円形または卵形、一端に小蓋を有するが、卵殻との境がほとんど突出せずスムーズである。卵殻表面は平滑で紋理はみられない。日本各地でみられる横川吸虫や、瀬戸内海沿岸に多く、その他海に近い地域にかなり広く見られる有害異形吸虫は、中間宿主が異なるだけで発育史をはじめ形態なども良く似ている。横川吸虫ではアユとシラウオ、有害異形吸虫では沿岸魚の生食により魚肉とともにヒトに摂取され感染する。遺跡においては、小蓋がとれたり、堆積環境や薬品処理などにより横川吸虫卵と有害異形吸虫卵の区別はつきにくく、異形吸虫類とする。

２）寄生虫卵の特徴

分析の結果、試料１では、2.5×10^4個、試料２では、1.6×10^4個の寄生虫卵が検出された。これは金原(1992)の寄生虫卵密度が10×10^3個以上であれば糞便ないし糞便の混入のある堆積物であるとする密度以上であり、試料は糞便の堆積物であるとみなされる。中間宿主を必要とせず、汚染された生水や生野菜などから直接経口感染する回虫卵、鞭虫卵の占める割合が高く、アユ、コイ科の淡水魚を介して感染する肝吸虫卵、横川吸虫－異形吸虫類卵も検出される。

（２）花粉分析

１）分類群

産出した分類群は、樹木花粉17、木本花粉と草本花粉を含むもの１、草本花粉17、シダ植物胞子２形態の計37である。以下に産出した分類群を記載する。

〔木本花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ

属－ケヤキ、モチノキ属、ツツジ科、タニウツギ属
〔木本花粉と草本花粉を含むもの〕
クワ科－イラクサ科
〔草本花粉〕
オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、スベリヒユ属、キンポウゲ属、アブラナ科、チドメグサ亜科、ヒルガオ、シソ科、キク亜科、ヨモギ属、ベニバナ
〔シダ植物胞子〕
単条溝胞子、三条溝胞子
２）花粉群集の特徴
いずれの試料も草本花粉が約 95%を占め、イネ科およびイネ属型の占める割合が極めて高く、比較的花粉密度が高い割に出現する分類群の種類が少ない。また、雑穀を含むイネ科、イネ属型（イネ）をはじめソバ属、アカザ科－ヒユ科、スベリヒユ属、アブラナ科、シソ科、ベニバナ、クワ科－イラクサ科など食用ないし薬用になる分類群が多い。樹木花粉の占める割合は、低率で、スギ、マツ属複維管束亜属、ハンノキ属、ブナ属などがわずかに検出される。樹木花粉の占める割合が極めて低く、雑草類の花粉も少ないことから、周辺の植生を反映したものではなく、遺構内の堆積環境を反映したと考えられる。

3-3. 花粉・寄生虫分析から推定される環境
回虫卵、鞭虫卵、肝吸虫卵、横川吸虫－異形吸虫類卵が検出され、汚染された食物や飲み水、アユ、コイ科の淡水魚の摂食が示唆される。異形吸虫類は、青魚などの沿岸魚の摂食によって感染することから、これらの魚類を日常的に摂食していたとみなされる。また、花粉分析の結果からイネ、雑穀、ソバ、アブラナ科、シソ科を食用とし、アカザ科－ヒユ科、ベニバナを薬用として利用していたことが推定される。
スギ、マツ属複維管束亜属、ハンノキ属、ブナ属などの木本花粉が低率に産出するが、いずれも風媒花植物であることから、周辺または地域に生育していたものが混入したか、花粉が飛来し飲み水や食物とともに摂食された可能性も考えられる。
また、環境や状態を調べるため珪藻分析を追加し、観察された結晶についても検討を行った。
珪藻分析は、試料から 1 cm^3 を採量、10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら２晩放置、水洗の後プレパラート作製、計数する。結果、貧塩性種（淡水生種）73 分類群が検出され、付表、付図示す。試料 1、2 において、珪藻の組成および構成は類似した産出傾向を示す。流水不定性種の占める割合がやや高く、次いで陸生珪藻が多い。出現率が高いのは、好止水性種の *Cyclotella meneghiniana* の *Achnanthes minutissima*、流水不定性種の *Achnanthes hungarica*、*Navicula veneta*、*Nitzschia palea* である。他に好流水性種の *Surirella angusta*、*Gomphonema parvulum* が産出する。これは、流水の影響を受ける比較的浅い不安定な溜まりから湿った土壌の堆積環境であったと推定される。これらのほとんどが真・好アルカリ性種であり、アルカリ性の曖昧な水域が示唆された。
また、計数の過程で試料２の標本中に特徴的な針状結晶が認められ、寄生虫卵分析から糞便の堆積であるとみなされたため、尿の成分で混濁尿の原因になる結晶成分ではないかと推定し、試験的に混濁尿の鑑別法を以下の手順で行った。結果を写真に示す。
①加温・・・・・・・・・・・・結晶が消失すれば尿酸塩

②３％酢酸を数滴加える・・・・気泡を出して消失すれば炭酸塩、そのまま消えればリン酸塩
③10％塩酸を数滴加える・・・・結晶が消失すればシュウ酸カルシウム

結果は、写真に示したように、手順③の10％塩酸を添加したら針状結晶は消失したので、シュウ酸カルシウム結晶である可能性が示唆された。尿の存在を証明するためには、アンモニアを検出しなければならないが、シュウ酸カルシウムも尿中に含まれる成分であり、消極的には尿の存在が指摘でき、埋桶がトイレ遺構であることを補足する。

3-4．まとめ

中ノ御門表門の礎石直下より出土した埋桶内最下層の堆積物を各分析で検討した結果、寄生虫卵密度が高く、食用となる植物の花粉が多く、堆積物が糞便の累積または糞便を多く含む堆積であることが示唆された。また、追加で行った珪藻分析結果からアルカリ性の堆積環境であり、シュウ酸カルシウムの針状結晶が検出され、尿の存在が示唆された。中ノ御門表門の礎石直下より出土した埋桶内最下層の堆積物は糞尿の堆積であると推定され、便所遺構である傍証になろう。食物としては、寄生虫卵の感染関係から、施肥などによって汚染された穀類や野菜および飲み水、アユやコイ科の淡水魚、沿岸魚の摂食が示唆された。花粉分析からは、イネ、雑穀、ソバ（ソバ属）、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、シソ科、ベニバナ、クワ科－イラクサ科など食用ないし薬用になる植物の摂取が示唆された。特にイネ属型とイネ科の花粉が多く、イネ（コメ）および雑穀がよく食され、またこれらは籾内に花粉が多く残存し果実に付着するため、あまり水洗いせずに炊き食べていたと推定される。

4．種実・動物遺存体・昆虫同定

4-1．方法

堆積物を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、植物遺存体、動物遺存体を抽出する。それぞれ形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

4-2．結果

種実・動物遺存体・昆虫同定の結果を表２に示す。主要な分類群の写真を図版３・４に示した。

（１）種実

木本４、草本12の計16分類群が同定された。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

〔樹木〕

コナラ属　*Quercus*　堅果（破片）　ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、表面は平滑である。この分類群は殻斗欠落し破片のため、属レベルの同定までである。

ウメ　*Prunus mume* S. et Z.　核　バラ科

茶褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が走る。表面には小孔が散在する。

キイチゴ属　*Rubus*　核　バラ科

淡褐色でいびつな半円形を呈す。表面には大きな網目模様がある。

カキノキ属　*Diospyros*　種子　カキノキ科

黒褐色で非対称的広倒卵形を呈し、偏平である。直線状の腹面は稜をなす。

〔草本〕

イネ　*Oryza　sativa*　L.　穎　イネ科

穎は茶褐色で扁平楕円形を呈し、下端に枝梗が残る。表面には微細な顆粒状突起がある

エノコログサ属（アワを含む）　*Setaria*　穎　イネ科

穎は茶褐色で楕円形を呈す。表面には横方向の微細な隆起がある。やや縦長のエノコログサ属としては大きな果実でエノコログサに似る。アワは円形に近いが、地域によって変異があるため、アワが含まれるかアワである可能性がる。

ヒエ　*Echinochloa　utilis*　Vigna　果実　イネ科

茶褐色で楕円形を呈す。表面には微細な縦方向の模様がある。

ホタルイ属　*Scirpus*　果実　カヤツリグサ科

黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起があり、基部に4～8本の針状の付属物を持つ。

スゲ属　*Carex*　果実　カヤツリグサ科

茶褐色で倒卵形、扁平である。果皮は柔らかい。

タデ属　*Polygonum*　果実　タデ科

黒褐色で頂端の尖る広卵形を呈す。断面は三角形、表面には光沢がある。

アカザ属　*Chenopodium*　種子　アカザ科

黒色で光沢があり円形を呈し、片面の中央から周縁まで浅い溝が走る。

スベリヒユ　*Portulaca　oleracea*　L.　種子　ヒユスベリ科

灰黒色でやや光沢があり、広倒卵形や広倒卵状円形を呈する。一ヶ所が切れ込み、へそがある。へその一端はやや突出する。

エゴマ　*Perilla　frutescens*　var.　*japonica*　Hara　果実　シソ科

黒褐色～灰褐色で球形を呈し、下端はわずかに突出する。表面に大きい網目模様がある。

シソ属　*Perilla*　果実　シソ科

茶褐色で球形を呈し、下端にへそがある。表面には大きい網目模様がある。

ナス　*Solanum　melongera*　L.　種子　ナス科

黄褐色で扁平楕円形を呈し、一端にくぼんだへソがある。表面には網目模様がある。

ウリ類　*Cucumis　melo*　L.　種子　ウリ科

淡褐色～黄褐色で長楕円形を呈し、上端は「ハ」字状にくぼむ。

（２）動物遺存体

アユ椎骨３点、硬骨魚綱椎骨７点、硬骨魚綱刺状突起２点、硬骨魚綱不明破片50点、ネズミ科胸椎１点が同定された。

（３）昆虫

コウチュウ目１科１属、ハエ目５科１属の計６分類群が同定された。

〔産出部位〕

後胸腹板１点、蛹15点、その他破片

4-3. 考察

（1）種実

木本種実のコナラ属、ウメ、キイチゴ属、カキノキ属、草本種実のイネ、ヒエ、エノコログサ属（アワを含む）、エゴマ、シソ属、ナス、ウリ類は食用となり、ウメ、カキノキ属、、イネ、ヒエ、エノコログサ属（アワを含む）は栽培植物である、またエゴマ、シソ属は採取されたもしくは栽培の可能性も考えられる。ホタルイ属、スゲ属は水生植物であり、タデ属、アカザ属、スベリヒユは畑や集落のやや乾燥した人為地に生育する。

（2）動物遺存体

同定されたのはアユや硬骨魚綱およびネズミ科の２種類である。アユは稚魚期を海で過ごし、初春に川をさかのぼり、急流に生息する降海型の魚である。珪藻を食べるため肉に香気があり、香魚と呼ばれる。アユの漁獲は古くから簗や毒流しによって行われたが、江戸時代にはどぶ釣り、友釣りが行われる。鳥取県では現在でも千代川でアユが漁獲され、河原町によるアユ釣りが有名である。硬骨魚綱はサメやエイの軟骨魚綱を除くほとんどの魚類が含まれ、淡水魚ではコイ科が代表的である。ネズミ科は下水のまわりや河川、河原の土手、湿地などの湿った土地に生息する。また、建物内や畑の周辺などにも生息し、人家から離れた土地ではあまり見ない。アユおよびその他の硬骨魚綱は食用としたものの残滓と考えられる。ネズミ科は食用とする場合もあるが、椎骨１点のみのため、周辺に生息していたネズミの死骸由来や投棄されたなどが考えられる。

（3）昆虫

同定されたコウチュウ目のエンマコガネ属は動物の糞を食す糞食性である。ハエ目のコウカアブ属、ヒメイエバエ科？、クロバエ科？、ニクバエ科？は動物の糞や腐敗した動物質などを食し、ヒトの生活圏内に生育する。ショウジョウバエ科？は果物類や樹液が発酵したものを食す。いずれも人間のトイレ遺構やゴミ捨て場遺構との関連が考えられる種である。

4-4. まとめ

同定の結果、樹木種実のコナラ属、ウメ、キイチゴ属、カキノキ属、草本種実のイネ、ヒエ、エノコログサ属（アワを含む）、エゴマ、シソ属、ナス、ウリ類、動物遺存体のアユおよびその他のコイ科などの硬骨魚綱類は食用としたものの残滓と考えられる。以上の結果は寄生虫卵分析および花粉分析の結果とも整合性をもつ。昆虫のエンマコガネ属、コウカアブ属、ショウジョウバエ科？、ヒメイエバエ科？、クロバエ科？、ニクバエ科？、動物依存体のネズミ科は糞や廃棄された食物残渣を食すために当遺構周辺に生息していたと考えられる。以上のことから中ノ御門表門の礎石直下より出土した埋桶の堆積物は食物残滓を含みまた食用ゴミも捨てられており、便所遺構である傍証となる。またスゲ属、タデ属、アカザ属、スベリヒユは周辺に生育し落ち込んだと考えられる。

参考文献

中村純（1967）花粉分析．古今書院，p. 82-102.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.
中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，p. 187-193.
中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第 10 号，p. 21-30.
中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集，91p.
金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第 10 巻古代資料研究の方法，角川書店，p. 248-262.
Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard（1992）Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils.Jounal of Archaeological Science，19, p.231-245.
金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物．医動物学，新版臨床検査講座，8，医歯薬出版，p. 9-55.
金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫．藤原京跡の便所遺構－藤原京７条１坊－，奈良国立文化財研究所，p. 14-15.
金原正明（1999）寄生虫．考古学と動物学，考古学と自然科学，２，同成社，p. 151-158.
金原正明・福富恵津子・金原正子（2005）糞石の基礎的研究，日本文化財科学会，第 22 回，p. 118-119.
金原正明・金原正子（1993）石棺内の花粉分析および消化管内残渣の分析．斑鳩藤ノ木古墳第二・三次調査報告書，奈良県立橿原考古学研究所，p. 18-26.
Hustedt,F.(1937-1938)Systematische und ologishe Untersuchungen uber die DiatomeenFlora von Java,Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch.Hydrobiol,Suppl.15,p.131-506.
Lowe,R.L.(1974)Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Reserch.Center.
K. Krammer・H.Lange-Bertalot(1986-1991) Bacillariophyceae,vol.2,no.1-no.4
Asai,K.&,Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relaiting to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,p.35-47.
安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用．東北地理，42，p. 73-88.
伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，6，p. 23-45.
小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－．植生史研究，第１号，植生史研究会，p. 29-44.
小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p. 1-20.
渡辺仁治（2005）淡水珪藻生態図鑑　群集解析に基づく汚濁指数 DAIpo, pH 耐性能．内田老鶴圃，666p.
笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.
笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類．弥生文化の研究第２巻生業，雄山閣　出版，p. 131-139.
南木睦彦（1991）栽培植物．古墳時代の研究第４巻生産と流通Ⅰ，雄山閣出版株式会社，p. 165-174.
南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p. 276-283.
吉崎昌一（1992）古代雑穀の検出．月刊考古学ジャーナル No. 355，ニュー・サイエンス社，p. 2-14.
藤下典之（1982）菜畑遺跡から出土したメロン仲間 *Cucumis melo* L.とヒョウタン仲間 ***Lagenaria siceraria Standl.***の種子について．唐津市文化財調査報告第５集菜畑遺跡，唐津市教育委員会，p. 455-463.
藤下典之（1992）出土種子からみた古代日本のメロンの仲間、その種類、渡来、伝搬、利用について．考古学ジャーナル No. 354，ニュー・サイエンス社，p. 7-13.
安部永（1994）日本の哺乳類，東海大学出版会，195p.

望月賢二（2005）魚と貝の辞典，魚類文化研究会，柏書房，497p.
伊藤哲郎（2005）日本産幼虫図鑑，学研教育出版，336p.

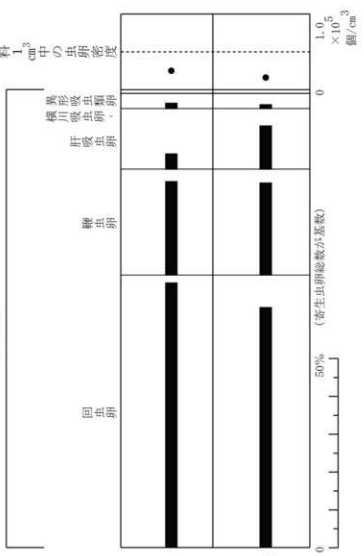


図１　島原城跡第52次発掘調査（中ノ御門表門　礎石直下）
埋桶内最下層における寄生虫卵ダイアグラム

表１　鳥取城跡跡第52次発掘調査における寄生虫卵・花粉分析結果

Taxa（分類群）		埋積内 最下層	
Scientific name（学名）	Japanese name（和名）	1	2
Parasite eggs	寄生虫卵		
Ascaris(lumbricoides)	回虫卵	907	529
Trichuris(trichiura)	鞭虫卵	321	203
Clonorchis sinensis	肝吸虫卵	52	95
Metagonimus yokogawai-Heterophyes	横川吸虫卵－異形吸虫類卵	18	8
Total	計	1298	835
Parasite eggs frequencies of 1cm^3	試料1cm^{3}中の寄生虫卵密度	2.5 ×10^4	1.6 ×10^4
Stone cell	石細胞	(−)	(−)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(+)	(+)
Charcoal・woods fragments	微細炭化物・微細木片	(+)	(+)
Arboreal pollen	樹木花粉		
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	3	3
Cryptomeria japonica	スギ	6	1
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		1
Salix	ヤナギ属		1
Juglans	クルミ属		1
Alnus	ハンノキ属	2	1
Betula	カバノキ属	2	
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ		1
Castanea crenata	クリ		2
Castanopsis	シイ属	1	
Fagus	ブナ属	2	1
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	2	
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	2	1
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ	1	
Ilex	モチノキ属		1
Ericaceae	ツツジ科		1
Weigela	タニウツギ属		1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉		
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	8	1
Nonarboreal pollen	草本花粉		
Sagittaria	オモダカ属	2	
Gramineae	イネ科	259 *	222 *
Oryza type	イネ属型	170	192 *
Cyperaceae	カヤツリグサ科	2	5
Polygonum	タデ属	1	
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節		3
Fagopyrum	ソバ属	3	2
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	17	16
Portulaca oleracea	スベリヒユ属	5	1
Ranunculus	キンポウゲ属	1	
Cruciferae	アブラナ科	6	6
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	12	
Calystegia japonica	ヒルガオ	1	
Labiatae	シソ科		1
Asteroideae	キク亜科	5	
Artemisia	ヨモギ属	4	3
Carthamus tinctorius	ベニバナ		1
Arboreal pollen	樹木花粉	21	16
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	8	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	488	452
Total pollen	花粉総数	517	469
Pollen frequencies of 1cm^3	試料1cm^{3}中の花粉密度	4.7 ×10^4	4.3 ×10^4
Unknown pollen	未同定花粉	4	1
Fern spore	シダ植物胞子		
Monolate type spore	単条溝胞子	1	1
Trilate type spore	三条溝胞子		2
Total Fern spore	シダ植物胞子総数	1	3
微細植物遺体(Charcoal・woods fragments)	(×10^5)		
未分解遺体片		5.9	5
分解質遺体片		8.9	8.9
炭化遺体片(微粒炭)			

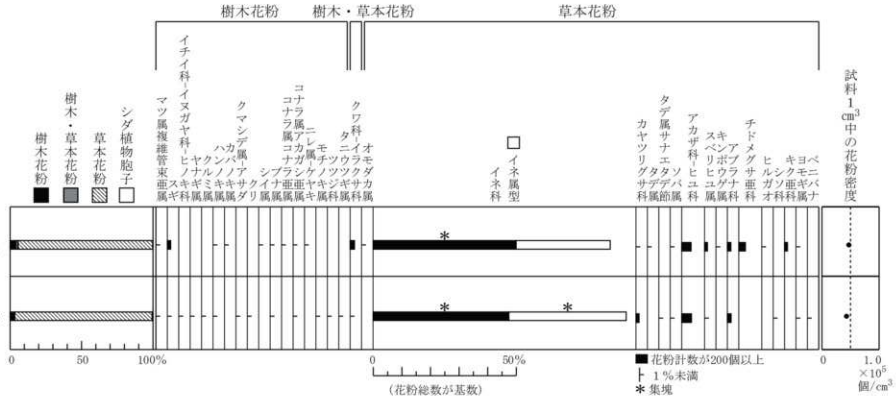
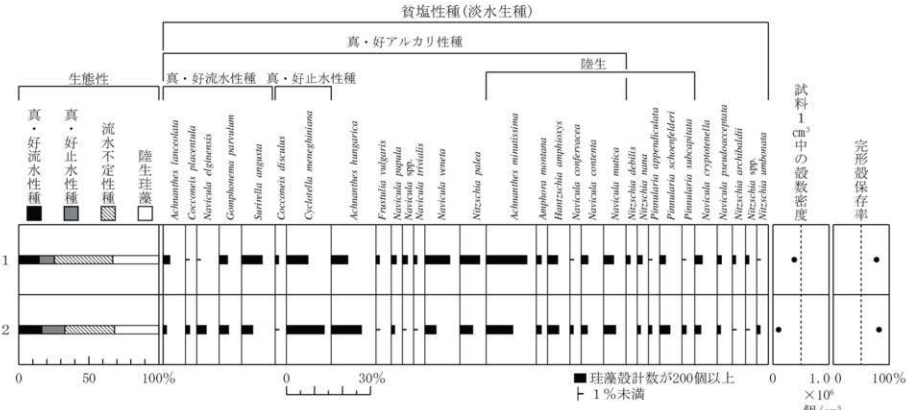


図２　鳥取城跡第52次発掘調査（中ノ御門表門 礎石直下）：埋桶内最下層における花粉ダイアグラム

付表　鳥取城跡第52次発掘調査における珪藻分析結果

分類群	埋桶内 最下層	
	1	2
貧塩性種（淡水生種）		
Achnanthes crenulata		1
Achnanthes hungarica	20	35
Achnanthes lanceolata	8	4
Achnanthes minutissima	49	31
Amphora copulata	3	1
Amphora fontinalis		1
Amphora montana	6	6
Aulacoseira ambigua		1
Aulacoseira crenulata		1
Caloneis bacillum	1	
Caloneis silicula		1
Cocconeis disculus	4	2
Cocconeis placentula	2	5
Cyclotella meneghiniana	26	44
Cymbella gracilis	1	
Cymbella naviculiformis	2	2
Cymbella silesiaca	2	1
Cymbella sinuata	1	
Cymbella turgidula		3
Diatoma mesodon		1
Diploneis elliptica		1
Eunotia bilunaris	1	
Eunotia paludosa-rhomboidea		1
Fragilaria capucina	1	1
Fragilaria ulna		1
Frustulia vulgaris	4	1
Gomphonema angustatum		1
Gomphonema gracile		1
Gomphonema minutum		3
Gomphonema parvulum	10	11
Gomphonema pseudaugur	2	1
Gomphonema sphaerophorum	2	1
Gomphonema spp.		3
Gyrosigma spp.	1	
Hantzschia amphioxys	12	13
Navicula capitata		1
Navicula confervacea	2	4
Navicula contenta	8	7
Navicula cryptocephala		1
Navicula cryptotenella	9	7
Navicula cuspidata		1
Navicula elginensis	2	11
Navicula goeppertiana	1	1
Navicula kotschyi	2	1
Navicula laevissima	3	1
Navicula mutica	12	14
Navicula pseudoacceptata	5	4
Navicula pupula	6	4
Navicula trivialis	4	3
Navicula veneta	30	13
Navicula spp.	6	1
Neidium affine		1
Neidium ampliatum	1	

Nitzschia archibaldii	4	2
Nitzschia clausii	1	1
Nitzschia debilis	5	
Nitzschia levidensis	1	1
Nitzschia nana	6	4
Nitzschia palea	24	15
Nitzschia umbonata	2	4
Nitzschia spp.	4	1
Pinnularia appendiculata	1	4
Pinnularia divergens	1	
Pinnularia microstauron		2
Pinnularia obscura	1	2
Pinnularia schoenfelderi	7	12
Pinnularia subcapitata	2	5
Pinnularia spp.		1
Rhoicosphenia abbreviata		1
Rhopalodia gibberula	2	
Surirella angusta	25	13
Surirella ovata	1	3
Synedra ulna	1	
合　計	337	325
未同定	15	12
破片	102	73
試料１cm^3中の殻数密度	3.8 $\times 10^5$	1.0 $\times 10^5$
完形殻保存率（%）	77.5	82.2
針状結晶	わずか	(++)



付図　鳥取城跡跡第52次発掘調査（中ノ御門表門 礎石直下）：埋桶内最下層における主要珪藻ダイアグラム

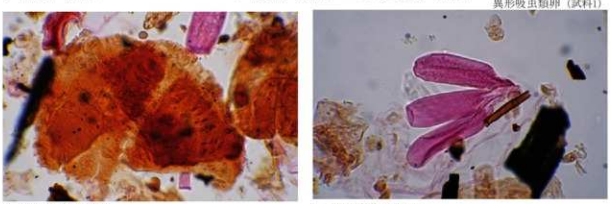
表２　鳥取城跡第52次発掘調査における種実・動物遺存体・昆虫同定結果

分類群 学名	和名	部位		埋桶内最下層	備考
Seedes	種実				
Arbor	樹木				
Quercus	コナラ属	堅果	破片	1	
Prunus mume S. et Z.	ウメ	核		4	
Rubus	キイチゴ属	核		4	
Diospyros	カキノキ属	種子		1	
Herb	草本				
Oryza sativa L.	イネ	穎		16	
			破片	(+)	
Setaria	エノコログサ属（アワを含む）	穎		57	
Echinochloa Ohwi et Yabuno	ヒエ	穎		54	
Scirpus	ホタルイ属	果実		2	
Carex	スゲ属	果実		6	
			破片	1	
Polygonum	タデ属	果実		2	
Chenopodium	アカザ属	種子		32	
Portulaca oleracea L.	スベリヒユ	種子		2	
Perilla frutescens var. *japonica* Hara	エゴマ	果実	破片	1	
Perilla	シソ属	果実		1	
Solanum melongena L.	ナス	種子		20	
Cucumis melo L.	ウリ類	種子		306	
			破片	2	
Total	合計			512	
Animalia	動物界				
Plecoglossus altivelis	アユ	椎骨		3	
Osteichthyes	硬骨魚綱	椎骨	破片	7	
Osteichthyes	硬骨魚綱	刺状突起		2	
Osteichthyes	硬骨魚綱	不明破片	破片	50	
Muridae	ネズミ科	椎骨（胸椎）		1	
Total	合計			63	
Coleoptera	コウチュウ目				
Scarabaeidae	コガネムシ科				
Onthophagus sp.	エンマコガネ属	後胸腹板		1	
Diptera	ハエ目				
Stratiomyidae	ミズアブ科				
Ptecticus	コウカアブ属	蛹	破片	7	4個体分
Drosophilidae?	ショウジョウバエ科？	蛹	破片	3	
Fanniidae?	ヒメイエバエ科？	蛹	破片	1	
Calliphoridae	クロバエ科	蛹	細片	(+)	
Sarcophagidae?	ニクバエ科？	蛹	破片	4	
Unknown	不明	蛹	細片	(+)	

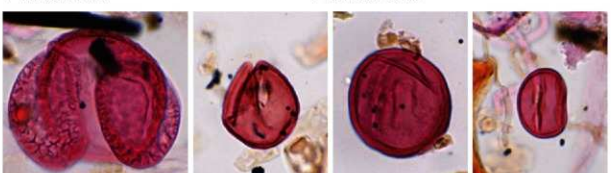
図版１　鳥取城跡跡第52次発掘調査（中ノ御門表門 礎石直下）の寄生虫卵・花粉化石 Ⅰ

埋桶内 最下層　　※()内は、検出箇所

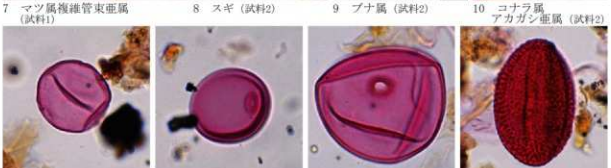
1　回虫卵（試料2）　2　鞭虫卵（試料1）　3　肝吸虫卵（試料2）　4　横川吸虫卵−異形吸虫類卵（試料1）



5　消化残渣（試料1）　6　消化残渣（試料2）



7　マツ属複維管束亜属（試料1）　8　スギ（試料2）　9　ブナ属（試料2）　10　コナラ属アカガシ亜属（試料2）



11　クワ科−イラクサ科（試料2）　12　イネ科（試料2）　13　イネ属型（試料1）　14　ソバ属（試料2）

1-4, 6-14 ―― 10μm　5 ―― 10μm

図版２　鳥取城跡跡第52次発掘調査（中ノ御門表門 礎石直下）の寄生虫卵・花粉化石 Ⅱ

埋桶内 最下層　　※()内は、検出箇所

15　アカザ科-ヒユ科16　スベリヒユ属（試料1）（試料2）　17　ヨモギ属（試料2）　18　ベニバナ（試料1）　10μm

結晶鑑別処理

① 原液（試料2）

② 3%酢酸添加後

③ 3%酢酸、10%塩酸添加後

図版３　鳥取城跡第52次発掘調査（中ノ御門表門 礎石直下）の動・植物遺存体 Ⅰ
埋桶内最下層

1　ウメ核　5.0mm

2　キイチゴ属核　1.0mm

3　カキノキ属種子　5.0mm

4　イネ頴　1.0mm

5　イネ頴　1.0mm

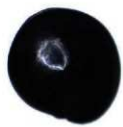
6　エノコログサ属（アワ含む）頴　1.0mm

7　ヒエ頴　1.0mm

8　ホタルイ属果実　1.0mm

9　スゲ属果実　1.0mm

10　タデ属果実　1.0mm



11　アカザ属種子　0.5mm

12　スベリヒユ種子　0.5mm

13　エゴマ果実　1.0mm

14　シソ属果実　1.0mm

15　ナス種子　1.0mm

16　ウリ類種子　1.0mm

図版４　鳥取城跡第52次発掘調査（中ノ御門表門 礎石直下）の動・植物遺存体 Ⅱ
埋桶内最下層

1　アユ椎骨　　1.0mm

3　ネズミ科胸椎　　1.0mm

5　エンマコガネ属後胸腹板　　1.0mm

6　コウカアブ蛹　　1.0mm

8　ショウジョウバエ科？蛹　　1.0mm

9　ヒメイエバエ科？蛹　　1.0mm

10　クロバエ科蛹　　1.0mm

12　ニクバエ科？蛹　　1.0mm

表９　遺物観察表１（土器・陶磁器）

土器・陶磁器　※文様位置①外面②内面③口縁④見込⑤底部裏⑥胴

調査次数	図	番号	種類	器種	産地	出土地	層序	文様	器高	口径	底径	高台高	高台径	備考
41	18	1	陶器	碗	肥前	Tr1	11層		(3.6)	復4.2		0.4		被熱
41	18	2	陶器	甕	越前	Tr1	10or11層	①②鉄泥	(11.3)	復41.2				
41	20	3	陶器	碗	肥前	Tr2	10層上面		(3.7)	復13.6				
41	20	4	陶器	碗	肥前	Tr2	10or12層		3.5	復11.0		0.3	6.0	
41	20	5	陶器	碗	瀬戸・美濃	Tr2	10or12層		(1.8)	復12.0				
41	20	6	陶器	片口鉢	備前	Tr2	10or12層		(4.9)	復15.6				
41	20	7	磁器	皿	肥前	Tr2	10or12層	③圏線⑤砂目	(2.5)		復8.8	0.6	復8.8	
43	35	11	土師器	皿		南落ちか	埋土		2.2	復10.4				
43	35	12	陶器	焙烙		溝1(門内)	底付近		(7.2)	復22.1				
43	35	13	陶器	碗	在地？	掘り下げ中	攪乱土		(6.3)	復10.4				
43	35	14	陶器	碗	肥前	掘り下げ中	攪乱土		(3.8)	復10.2				
43	35	15	陶器	碗		溝1(門内)	底付近		4.7	復9.0				
43	35	16	陶器	碗	瀬戸・美濃	溝2	埋土		(2.3)		復4.8	1.0	復4.8	
43	35	17	陶器	灯明皿	信楽？	溝1(門前)	埋土	④目跡	2.4	復10.6	復3.3			
43	35	18	陶器	灯明皿	信楽？	溝1(門内)	底付近	③煤付着④目跡	2.1	復10.0	復3.8			
43	35	19	陶器	灯明皿	信楽？	溝1(門内)	底付近	②カキメ3条／単位	1.9	復10.4	復3.6			工具痕？
43	35	20	陶器	灯明皿	在地？	現代攪乱	埋土	②カキメ4～5条／単位③煤付着	1.7	8.0	3.6			
43	35	21	陶器	灯明皿	信楽？	現代攪乱	埋土	③煤付着	2.5	11.4	4.0			
43	35	22	陶器	灯明皿	信楽？	溝1(門内)	埋土	煤付着	2.2	復10.6	復4.3			
43	35	23	陶器	灯明皿	信楽？	現代攪乱	埋土		2.5	復10.6	復4.6			
43	35	24	陶器	灯明皿	在地	現代攪乱	埋土		2.2	復10.6	復3.4			
43	35	25	陶器	灯明皿？	信楽？	溝1(石抜部)	底付近	①③煤付着	(2.7)	復13.8				
43	35	26	陶器	灯明皿	信楽？	南落ちか	黒色土		1.7	復11.8	復4.4			
43	35	27	陶器	灯明皿	信楽	溝1(石抜部)	底付近		1.8	復10.6	復4.5			
43	35	28	陶器	擂鉢	関西系	上層礎石1下	緑凝灰岩礫層		(4.3)					
43	35	29	陶器	擂鉢	関西系	現代攪乱	埋土		(4.2)	復28.0				
43	35	30	陶器	鉢	越前	現代攪乱	埋土		(7.1)	復31.0				
43	35	31	陶器	蓋		溝1(石抜部)	底付近		1.1	復7.5	復5.5			
43	36	32	陶器	鍋	在地	溝1(門前)	埋土		(8.3)	復21.2				把手
43	36	33	陶器	鍋	在地	溝1(門前)	埋土	①煤付着	(7.9)	復20.0				把手
43	36	34	陶器	徳利	在地	溝1(門内)	底付近	①刻印	(12.1)					
43	36	35	陶器	瓶		溝1(石抜部)	底付近		(8.7)	復4.4				
43	36	36	陶器	鉢	越前	現代攪乱	埋土	①②鉄泥	(9.3)		復24.0			
43	36	37	磁器	碗	瀬戸	溝1(門前)	埋土	①菊③二重圏線④圏線⑥二重圏線	5.2	復11.0	復4.2	0.2	復4.2	
43	36	38	磁器	碗	肥前	溝1(門内)	底付近	①松、欄干③二重圏線	(3.6)	復11.2				
43	36	39	磁器	碗	肥前	溝1(門前)	埋土	①蝙蝠、雲③青海波④圏線	(4.0)	復9.4				
43	36	40	磁器	碗	肥前	溝1(石抜部)	埋土	①滝？	(3.1)	復7.1				
43	36	41	磁器	碗	肥前	溝1(石抜部)	埋土	①草花？、圏線④蝶、圏線⑥二重圏線	(5.5)		復5.6	0.7	復5.6	
43	36	42	磁器	碗	在地	溝1(門内)	底付近	①草、帯線④圏線⑥二重圏線	(4.7)		復4.4	0.8	復4.4	
43	36	43	青磁	蓋	肥前	現代攪乱	埋土	②四方襷④二重圏線	2.9	復9.8	復3.8	0.5	復3.8	
43	36	44	磁器	蓋	肥前	掘り下げ中	攪乱土	①草花②二重圏線④花⑥二重圏線	3.0	復10.5	6.2	0.9	6.2	
43	37	45	磁器	輪花皿	肥前	溝1(門前)	[illegible]	③口紅④山水、遠山、楼、欄干	2.2	復10.2	5.6	0.5	5.6	
43	37	46	磁器	輪花皿	肥前	現代攪乱	埋土	③口紅④山水欄干	2.3	復10.8	復6.8	0.4	復6.8	
43	37	47	磁器	皿	肥前	現代攪乱	埋土	④山水欄干	(1.6)		5.9	0.6	5.9	被熱
43	37	48	磁器	蓋付鉢	肥前	溝1(石抜部)	埋土	①桔梗唐草⑥二重圏線	(9.1)		復8.5	0.7	復8.5	
43	37	49	青磁	火入れ		溝1(石抜部)	埋土		(4.9)					
44	43	74	磁器	小坏		30Tr4(南半)	埋土	⑤砂付着	2.6	復6.7	2.6	0.6	2.6	
45	47	75	陶器	皿	瀬戸・美濃	表門	15層		2.6	復10.4	復6.0			
47	47	76	陶器	碗		控柱掘り方内	24層		(2.0)					
52	47	77	陶器	碗	瀬戸・美濃	柵構	9層		(1.6)					被熱
45	47	78	陶器	皿	瀬戸・美濃	水路石直下			(2.3)					
45	47	79	陶器	擂鉢	[illegible]	水路石直下		②擂目10条／単位	(6.0)					
52	47	80	陶器	甕	備前	橋上	18層か		(4.5)		復32.2			
47	47	81	陶器	香炉？	肥前	鏡柱礎石下	24層		(2.1)		復6.6	0.7	復6.6	
52	47	82	陶器	壺	備前	橋上	18層か		(4.5)	復15.0				
45	47	83	陶器	鉢	備前？	橋内	18層		(11.9)					
45	47	84	磁器	小坏	中国？	トレンチ	8層	②圏線	(1.9)	復6.4				
47	47	85	磁器	碗	中国？	トレンチ	7層	①②圏線	(2.3)					
52	47	86	白磁	皿か	中国？	橋内	19or20層		(1.3)					
52	47	87	磁器	皿	中国？	橋内	19or20層	③圏線④二重圏線	(1.8)	復10.2				被熱
45	47	88	磁器	皿	肥前	礎石側面付近	4層	①圏線②草③圏線⑥二重圏線	(1.4)		復16.6	0.5	復16.6	
46	57	135	土師器	皿		Tr1	15層	②煤付着	2.7	復13.5	復4.7			
46	57	136	陶器	碗	肥前	Tr1	旧トレンチ埋土	①鉄絵	(4.0)	復10.4				
46	57	137	陶器	碗	肥前	Tr1	旧トレンチ埋土		(4.4)		復4.9	0.7	復4.9	
46	57	138	陶器	碗	常滑	Tr1	旧トレンチ埋土	⑤常154	(3.0)		4.2	0.9	4.2	
46	57	139	陶器	皿	肥前	Tr1	旧トレンチ埋土	⑤碁笥底	(2.7)	復9.0	復2.5			
46	57	140	陶器	皿	肥前	Tr1	旧トレンチ埋土	①②煤付着④目跡4ヶ所⑤碁笥底	3.9	復12.9	4.3	0.2	4.3	
46	57	141	陶器	土鍋		Tr1	旧トレンチ埋土		(5.4)	復20.2				被熱
46	57	142	陶器	甕	越前	Tr1	旧トレンチ埋土	①②鉄泥	(9.4)	復55.0				
46	57	143	磁器	碗	肥前	Tr1	旧トレンチ埋土	①竹	(5.9)	復10.0				
46	57	144	磁器	筒形碗	肥前系	Tr1	旧トレンチ埋土	①菊花、斜格子③二重圏線④二重圏線、五弁花⑤二重圏線⑥圏線	6.0	復7.8	3.7	0.4	3.7	
46	57	145	磁器	皿	肥前系	Tr1	旧トレンチ埋土	①圏線②亀甲文、蔦、二重圏線④圏線、蔦⑤蛇ノ目釉剥ぎ⑥圏線	3.6	復13.6	復10.0	0.3	復10.0	
46	57	146	磁器	皿	中国	Tr1	15層	②雲龍	2.2	復10.8	復6.8	0.4	復6.8	
46	62	187	土師器	皿		Tr2	15層	①②煤付着	(2.4)	復13.7				
46	62	188	土師器	皿		Tr2	15層		2.3	復10.6	復8.6			
46	62	189	陶器	皿	肥前	Tr2	24層		(2.6)	復12.8				被熱
46	62	190	陶器	輪花皿	肥前	Tr2	7層		(2.9)	復13.5				
46	62	191	磁器	碗	中国	Tr2	14層	①二重圏線、雨龍⑥二重圏線	(2.1)		5.0	0.6	5.0	
48	66	195	陶器	皿	肥前	雁木橋	近世整地層内		(1.6)	復9.4				
50	70	198	陶器	擂鉢	越前	Tr1	2層	①②鉄泥	(4.4)		復14.8			
50	70	199	磁器	筒形碗	肥前系	Tr1	3層	①菊花、斜格子、井桁③圏線	(4.4)	復9.0				被熱か
50	70	200	磁器	皿	肥前系	Tr1	1層	①圏線②松、波④二重圏線⑤圏線⑥二重圏線	(3.4)	復13.8	復9.2	0.5	復9.2	
50	73	212	陶器	碗	肥前	Tr2	3or4層	①二重圏線	(5.2)	復10.8				
50	73	213	磁器	瓶	肥前	Tr2	3or4層	①草⑥圏線	(5.1)		復5.4	0.7	復5.4	
50	75	218	陶器	皿	肥前	Tr3	4層		(2.1)	復32.6				二彩手
50	75	219	陶器	鉢		Tr3	3層		(4.6)	復24.0				
50	75	220	磁器	筒形碗	肥前	Tr3	2or3層	①菊、斜格子、圏線④五弁花、二重圏線⑥圏線	(2.1)		復3.8	0.5	復3.8	
50	75	221	白磁	瓶		Tr3	4層	⑤砂目	(6.1)		復5.6	0.6	復5.6	
50	77	232	陶器	皿	肥前	Tr4	2層		(1.9)	復40.0				
50	77	233	磁器	皿	肥前	Tr4	3層	⑤二重圏線、「天下太平」	(1.7)		復6.8	0.6	復6.8	
50	79	235	陶器	碗	肥前	Tr5	3層	①鉄絵	(5.3)		復5.0	0.9	復5.0	

表10　遺物観察表２（土器・陶磁器）

土器・陶磁器　※文様位置①外面②内面③口縁④見込⑤底部裏⑥側

調査次数	図	番号	種別	器形	産地	出土地	層序	文様	器高	口径	底径	高台高	高台径	備考
50	79	236	陶器	碗	肥前	Tr5	3層	①②刷毛目	(4.1)		復5.6	0.8	復5.6	
50	79	237	陶器	鉢	唐津	Tr5	1層	①②鉄絵	(6.2)		復20.8			
50	79	238	陶器	擂鉢	備前	Tr5	2層	②櫛目10条／単位	(6.0)	復36.6				
50	79	239	陶器	甕	唐津	Tr5	2層	①鉄泥、工具痕②鉄泥	(4.6)		復15.2			
50	79	240	磁器	碗	肥前	Tr5	3層	①青①雷文帯	(5.0)	復14.6				色絵
50	79	241	磁器	碗	肥前	Tr5	1層		(5.5)	復10.2				
50	79	242	磁器	小坏	肥前	Tr5	4層	⑤砂付着	(3.1)		復3.1	0.5	復3.1	
50	79	243	青磁	香炉	肥前	Tr5	1層	⑤砂目	(3.7)		5.3	0.6	5.3	
53	87	252	陶器	鉢			9層		(3.0)					
53	87	253	磁器	碗			2層	③圏線	(3.2)	復12.8				
53	87	254	磁器	碗	肥前		1層	⑤砂目	(2.6)		復4.8	0.8	復4.8	
53	87	255	磁器	碗	肥前		7層		(1.5)		復6.6	0.6	復6.6	

表11　遺物観察表３（瓦）

瓦

調査次数	図	番号	器種	分類	出土地	層序	備考	刻印	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r
41	20	8	軒丸	新型か	Tr2	3or4層																				
41	20	9	（平）		Tr2	10or12層	断面サンドイッチ		(31.9)	(18.3)		2.2	5.2	2.0												
43	38	51	軒丸	橘2	土坑	埋土																				
43	38	52	軒丸	橘5or6	掘り下げ中	撹乱土																				
43	38	53	軒丸	橘6	溝5	埋土																				
43	38	54	軒丸	橘14	掘り下げ中	撹乱土			(5.0)				14.7			14.7	10.4	0.4	1.2							
43	38	55	軒丸	橘18	掘り下げ中	撹乱土																				
43	38	56	軒丸	橘18	溝1(門内)	埋土																				
43	38	57	丸		土坑	埋土			(18.5)	16.4			7.4	2.3												
43	38	58	丸		溝4	埋土			(15.7)	15.8	4.2		(7.5)	2.1	5.4											
43	39	59	丸		溝4	埋土	吊り紐痕 断面サンドイッチ		(18.7)	(12.2)			7.0	2.4												
43	39	60	左軒桟	平23	現代撹乱	埋土		❖に線																		
43	39	61	（右軒桟）	平41	近代？掘り込み	埋土																				
43	39	62	軒平／軒桟	三葉	近代？掘り込み	埋土																				
43	39	63	（左軒桟）	平68	溝1(門前)	埋土			(5.6)					2.0		4.5	2.3	0.6	1.6		2.4					
43	39	64	軒平／軒桟	新型	掘り下げ中	撹乱土		○に大																		
43	39	65	（平）		土坑	埋土			(27.0)	(16.6)			4.1	1.9												
43	39	66	棟込		溝1(門前)	埋土			16.2	10.3			5.4	1.4												
43	39	67	棟込		溝4	埋土			(9.0)	(10.9)				1.9												
43	39	68	棟込		溝4	埋土			(8.9)	12.1																
43	39	69	棟込		溝4	埋土	断面サンドイッチ		(9.8)	(10.0)				2.0												
44	41	70	軒丸	菊1	30Tr1溝6	瓦堆積込埋土または撹乱		「作」？	(2.8)	16.0			(11.3)			(16.0)	(11.1)									
44	41	71	平／桟		30Tr1溝6	瓦堆積込埋土または撹乱		「文郎」																		
44	41	72	平／桟		30Tr1溝6	瓦堆積込埋土または撹乱		「文子」																		
47	48	89	軒丸	橘20	近代水路下	近代撹乱か			(2.6)							(9.7)	(7.6)	0.6	2.4							
52	48	90	丸		控柱掘り方内	24層			(26.0)	15.9	(1.0)		6.8	1.6												
52	48	91	丸		控柱掘り方内	24層	被熱か		(23.8)	(12.7)	3.8		7.4	1.9	4.5											
47	48	92	平／桟		控柱掘り方内	24層		寅																		
47	48	93	平／桟		控柱掘り方内	24層		❖に線																		
47	49	94	軒平	新型	控柱掘り方内	24層	17世紀代か																			
52	49	95	軒平	平26か	控柱掘り方内	24層	柱と接する																			
47	49	96	軒平	平44	近代水路下	近代撹乱か																				
47	49	97	鬼		柱掘り方内	24層	被熱		(13.3)	(24.8)																
47	49	98	棟込		水路石積				13.5	(9.8)			4.1	1.6												
46	58	147	軒丸	巴20	Tr1	旧トレンチ埋土			(3.9)				14.9			14.9	11.0	0.9	2.1							
46	58	148	軒丸	巴20	Tr1	旧トレンチ埋土																				
46	58	149	軒丸	橘10or11	Tr1	旧トレンチ埋土																				
46	58	150	軒丸	橘10or11	Tr1	旧トレンチ埋土																				
46	58	151	軒丸	橘10or11	Tr1	旧トレンチ埋土																				
46	58	152	丸		Tr1	旧トレンチ埋土	釉化		28.4	(11.4)	3.3	(3.7)	(7.0)	1.6	4.2											
46	58	153	（右軒桟）	平18	Tr1	旧トレンチ埋土	滑止		(14.1)					1.7		3.9	2.7	0.7	1.6	3.2	2.3				1.4	
46	58	154	右軒桟	平41	Tr1	旧トレンチ埋土			(4.9)					2.0		4.9	2.6	0.4	1.6		1.6					
46	58	155	右軒桟	平41	Tr1	旧トレンチ埋土																				
46	58	156	右軒桟	平41	Tr1	旧トレンチ埋土																				
46	58	157	右軒桟	平41	Tr1	旧トレンチ埋土																				
46	58	158	右軒桟	平45	Tr1	旧トレンチ埋土																				
46	58	159	左軒桟	平51	Tr1	旧トレンチ埋土																				
46	58	160	右軒桟か	平55か	Tr1	旧トレンチ埋土																				
46	58	161	右軒桟か	平55か	Tr1	旧トレンチ埋土																				
46	58	162	軒平／軒桟	三葉	Tr1	旧トレンチ埋土																				
46	58	163	軒平／軒桟	三葉	Tr1	旧トレンチ埋土	滑止		(13.3)	(13.2)			(3.4)	1.9						1.4					1.7	
46	59	164	右軒桟	平66	Tr1	旧トレンチ埋土	滑止	「文四」	(8.0)	(16.3)			(8.0)	2.3		4.7	2.9		2.1		2.5					
46	59	165	右軒桟	平66	Tr1	旧トレンチ埋土																				
46	59	166	（左軒桟）	平61	Tr1	旧トレンチ埋土																				
46	59	167	右桟		Tr1	旧トレンチ埋土			30.3	(19.0)	6.6	3.0	7.4	2.0												5.5
48	66	196	軒丸	橘10or11	番水橋	裏栗石層																				
49	27	197	鳥衾	橘20	太鼓櫓石積	新栗石層																				
50	70	201	軒丸	橘14	Tr1	3層																				
50	70	202	軒丸	橘15	Tr1	1層																				
50	70	203	軒丸	橘15	Tr1	1層																				
50	70	204	軒丸	橘11	Tr1	1層																				
50	70	205	軒丸	橘17	Tr1	1層			(2.4)				(12.0)			(12.0)	(9.9)	0.5	2.4							
50	70	206	軒丸	橘17	Tr1	1層																				
50	70	207	軒丸	橘17	Tr1	1層																				
50	70	208	軒丸		Tr1	1層																				
50	70	209	丸		Tr1	1層		(壬)	(18.9)	(11.6)	3.1	(5.5)	7.6	2.0	4.7											
50	71	210	隅軒		Tr1	1層			(15.0)	(13.9)			(3.9)	2.2												
50	71	211	左目板		Tr1	3層		「文見」	(12.9)	(22.8)			4.0	2.1												1.8

表12　遺物観察表４（瓦）

瓦

調査次数	図	番号	器種	分類	出土地	層序	備考	刻印	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r
50	73	214	軒平	平26	Tr2	3or4層																				
50	73	215	軒平	平96	Tr2	1or2層																				
50	73	216	軒平	平97	Tr2	3or4層																				
50	73	217	丸		Tr2	1or2層		❖																		
50	75	222	軒丸	蓮6	Tr3	5層			(2.3)	(13.7)			(10.8)			(7.2)	(4.2)		2.1							
50	75	223	軒丸	蓮14	Tr3	2or3層																				
50	75	224	軒丸	蓮7	Tr3	2層																				
50	75	225	丸		Tr3	4層			(19.8)	15.1				1.8												
50	75	226	軒平	平26	Tr3	4層		[illegible]																		
50	75	227	軒平／軒桟	平97	Tr3	2or3層																				
50	75	228	（右軒桟）	平63	Tr3	2or3層																				
50	75	229	軒平	平96	Tr3	2or3層																				
50	75	230	軒平	平97	Tr3	2層																				
50	75	231	平／桟		Tr3	2or3層		[illegible]																		
50	77	234	軒丸	巴15	Tr4	2層																				
50	80	244	軒丸	蓮1	Tr5	4層																				
50	80	245	軒丸	蓮7	Tr5	3層																				
50	80	246	軒丸	蓮13	Tr5	2層																				
50	80	247	軒丸	蓮15	Tr5	2層																				
50	80	248	鬼	蓮9	Tr5	1層																				
50	80	249	右目板		Tr5	3層			(26.8)	(21.3)																
51	84	251	軒平	平91	Tr2	撹乱中																				

表13　遺物観察表５（金属製品）

金属製品

調査次数	図	番号	器種	器種	分類	出土地	層序	幅	径	高	厚	a	b	c	d	e	f	g	h	i
47	50	99	鉄製品	釘		桶内	18層					(8.8)						0.4	0.4	
47	50	100	鉄製品	釘		桶内	18層					(7.1)						0.8	0.5	
47	50	101	鉄製品	釘	頭巻	桶内	19or20層					(9.0)	1.6	0.8	(8.5)			0.6	0.5	
47	50	102	鉄製品	釘	頭巻	桶内	19or20層					(8.5)	1.6	0.8	(7.9)			0.5	0.5	
47	50	103	鉄製品	釘	頭巻	桶内	19or20層					5.9						0.4	0.3	
47	50	104	鉄製品	釘		桶内	19or20層					(6.4)						0.5	0.4	
47	50	105	鉄製品	釘		桶内	19or20層					(6.2)	(0.9)					0.3	0.3	
52	50	106	鉄製品	釘	頭巻	桶内	19or20層					(5.3)	(0.9)	0.7	4.8			0.6	0.6	
52	50	107	鉄製品	釘		桶内	19or20層					(2.1)	0.6					0.5	0.5	
52	50	108	鉄製品			桶内	19or20層					(8.0)						1.8	0.9	
52	50	109	鉄製品			桶内	19or20層					(4.5)	4.4					2.3	0.8	
45	50	110	鉄	鉄滓	溶解する	礎石側面付近	4層					6.4	5.4					5.4	1.7	
47	50	111	銅製品	銅銭	「寛永通宝」		掘り下げ中		径2.4											
47	50	112	銅製品	銅銭		桶底	21層		径2.3											
47	50	113	銅製品	銅銭	「寛永通宝」	水路底付近	近世層か		径2.2											
47	50	114	銅製品	銅銭	「寛永通宝」	水路底付近	近世層か		径2.3											
46	60	168	鉄製品			Tr1	18層					(14.0)	(7.6)					7.0	2.3	
46	62	192	鉄製品	釘	頭巻	Tr2	24層					4.6	0.8		0.5	4.1		0.4	0.3	
46	62	193	銅製品			Tr2	5層					(3.7)	(1.2)					1.1	0.5	
50	80	250	鉄製品	釘		Tr5	4層					(5.3)		0.4				0.3	0.3	
53	87	256	鉄製品	釘			幕末路盤面中か					(4.4)						0.9	0.7	

表14　遺物観察表６（石製品）

石製品

調査次数	図	番号	分類	調査区	出土地	層序	幅	長さ	厚さ
43	37	50			近代？掘り込み	埋土	0.6	2.5	0.5

表15　遺物観察表７（骨製品）

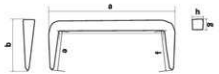
骨

調査次数	図	番号	器種	出土地	層序	幅	長さ	厚さ
45	53	134	獣骨	トレンチ	8層	(5.1)	(13.1)	2.5

表16　遺物観察表８（木製品）

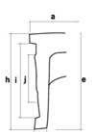
木製品

図版	調査区	番号	分類	出土地	層序	文字	長さ	幅	厚さ	備考
42	25	10	栓	36層			(20.9)	1.1	0.6	
44	42	22	杭根かき	30下2d	堆積層上		(34.1)	(27.4)	(7.9)	
52	51	115	漆器椀	植内	18層		(5.7)	現14.4		①②漆赤
47	51	116	漆器椀	貯木槽々方内	24層		(6.6		7.2	①漆黒②漆赤
45	51	117	漆器椀	トレンチ	15or16層		3.2	現14.2	現5.9	漆塗り口赤③黒
47	51	118	漆器椀	トレンチ	15層		4.0	現13.2	現6.4	①②漆赤③漆黒
47	51	119	屑樹材か	植内	18層		(42.3)	6.4	0.5	端部を中心に腐熟
45	51	120	屑樹か	植内			(34.8	7.5	0.6	一部加工痕か
47	51	121	板製か	植内	18層		(18.8)	(7.0)	0.7	木釘と表皮巻取
47	51	122	屑樹材か	植内	18層		(21.0)	6.8	0.4	
47	51	123	屑樹材か	植内	18層		(20.8)	6.0	0.4	木釘
47	52	124		トレンチ	8層		24.9	2.6	2.2	鉄釘
52	52	125		植内	18層		17.5	(1.6)	0.8	重ね留
52	52	126	漆木か	植内	21層		(25.0)	1.7	0.4	
52	52	127	漆木か	植内	21層		(21.4)	1.5	0.5	
52	52	128	漆木か	植内	21層		(21.0)	1.6	0.4	
52	52	129	漆木か	植内	21層		(21.0)	1.6	0.4	
52	52	130	漆木か	植内	21層		(31.8)	1.7	0.5	芽材
45	52	131	杭	トレンチ	8層		(17.0)	10.9	9.7	
52	53	132	杭	貯木本体	24層		(46.1)	28.1	29.5	チリ材、芯輪対称
47	53	133	杭	貯木槽々方内	24層		(18.1)	10.4	(4.6)	
46	60	168	笄	Tr1	15層		24.4	0.8	0.4	
46	60	170	笄	Tr1	15層		(22.3)	0.7	0.6	
46	60	171	笄	Tr1	15層		21.3	0.8	0.6	
46	60	172	笄	Tr1	15層		22.1	0.7	0.6	
46	60	173	笄	Tr1	15層		21.8	0.8	0.4	
46	60	174	笄	Tr1	15層		22.0	0.7	0.6	
46	60	175	笄	Tr1	15層		21.7	0.6	0.4	
46	60	176	笄	Tr1	15層		21.5	0.9	0.6	
46	60	177	笄	Tr1	15層		(19.7)	0.7	0.4	
46	60	178	笄	Tr1	15層		21.5	0.6	0.3	
46	60	179	笄	Tr1	15層		(19.0)	0.6	0.5	
46	60	180	笄	Tr1	15層		(15.7)	0.8	0.6	
46	60	181	笄	Tr1	15層		(16.8)	1.3	0.5	
46	60	182	笄	Tr1	15層		(17.5)	0.8	0.5	
46	60	183	笄	Tr1	15層		(19.0)	0.8	0.6	
46	61	184	漆器椀	Tr1	15層		(9.8)		現4.0	①漆黒②漆赤
46	61	185	木簡	Tr1	15層		17.0	3.6	0.3	
46	61	186	爪or箸	Tr1	15層		(12.2)	(5.5)	0.7	
46	62	194	笄	Tr2	15層		25.0	0.8	0.6	



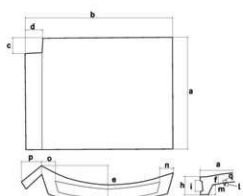
a：全長、　b：全幅、　c：本体幅、　d：胴長
e：釘長1、　f：釘長2、　g：胴幅、　h：胴厚、　i：釘頭

釘・鎹の計測方法

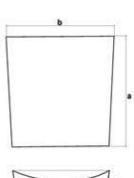


軒丸瓦

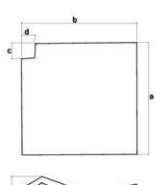
丸瓦



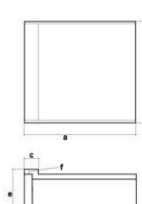
軒平瓦



平瓦



桟瓦



雁振瓦

瓦の計測方法

第88図　遺物計測方法

写 真 図 版

図版1

第41次調査第１トレンチ遠景(北から)

第41次調査第１トレンチ南西壁(北東から)

第41次調査第１トレンチ北東壁(南西から)

第41次調査第２トレンチ南西壁(北東から)

第42次調査第１調査区南東側(北西から)

第42次調査第１調査区北西側(南東から)

第42次調査第２調査区全景(南西から)

第42次調査第２調査区(南から)

図版2

第43次調査区全景（西から）

第43次調査上層礎石取り外し前（南西から）

第43次調査礎石根固め石１・２（南東から）

第43次調査礎石根固め石３・４（南西から）

第43次調査礎石根固め石５（北西から）

第43次調査溝状遺構 1（南西から）

第43次調査溝状遺構 2（南から）

第43次調査溝状遺構 4 土層断面（南西から）

第43次調査溝状遺構 4 ～ 6・土坑・ピット 1（南西から）

第43次調査石列（南西から）

第43次調査ピット 2（北西から）

第43次調査下層礎石 1・5（北西から）

図版4

第43次調査下層礎石４(北西から)

第43次調査櫓台石垣裾部(西から)

第44次調査第１トレンチ全景(南西から)

第44次調査第２トレンチ全景(南西から)

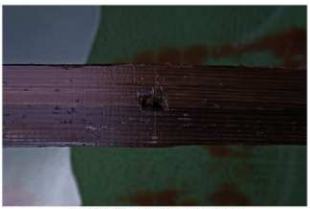
第45次調査掘り下げ状況(東から)

第45次調査区全景

第47次調査掘り下げ状況(南東から)

第52次調査桶完掘状況(南東から)

第52次調査桶解体中合釘状況(南西から)


第52次調査桶底板側面合釘痕

第46次調査第1トレンチA面(南西から)

第46次調査第2トレンチ幕末路盤面(北東から)

第46次調査第2トレンチC面(北西から)

第46次調査第1トレンチE面(北東から)

第46次調査第1トレンチ石垣背面(北西から)

第48次調査区全景(北東から)

図版6

第49次調査区全景(南西から)

第50次調査第1トレンチ全景(南西から)

第50次調査第2トレンチ全景(南西から)

第50次調査第3トレンチ全景(南西から)

第50次調査第4トレンチ全景(南西から)

第50次調査第5トレンチ全景(南西から)

第51次調査第1トレンチ全景(南西から)

第51次調査第２トレンチ全景(南西から)

第51次調査第３トレンチ全景(南西から)

第53次調査区全景(北東から)

第53次調査区南東壁(北西から)

中ノ御門周辺オルソ

図版8

第20図 7

第35図20

第35図21

第35図27

第36図34

第37図45

第37図50

第38図54

第39図67・68・69

第41図70

第42図73

第47図75

第47図82

図版10

第47図83

第47図87

第49図97

第50図101・102

第50図108

第51図118

第52図124

第52図126・127・129

第57図140

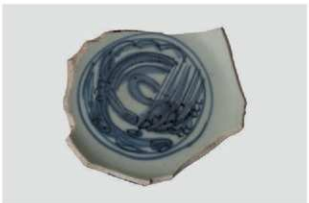
第57図146

第60図168

第62図185

図版12

第62図189



第62図191

第70図200

第79図237

第79図238

第80図244

第87図252

第87図253

報　告　書　抄　録

ふりがな	しせきとっとりじょうあとつけたりたいこうがなるはっくつちょうさほうこくしょⅥ
書名	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅵ
副書名	第41～53次調査
巻次	Ⅵ
シリーズ名	鳥取市文化財調査報告書
シリーズ番号	第33集
編著者名	坂田邦彦
編集機関	鳥取市教育委員会
所在地	〒680-8571　鳥取県鳥取市幸町71番地
発行年月日	令和４年(2022)３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡	北緯	東経	調査次数 調査期間	調査面積(㎡)	調査原因
鳥取城跡附太閤ヶ平(第41次)（とっとりじょうあとつけたりたいこうがなる）	鳥取市東町（とっとりしひがしまち）	31201	2-0211	35°30′22″	134°14′15″	20170612～20171109	610	復元整備
鳥取城跡附太閤ヶ平(第42次)（とっとりじょうあとつけたりたいこうがなる）	鳥取市東町（とっとりしひがしまち）	31201	2-0211	35°30′22″	134°14′15″	①20180323～20180327 ②20180404～20180411	13.3 3.3	復元整備
鳥取城跡附太閤ヶ平(第43次)（とっとりじょうあとつけたりたいこうがなる）	鳥取市東町（とっとりしひがしまち）	31201	2-0211	35°30′24″	134°14′17″	20180508～20180912	130.7	復元整備
鳥取城跡附太閤ヶ平(第44次)（とっとりじょうあとつけたりたいこうがなる）	鳥取市東町（とっとりしひがしまち）	31201	2-0211	35°30′22″	134°14′15″	20180625～20180713	16.4	復元整備
鳥取城跡附太閤ヶ平(第45次)（とっとりじょうあとつけたりたいこうがなる）	鳥取市東町（とっとりしひがしまち）	31201	2-0211	35°30′22″	134°14′15″	20181015～20181030	21.3	復元整備
鳥取城跡附太閤ヶ平(第46次)（とっとりじょうあとつけたりたいこうがなる）	鳥取市東町（とっとりしひがしまち）	31201	2-0211	35°30′22″	134°14′15″	20190603～20190703	78.2	復元整備
鳥取城跡附太閤ヶ平(第47次)（とっとりじょうあとつけたりたいこうがなる）	鳥取市東町（とっとりしひがしまち）	31201	2-0211	35°30′22″	134°14′15″	20190703～20190806	21.3	復元整備
鳥取城跡附太閤ヶ平(第48次)（とっとりじょうあとつけたりたいこうがなる）	鳥取市東町（とっとりしひがしまち）	31201	2-0211	35°30′22″	134°14′15″	20191007～20191008	6.6	復元整備
鳥取城跡附太閤ヶ平(第49次)（とっとりじょうあとつけたりたいこうがなる）	鳥取市東町（とっとりしひがしまち）	31201	2-0211	35°30′24″	134°14′17″	20191009～20191011	4.6	復元整備
鳥取城跡附太閤ヶ平(第50次)（とっとりじょうあとつけたりたいこうがなる）	鳥取市東町（とっとりしひがしまち）	31201	2-0211	35°30′27″	134°14′17″	20191015～20191127	7.3	確認調査
鳥取城跡附太閤ヶ平(第51次)（とっとりじょうあとつけたりたいこうがなる）	鳥取市東町（とっとりしひがしまち）	31201	2-0211	35°30′28″	134°14′18″	20200302～20200324	7.4	確認調査
鳥取城跡附太閤ヶ平(第52次)（とっとりじょうあとつけたりたいこうがなる）	鳥取市東町（とっとりしひがしまち）	31201	2-0211	35°30′22″	134°14′14″	20200417～20200603	21.3	復元整備
鳥取城跡附太閤ヶ平(第53次)（とっとりじょうあとつけたりたいこうがなる）	鳥取市東町（とっとりしひがしまち）	31201	2-0211	35°30′22″	134°14′14″	20201104～20201106	8.8	復元整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鳥取城跡附太閤ヶ平（第41～53次調査）	城跡	中世・近世	石垣、雁木、桝 門跡、水路、土坑	陶器、磁器、木製品	

要約

大手門である中ノ御門表門礎石直下より焼け落ちた便槽を発見、近世初頭に門が造られる以前は大手でなく、火災の後に桝形石垣が築かれたことが判明した。また、桝形石垣は２段階でつくられており、近世中期以降に現在の高さとなったことを確認、石垣整備過程の一端が明らかとなった。

太鼓御門の調査では、現存する門礎石がすべて近代以降の再加工および移動が確認されたが、下部より近世の礎石根固め石が検出されたことにより本来の礎石位置が復元可能となった。また、新旧２つ存在する門礎石を追加で検出した。

史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅵ
－第41～53次調査－

発　行　令和４年(2022)３月31日

鳥取市教育委員会文化財課
編　集　〒680-8571鳥取県鳥取市幸町71番地
TEL(0857)30-8421

日ノ丸印刷株式会社
印　刷　鳥取県鳥取市寿町915
〒680-0813　電話(0857)22-2248